北伊勢四郡を返し給ふに故障あるべき筈ござりまぜぬ』

四郎右衛門は此處ぞと思ふやうに、

『御領地お取り替への儀、夫にて落着在し申さう、なれど何事にも油斷なき筑前殿、夫だけにてはお心濟あろまい、御家老有樂齋殿を初め、瀧川三郎兵衛、佐久間駿河守、土方勘兵衛の子供または母親を人質として遣はさるゝ儀、天下靜謐を圖らせたまふため、お聞き入れあらうと推量、伊勢尾張兩國内に新しく築かせられた城築、雙方にて取り壞つこと、これも無論の儀と存じ申す、皆御納得ござりませう哉』

信雄は夢の如く頷いた。

秀吉の謀計は兩人の使者に由つて思ひのまゝに運ばれた、平右衛門から提出される條件は、悉く秀吉の勝利を彩つた。

（七）

四郎右衛門と平右衛門とに說立てられた信雄は宛ら醉へるが如き狀であつた。

『態樣に御內意を承る上は、下世話に云ふ善は急げ、今より歸つて思召の程を筑前公へ申上げ、御同意を得て參り申さう、四郎右衛門殿はお酒のお相手、お心の渝りなき樣、お介添なさせられ』と云ひ置いて立ち去つた。

秀吉の計畫は豫定の如く運ばれ行く。

信雄より提出した條件は、秀吉に取つて最も有利であつた、戰に六分の勝ある爲とは云へ、信雄の娘を表面養女の名儀に於て質に取るばかりか、家老儕輩からも然るべき人質を出させ、此方より北伊勢四郡を返す代り、彼方より伊賀一國、南伊勢七郡、尾張にて犬山、河田の兩地を割讓すると云ふは思ひの外のことであつた、夫に對して無論異議のある筈は無い、早々三助殿に對面、尙能く和睦の約束を堅め置かうと云ふので、其の月十一日伊勢桑名郡矢田河原に於て會見した、信雄は三十に手の屆かぬ血氣の大將、後には家康と云ふ後見もある、右大臣信長の次男と云ふ光りも添ふので、供人多くを引き率れ、悠然と出向いた、如才ない秀吉は宛ら主に對する如く謙遜つて仕へ册き、當座の引出物として紙衣二重、小判二十枚、不動國行の名刀一口を贈り、先日來伊勢の國中にて分捕した兵糧三萬五千俵を其の儘返した、信雄は思ひの外に手厚く眞心ある秀吉の仕方に感じ、以來は親子同樣たるべ

き旨を誓つて、其の日の會見は事畢つた、殘るは家康との關係である。

信雄とは和睦しても、家康斯くてある上は、秀吉長く枕を高うすることが出來ぬ、殊に四國北國へ手を延して、四方に勢力ある大名を征服することが出來ぬ、延いては天下一統の志を完全に成し遂ぐることが出來ぬので、此機會を用ひ、信雄の仲裁に由つて家康とも和睦しやうとした、信雄も亦我爲に多くの家來郎黨と、多くの兵糧彈藥とを犧牲にして、有力な援助をして呉れた家康を今更袖にすることは爲らぬと同時に、武士の口から和睦の誓約をし、父子同樣たるべき約束までした秀吉を、二度敵にすることは協はぬ、羽柴德川兩家の間に何れ程深い溝が出來ても、已れ間に立つて和睦の橋を渡さねばならぬので、家康に就いて、秀吉と和睦せられたき旨を懇々と申し入れた、家康は秀吉の仕方面白からず、此處に愁ひ和睦するとも、將來更に難問題を引き起すであらうと察しるので、容易に同心の狀なかつたが、信雄から段々との懇望に由つて、遂に和睦と決定した、此の時秀吉からは、兩家永く親族の親好を結ぶべく、家康の子於義丸を養子に貰ひ受け、別に酒井左衞門、石川伯耆守兩人より然るべき人質を差遣はされたしと云ふのであつた、秀吉は飽までも自分の地位を重んじた、小牧山の合戰には捗々しき捷利を得なかつたが、北伊勢に於いて十分の效果を得たのと、信雄の心を此方の手

に取り止めたのとで、家康には一步も讓らず十分有利の條件を出して、永く家康の頭を踏まうと考へた、けれど家康もさる者、和睦の事を承知した體で、於義丸養子の事及び家來から人質を送ることに就いては、一言の可否を云はず、十一月十五日岡崎の城へ歸つた、

爾う斯うして居る間に、越中の佐々成政が、加賀方面へ兵を繰り出し、能登の國へ討ち入つて、末森の城に薄つたとの報知があつた、けれど秀吉は指頭をも動かさなかつた、羅生の城に滯在して一圖に家康の返答を待つた、こゝに完全に和議を調へて、四方に志を成すべき地步を堅めやうと覺悟した。

（八）

家康はまだ十分に和睦の誓約をせぬのであつたが、信雄は直ちに人質同樣の意味に於ける息女を送り、有樂齋の實子、瀧川、佐久間、土方以下の實子または母親を人質に出し、如何樣とも秀吉次第たるべき旨の誓紙を差出して、竝に和睦成立した、伊勢尾張に蟠つて居た戰雲は十一月中旬悉く散り失せた、秀吉は羅生の城に於て春を迎へ、其の間に家康との講和條件を定めやう覺悟であつた。

然し信雄にして見ると、秀吉が長く羅生の城に滯陣するのは望むべき事でも無かつた、家康の返答

次第に由つては、一旦和睦したことが反古に爲つて、再び戰端を開く破目に爲るかも知れぬ、信雄は夫が厭であつた、秀吉を大阪へ返すは、家康を說いて、家康を說いて自分からも家康に使者を送つて、一日も早く和睦の實を調へらるゝやうと云ひ込んだから、家康も漸く子息於義丸を養子に遣はし、此戰局を無事に收めやうと誓つた、同時に石川伯耆守を秀吉の許へ遣はし、此の度滯りなく和睦の調つた歡びを陳べさせ、東尾張の所々に築き立てた城寨を取壞ち、戰功のあつた家來郎黨に加增感狀の沙汰をして、持城々々へ歸らせ、其月二十一日濱松へ凱旋した、秀吉も此れに安堵したらしく、伊勢を去つて、阪本へ退き、次で都から大阪の城へ歸つた。

けれど家康からまだ於義丸を送つて來ぬので、富田平左衞門、津田四郎左衞門、夫に信雄から瀧川三郎兵衞を附き添はせて濱松の城へ下し、家康に對し、早く於義丸を送らるゝやうと催促したのであつた。

秀吉は天下一統の志を成すに於て、捗々しい處置を取つた、何時の場合にも手を緩める時は、物忘れしやうに手を緩め、いざと爲つた時は迅雷耳を掩ふに遑なき程の處置を取つて、如何な難局も調へ行く、其の氣象から云ふと、今度の小牧山合戰は十分の成功と云ひ得なかつた、只一打に打ち平げやうとした望みが外れて、纔に六分の勝利を得たに過ぎなかつた、心の不平は遣る瀨も無い程に氣を腐らせた、此の戰役の不成功は、天下一統の望みを成すに於て、最も大きな障りであつたが、幾萬の大軍を以ても押潰すことの出來ぬ仇敵と知る上は、據なく和睦して、他の方面へ手を延ばさねばならぬ、然も北國と四國とに敵が動く、九州の山野には其の身の心に從はぬ大名の旗指物が樹つて居る、夫等の征討に心急く秀吉は、事實上の人質を家康から收めて後顧の憂ひ無いやうに爲たいのであつた、門閥ばかりあつて、思慮分別の足らぬ信雄は、矢田河原の會見に於て、悉く秀吉の手に籠絡せられたが、最も用心深く最も疑ひ深い家康は、容易に秀吉の望みに從はなかつた、富田、津田、瀧川三使の催促を受けて、早々於義丸を差上ぐべき旨返答したが、其の面色には油斷ならぬ影が潛んだ。

秀吉は大阪の城に在つて、此の使ひの歸るのを待つて居た、家康が秀吉の催促通り、人質を送らぬのと同じく、當時秀吉の心の儘にならぬのは家康と茶々どのとであつた、茶々どのはまた秀吉が心を籠めての情に動く狀を見せなかつた、秀吉はむしやくしや腹を今日も亦酒に遣つた、冬も早や半を過ぎて、鷺の森から猫間川の堤に風が吹き荒む、遠き山々には初雪の白いのも見えた、今日あたりは三人の使者が歸つて來るであらうと思つて居ると、果して富田平右衞門一行歸着の事が執次がれた。

秀吉は待ち難れたやうに『直ぐ此れへ』と云つた、側には丹羽五郎左衛門も居た、蒲生飛騨守、堀久太郎、長谷川藤五郎も居た、原は何れも信長の家來で、同僚交際をして居たのであつたが、近頃秀吉の威勢日に加はり行くに附けて、何時とは無く家來同樣の扱ひを受くるに至つた、秀吉が酒宴の相手には、いつも引き出されて相をする例であつた、三人の使者は旅裝束を解く間も無く出仕した。

（九）

『德川殿返答何うあつた』と秀吉は急いた聲であつた。

淺野彌兵衛は此の口上を執次ぐべく間に坐つた、平右衛門は彌兵衛に向つて大畧を申し述べる、彌兵衛は念を押すやうに、

『すると家康殿上洛は爲されぬ哺』

『勿論左樣の儀見え申さぬ、於義丸樣御遣はしのこと御納得爲させられたるも、家老重役からの人質は容易に遣はされまじいさま、況して御自身御上洛の事など絶えて御沙汰ござりませぬ』と平右衛門は憚る狀も無く云つた。

秀吉は顏の色を變へて、

『さらば訊れる、御身達當所を出立の砌申し付け置いた通り、此の度は毛利浮田の大軍加擔の旨申した哺、長久手合戰の時よりは、幾層倍の人數を繰り出すこと容易の旨を傳へたか哺』

四郎左衛門は此時一尺餘りも進出た。

『御意にござろ、お指圖に任せ、委細言上致したれど、彼の殿一向氣に留めさせた樣も見え申さぬ、我等三人詞を盡し、利害を說き、早々御誓に從はせらるべき旨申し上げた時、彼の殿一羽の鷹を拳の上に据ゑさせられ、此の鷹一つ居らば、手配十分に爲らうぞと大聲に仰せられた、其の他御返答は在しませぬ』と云つた。

秀吉の面色は愈々變つた。

『德川は大功の仁ぢや、諾し夫ならば明日事を糺し、速かに決心するであらう』と深く覺悟したやうに云つた。

家康到底我心に從ふ間敷き者ならば、十二分まで此方に傾きある信雄を抱き込み、西方毛利大膳太夫と力を戮せ、四國長曾我部と和睦、浮田の軍勢を驅り立て、畿の六萬騎に幾層倍した多人數を以て、

只一押に岡崎の城を屠り、其の勢に乗じて直に濱松の本城を衝かうとの心を定めた、五郎左衛門は早へも其の心中を推量して、

『お手切れは御無用にござり申す、徳川殿は敵の多勢を怖れらるゝ大将で在しまさぬ』と力ある聲で云つた。

秀吉は詞無く頬に大盃を煽つて居た、蒲生飛騨守も其の尾に附いて、

『早や五年前であつた、北條相模守七萬人の人數を催か一萬餘騎の小勢にて引き受け、息も吐かせず攻め立てられたる目前に見たは我等ござろ』と云ひ足した。

『夫に佐々成政能登に攻め入り、末森の城を取圍んで、猛威を奮ふやの注進も參り申した、旁此處に三度大軍を動かし給ふは御ため宜しかる間數き儀と推量仕る』

長谷川藤五郎も思ふ處を眞直に云つた、秀吉は盃の數を重ねること一通りでなかつた。

『於義丸殿は家康祕藏の愛子と承はる、家老共より人質は參らせずとも、於義丸殿を差越さるゝ旨の返答、此れにて彼の殿お心は知れ申した、兎角はその上を待ちての御分別、於義丸殿今にも御到着あらば、御兩家の間自然に融和致し行くでござらう』

五郎左衛門はまた云つた。

『使ひの者大儀であつた』

秀吉は暫くすると云つた、平右衛門、四郎左衛門、三郎兵衛の三人はお暇を給はつて引き退く、秀吉の機嫌ます〳〵險しく成り行くを見て、五郎左衛門を初め一統が退出した、後に秀吉は默然と坐つて深き思案に暮れて居た。

次の間には加藤虎之助、福島市松等が詰めて居た、秀吉が脇息に凭れて夢の如く坐つて居る側には、淺野彌兵衛のみ殘つて居る、前には盃盤取り亂されて、晡時を過ぎた日の脚が鈍く西向の廊下に落ちた。

『三郎兵衛長島へ歸る時、申し付くる次第がある、其の事必然傳へ置け』

云ひ捨てゝ座を立つた、表の酒宴に飽き果てた秀吉は、奥へ入つて、心の鬱を拂ふべく、華やかな遊興を催さうとするのであつた。

出でゝは千軍萬馬の間を往來し、入つては諸方面に於ける戰闘準備に頭を惱ます、其勞苦心配を少しにても忘れるは、花の如く侍妾に酌させて、香り佳き酒に親しむ間であつた、心に從はぬ萊々どの

を側近く引き寄せて高鬟の花を愛ろ間の焦慮しい心は大敵の籠つた城廓を攻め落すと同じ趣味を感ずるのであつた。

十四 淀殿

(一)

『茶々を呼べ、茶々を呼べ』

秀吉は目の縁を紅くして居た、酒氣に熱る頬の肉は、心の悶えに動き戰いた、次の間に控へて居た腰元共は、其の一言に迫ひ立てられて、ばた〳〵と驅け去つた、暫くすると、

『上樣召させまするぞ、早や早や』と云ふ聲、遠き長局に聞えて、花の如き佳人は腰元共に左右を圍まれ、宛ら手足を取られるやうに歩いて來た。

母君に死別れて、見ず知らぬ他國に捕はれ、敵も同樣の秀吉の手に養はれて、憂き涙の間に日を送る心細さが生來の光澤と生來の色香とを奪つて、今までに見ぬ淋しさが現れた、櫛を入れぬ鬢の毛は、

亂れたき儘に亂れ、裝ひ飾らぬ頬の肉は、凄い程も蒼う爲つて、目許に持つた露の玉がはら〳〵と襟に濺いだ。

『御前ござります、御前ござります』

左右より心注けられて、枯木を仆すやうに坐つた、茶々どのゝ顏の色、物淋しく變り行く程、秀吉の機嫌は治つて來た。

『近う來せ、好い酒參らせう』

秀吉は虎も懷く程に優しく云つた、茶々どのは座に着く時、鋭く險しき目に怨みを籠めて秀吉を一目見たが、其の儘垂頭いて物さへ云はなかつた。

『茶々どの此れさ、茶々どのさ』

片肱を脇息に凭せて、片手に朱塗の盃を取り上げながら、人目無くば側近く膝行り寄り度い程の氣色を見せた、茶々どのは夫でも返事を爲なかつた。

『酒は要らぬぢや喃』

側に附いて居た腰元共は、誰あらう筑前公滲々御詞を下し置かるゝを、餘所餘所しう歎待す茶々どの

の行爲氣の毒、切て快き御返事なりとも云はせ度く袖を引いて、

『上樣御詮聞かせられまするか』と氣を注けた。

茶々どのは只頭を掉るのみであつた。

『ほゝ、酒は望まぬと見えた、さらば好い菓子參らせう、すつと進ませ』

茶々どのはまた頭を掉つた。

『菓子も望ませられぬぢやな、すると好い衣裳か、茶々どの所望とありや、蜀紅の錦も調へて參らせる、茶々どのばかりでは無い、二人の御寮人にも好い衣裳調へ、花の姿に錦着せ慰め申す、夫が所望か』

茶々どのはまた頭を掉つた。

『衣裳も要らぬか、さらば櫛笄、堺の名人に云ひ付け、金銀を鏤にして、夫を參らせう』

茶々どのはまた頭を掉つた、一度頭を掉る毎に、千筋の髮は亂れ縺れて、青白い顏の上に被さつた。

『夫も否か、すると茶々どのお爲には天が下の物何も惜まぬ、仰せられ』

茶々どのは口を噤んだ、腰元は冥加に餘る秀吉の詞を無碍に聞く茶々どのゝ心勿體なく思はれた、

此の祟り我身の上に及ぶことあるまいかと氣注く餘り、

『御返事なされませ、世にもお手遲いお詞、聞かせられでは協ひませぬ、天が下に望みの物あらば、何にても遣はさるとの御詮、恁程の口上を直々に聞かせらるゝは御方の外ございませぬ。仰せ爲され

ませ』

附き添つて居た腰元は、右左から逼るのであつた、すると茶々どのは絞り出したやうな聲を上げて、

『何も所望ございませぬ、尼法師に爲り度うございます』と世にも意外の詞であつた。

（二）

此の時の茶々どのは全く夫が望みであつた、親身の父淺井長政は、弓矢の意地を立て貫きて小谷の城と運命を共にした、今にも城の陷らうとする時、親子一生の訣別を告げて、血腥き風吹き充ち、忠義を思ふ兵の屍、山と築かれた間を、物淋しく遁れ出た時の狀、更に越前の城兵火に取り卷かれて、義理ある父、親身の母、敢なく御最期爲させられた時の有樣を思ふに付けて、世の中の味氣無さが犇と胸に徹へた、武士の行末、人間の運命、定めなきを思ふに付けて四十二の骨々が直に白膠の如く、

碎かれるかと甲斐なかつた、殊に一族は皆亡び、嘗ては叔父信長公の草履取であつたと云ふ秀吉の天下と爲つて、已まだ其の袖の陰に露の命を繋ぐを思ふと、人に交るのが厭であつた、一日も早く深山の奥に遁れて、靜に風月を友としたかつた。松風の音、谿川の水の響きを聞きながら、父母一門の菩提が弔ひたいのであつた、況して一門一家の仇敵同樣に思ふ秀吉の詞に從はねばならぬ程なら、舌を噛んでも死にたいと思つた。

『そりや爲らぬ』

秀吉は脇息に凭れて居た肱を離して、少しく前へ屈むやうに云つた。

『まだ當の身、此の後花を咲かさねばならぬ身が、髮剃り壞ちて何に爲る、茶々どのは淺井備前守血統、女ながら父祖の家名を起さでは道立たぬ、夫が世を遁れ、髮剃り壞つて何とする』と叱るやうに云つた。

茶々どのは再び無言の人と爲つた。

『上樣御諚御有理と聞きござります、花ならば彌生の櫻、漸う色付き初めたを散いては實が生りませぬ、殊にお仲樣お千代樣、御方をお力にして在しまする、御方もし世を遁れたまふと在さば、彼のお二人樣、何として御成人爲させられう、御合點爲されませ』と腰元は滲々云つた。

『正しう喃』と秀吉は我意を得たやうに叫んだ。

『和御寮に伴れて二人の姫、水とも爲り火とも爲る、和御寮ばかりの意地は立つても、二人の姫の將來悪しい雲に裹まれては効も無い、髮剃り壞つて墨染の衣に纏はるゝも、天下の主に身を任せて、紗綾縮緬に包まるゝも一生、一生の運は其の人の心一つで定まる、望みあらば云へ尼法師に爲らうなど忌はしい事を除く外、望む事何にても遂げさせる』

今まで沈んで居た茶々どのは、此の時屹と顏を擡げた、青白い顏色が更に青く物凄く變つて來た、嚴として、

『お城が欲しうございます』と張り裂けるやうな聲で云つた。

『城が欲しいとの、易いこと、恰ど山城淀の城は都と大阪との間に在つて、我等にも因緣淺からぬ、總見院殿御在世の頃には、一兩度お成り爲された緣もある、前は大川の水翠を湛へて、春は花を浮べ、秋は月を宿す、眺望殊に勝れて居る、後は青々とした野原、前は八大龍王山の霞の色絶えず長閑な風を送る、和御寮起臥の寮には類なく好い處ぢや、彼處を參らせう』

秀吉は急に活々とした聲に爲つた。

『彌兵衛を呼べ、彌兵衛に彼の城修繕の奉行を申し附けやう』

茶々どのは、女にして城を望むこと、豈夫聞き入れはあるまじと思ひの外、直ぐ聽許せられたので、半は惱れ、半は驚き、其の後に來る怖ろしい難題がありはせぬかと危み思ふ心もあつた。

『え、御方さまに……』と腰元共はさすがに驚いた『淀のお城を給はりますると喃』

（三）

淺野彌兵衛は召に應じて罷り出る、秀吉は早々淀の城を修覆して、茶々どの姉妹を入れるべき旨命じた、彌兵衛は年若き女を入るゝ爲に、城の修覆を命じた秀吉の心中を疑ひながら、承知の旨を答へて引き退る、秀吉は笑を見せて、

『近う寄れ、和御寮の望み協へたりや、筑前の望みも協へ給らればならぬ』と膝頭を叩いて云つた。

茶々どのは石の如く堅くなつて、身を動かさうとも爲なかつた。

『慥程云ふをまだ聽き入れぬか、城一つ取らうとするには、多くの矢彈丸、多くの兵、夫等を犧牲にせねばならぬ、然も和御寮は坐つた儘で城を取つた、果報な者、昔より例も聞かぬ健氣の者、其の顏見て參らさう、此れへ來ぢや、此れへ來ぢや』

遂には立ち上つて、茶々どのゝ手を取らうとする狀も見えた、其處へ執次の役人立ち出で、

『申し上げまする、三州岡崎より於義丸樣お着ござります』と云つた。

秀吉は愈機嫌、

『於義丸參つたか、今日は我等のために類ひなき吉日、茶々どのために淀の城出來、我等望みも半協ふ折柄、徳川殿より於義丸を差越す、眞に目出度い、而て附添は喃』

『お扈從には石川勝千代殿（伯耆守勝政の子、後に康勝と云ふ）附添はせられ、石川伯耆守殿御守護、御機嫌日本一と見えござります』

成重と云ふ）

『勝千代、仙千代夫等扈從か』と秀吉は首を傾けろやうに云つた。

一度於義丸來着の事を聞いて後は、さしも熱心であつた茶々どのゝ事は忘れたやうに、早く夫に對すを處置を考へた。

『石川伯耆守守護……石川伯耆守……』と繰り返し云ふ。

『何と計ひませうか喃』

『取り敢ず筒井四郎家に預け、踈略なく歎待せ、改め對面するであらう……』

執次は心得て座を立たうとした、秀吉は呼び止め、

『四郎へ申さう、於義丸は我等子息も同様ぢや、決して異心ある間敷と……』

『心得てござります』

『次に石川伯耆守は、密々に談合の次第もある、今夜深更迎ひの者を遣はさう、道中疲れもあるべきが、其れまでは沙汰を待ちあるやう申し傳へ』

『心得てござります』

執次の役人は委細を心得て引退つた。

『石川伯耆……』と秀吉は幾度か口の中に繰り返し、原の座に默然と坐つて居る茶々とのには目も吳れず奥へ入つた、流石の茶々どのも手持無沙汰に立ち上つて、腰元共に扶けられつゝ已が居間へ退るのであつた、家康の心を取ると、茶々どのゝ情を握るとは、秀吉が目下の切なる希望であるかの如に見えた、けれど事業の大成を期する上に、女人など影もなかつた、於義丸來着、石川伯

耆守守護の旨を聞くと齊しく、花の座を後にして天下一統の謀計を立つべき帷幕の中に沒れた。

その夜石川伯耆守は、城内の奥殿に召されて、やゝ暫く秀吉と對談した、それが果てゝ丁寧な待遇まで受けた、秀吉と伯耆守との間に、何樣話があつたかは知らぬ、伯耆守が微醉を帶んで歸る顏の色は、前途の光明を認めて進む大剛の勇士たる樣があつた。

秀吉は後に獨ニコ〳〵と笑つて居た。

（四）

秀吉は翌日於義丸に對面して、永く父子の契を結ぶべき旨を沙汰の、羽柴の姓を與へ、諱の一字を分ちて秀康と名乘るべく云つた、於義丸の滿足讐ふろに物も無かつた、やがて伯耆守は凡等祝儀の有樣を見屆け、秀吉秀康父子の間意外に親しき狀を見屆けて、數日の後、暇を給はつて岡崎に歸つた。

於義丸が三州を出發する前であつた、家康の許へ不思議な客が遣つて來た、其月一日信州上諏訪から急飛脚が濱松の城へ着いて、祕密の一書を參らせた、家康は夫を見ると共に、駿河府中まで乘馬五十頭、傳馬百艘を迎ひとして差し出した、上諏訪から手紙を送つた主が、其の日駿河府中へ到着したの

を見ると、越中富山の城主佐々内藏助成政であつたが、成政は原、尾張春日井郡平子の城主であつたが、信長に仕へて軍功淺からず、柴田、佐久間、丹羽、佐々と指を屈らるゝ重要の地位に居て、數十箇度の戰闘に忠勤を勵んだ功に由り、越中の國富山の城に封ぜられて大々名の數に入つた、成政は心剛に忠義厚く律義を旨として居たので、信長の恩を感すること、人に勝れて深くもあつた、信長自害の報を聞いた時、直に都に打ち入つて、光秀と雌雄を決しやう心であつたが、此時は上杉景政の向背定かならぬ、信長も成政を富山の城に置き、勝家を越前に籠らせたは、北の方上杉の勢を抑へのためであろ、然も國家の一大事を捨てゝ都へ攻め上るは、亡君のお心に悖るものと思ひ返して、無念の月日を送つて居た、此度北畠羽柴の間不和と爲つて、兩軍伊勢尾張の野に戈を交ふると聞き知つては、年來の義理、舊主への恩誼、飽までも信雄に味方して、秀吉を打ち平げでは協ふまじとの心から、密に信州路を橫ぎつて濱松に入り、諄々と家康を說いた、されど家康は已に天下の大勢を見拔いて居た、少くも北畠信雄が秀吉の手の中に握られて居るのを見拔いて居た。

信雄助勢の美名あればこそ、秀吉を敵ともしたれ、信雄彼方に抱かれあつては今更何うすることも能きぬ、家康は心に戈を收めて居た。

『時が惡い、和睦調ふ上は、筑前殿とて再び疎略のことあるまい、貴殿忠義の眞心は、有難く聞き申した、羽柴征伐の儀俄に同意申されぬ』

成政は一兩日逗留、秀吉征伐のことを勸めたが、家康は終に聽かなかつた、由つて更に長島の城へ赴き、信雄に會うて、同じ意味を繰り返し勸めたが、信雄は心から秀吉を信じて居る、秀吉のために贈も魂も握られて居ろ、成政が熱涙を振つて說き立つるを一も二も無く彈き付けた、成政も今は取り付く島が無い、悄々として越中へ歸つた。

成政が德川北畠兩家を說いて其の意を得ず歸國したことは、石川伯耆守の注進に由つて秀吉の知る處と爲つた、伯耆守は德川の老臣にして、岡崎の城代を勤めながら、心は秀吉に附いて居た、機あらば舊主を捨てゝ、大阪の城へ走らうとの覺悟まで定つて居た。

やがて其の年も暮れろ、翌れば天正十三年乙酉の春であつた、秀吉は五十歲、去年の暮れ弟美濃守秀長を大和の國主とし、仙石權兵衞を密に九州へ遣はして、薩摩の形勢を窺はせた、越中に佐々成政を亡ぼし、四國に長曾我部一統を平げ、紀州に雜賀根來の徒を打ち亡ぼせば、次に起ろは九州平定の大事である、秀吉は早くも其に目を注けて、薩摩の形勢を窺はせるのであつた。

其の間に淀の城の修覆は成る、茶々どのは今年十九の春を迎へて、目映い瞳麗しき姿を、多くの腰元に扶かれ、幾百人の武夫に守護せられて、大阪から淀川堤を練り、淀の城へ入つた、女にして一城の主、二人の妹姫も亦同行する、淀の城に住んで居るので、時の人は、淀殿とも淀君とも呼ぶのであつた。

十五 小城攻

(一)

爾う悠うして居ると、信雄は宗徒の家來多くを引き率れて、如月の末枚岡あたりに梅が香海の如く聞ゆる頃、伊勢を經て大阪へ入り、二十二日秀吉に對面して、長く一家の親好を結ぶべき旨を誓つた、秀吉は前に信雄を攻め亡して天下一統の望みを急がうとしたが、信長公他界の後、墳墓の露も乾かぬ間、早く信雄に敵對するの不可なるを悟つたので、飽までも信雄を味方に引き入れ、他の方面へ力を延さう心があつたから、能きるだけ厚く款待した、信雄は深く滿足して二十六日都へ入ると、早くも秀

吉から執奏してあつたので、直ちに正三位權大納言に叙任せられ、三月二日行裝麗しく錦を着て故郷へ歸つた。

當時秀吉の倉入料は二百五十餘萬石あつた、されば大阪の城に金銀米穀の集まること甘きに付く蟻の如くであつた、けれど家康はまだ入洛せぬ、表面は和睦の旨誓つて、於義丸を送つては來たが、内密はまだ秀吉を疑つて居た、されば秀吉から幾度催促しても自ら上つて來ぬばかりか、家老重役の人質もまだ送らぬ、秀吉は夫が心掛りであつた、けれど其樣事を氣にしては居なかつた、九州へ派遣した仙石權兵衞からは、薩摩の形勢を毎日のやうに知らせて來る、遠く九州へ大軍を動かすに就いては、まづ大阪附近の敵勢を抑へねばならぬと云ふので、其の年三月二十日根來の僧徒を征伐すべく大阪を出發した。

秀吉目下の勢力を以てすれば、根來法師の三千や五千を屠るのは、眞の朝飯前の仕事であるが、小敵と見て侮ることをせぬは、秀吉の根本主義であつた、軍奉行に命じて、十日前から軍の準備を急がせた。

總大將は大和大納言秀長、夫に羽柴中納言秀次を付き添はせ、浮田秀家、毛利輝元等の軍勢を中堅

として犇々と南泉州へ逼つた、根來の僧徒、雜賀の一揆、早くも此の事を聞き知り、さらば中途に喰ひ止め、羽柴勢に一泡吹かせよと云ふ儘、岸和田の千石堀、積善寺、濱の三箇所に要害を築き、遖物の弓、屈強の鐵砲を多く籠め置き、手具脛引いて羽柴勢の來着を待ち受けた、されば羽柴の陣中でも輕しくは手を出さぬ、軍は最初の勝敗が大切であると云ふので、千石堀の抑には秀次當り、積善寺の抑には細川兵部太夫父子に蒲生飛騨守が加はり、濱の取出へは中川藤兵衛、高山右近主として向つて、一擧に雌雄を決しやうとした、時は三月二十一日筒井四郎、長谷川藤五郎、堀久太郎都合一萬五千騎にて前を驅けり、すると千石堀の取出から弓鐵砲の者五百人ばかり現れ出て、横合から散々に彈丸を浴びせた、筒井勢、長谷川勢其のために死傷者を出すこと數百人に及んだ、秀次遙に其光景を見、千石堀の取出は餘普請と聞き及ぶ、石垣も捗々しきことは豈夫あるまじ、まづ彼の鐵砲の者を追ひ散らせよと下知したので、先手を承つて居た田中久兵衛、渡瀨小次郎、佐藤隱岐守、承ると答へも敢ず、三千餘騎を三段に構へて、横合から馬を乘入れた、筒井、長谷川、堀の軍勢斯くと見て、

『彼の勢用あり顏に見ゆるぞ、千石堀の要害を攻め取るかも知れぬ、此方も後れて恥を招るな』と俄に備を西に向けて立ち直つた。

其の間もあらせず秀次勢はどつと喚いて驅け入つた、五百人の鐵砲組不意を打たれて四方八方へ逃げ惑ふを、筒井、堀の軍勢追ひ掛け追ひ掛け攻め打つて、早くも大手の門へ肉薄した、秀次の先陣は二の丸の柵を破り、壕の內へ飛び入り飛び入り攻め上つた、根來の僧徒此處を先途と戰つたが、〳〵秀次の側近く詰めて居た百餘人の若侍、味方の先陣を打たすなと叫びながら驅け出でて、群る敵陣へ割つて入つた、さしもの根來勢も其の勢ひに辟易して本丸へ驅け入り、大門を磴と閉めた、羽柴勢は勝ちに乘つて、首級三百餘を秀次の旗本へ持たせ遣り、只一揉みに揉み潰せと云ひながら、壕近く進み寄つて見ると、名にし負ふ千石堀とて漫々たる水深く瀦へ、折柄の銃音、矢叫びの響きに波打つて、深さ幾丈とも知れぬ水の色物凄い、血氣の若侍、誰一人此の中へ飛び入らうとする者無く、惘れ果て〳〵佇む處に、城中からは手練の者、差し詰め引き詰め矢彈丸を射掛ける、其のため僅半時餘りの間に五百人餘の死傷を出した、一同無念の齒を嚙めど壕は深し、橋は引いたり、翼無き身が內へ入ることは協はず、如何はせんと思ひ煩ふ處へ、筒井勢から石火矢を隙間も無く打ち込んだ、運の末は是非も無い、其火が彈藥函に移つたので、城中は百千の雷霆一時に落つる如き響きして、人も、石も、城も、櫓も紀州一の名を得た荒法師共も、悉く微塵に爲つて滅亡した。

（二）

積善寺、濱の兩城からは、明方の日の光りに此の無慙の光景を見て、今は此までとや思ひけん、そこ〳〵に陣を退き、根來寺指して落ち延びた、秀長此の體を見澄まし、

『千石堀に打向うた軍勢は休息し、新手三萬餘騎は此の軍を以て根來寺を攻め破れ、明日ともならば敵にも油斷なき用意を爲やうぞ』と黄母衣武者數多を添へた。

一統畏り『實にも今より根來寺へ取り掛らせ給ふとは思ふまい、備々を亂さぬやうに心を注けよ』と互に勇み勵ましつゝ汗馬を早めて打つて行く。

根來寺では足下から鳥の立つやうに、羽柴の大軍攻め掛らうとは思ひも寄らぬ、寺中でも誰それと名に呼ばるゝ法師は、千石堀の出城へ出たのだ後には目出度い老僧ばかり殘つて居た其處へ數多の旗印近くに見えて、鎧武者雲霞の如く攻め寄せたので、誰一人戰はうとする者は無く、只我先に逃げ出さうとのみ焦慮り立つて、本尊を箱に納め、經卷を取り失ふな、まづ寶物を運び出せと、右往左往に混雜する、處へ秀長の先陣門前へ攻め掛けて、どつと鬨の聲を揚げたので、寺中の面々早腰を拔かす

ばかりに度を失ひ、老比丘、稚子、若衆、上下の人々年久しく住み馴れた寺院を打ち捨て、蜘蛛の子を散らす如く逃げ去つた。されば秀長は手を濡さずして根來寺を攻め落した、寺々へ立ち入つて調べて見ると、代々貯へ置いた寶物兵器其の他の金銀米炭山の如く積んであつた、秀長は大々に下知をして、天下の寶と爲るべき物を取り殘させ、東風そよ〳〵と吹く夕方、堂塔寺院一時に火を放けたので、今を盛りに咲き亂るゝ櫻も、苔寂びた庭の若葉も、伽藍も、本堂も瞬く隙に灰と爲つた、月日も多いに、三月二十一日さしもの靈場灰燼と爲り果てたは、高祖大師の御心に合はぬ所行あつた爲であらうと、人々は皆眉を顰めるのであつた。

根來寺は斯くの如くにして亡びた、秀長は二十三日軍を雜賀へ進める、すると大田村と云ふ處に籠つて居た一揆三千餘人、鐵砲を打ち掛け、弓を射掛けて道を遮つた、秀長は見て此の城容易に落つまい、只水攻めにせよと云ふので、四方に高く堤を築かせ、吉野川を堰き入れたので、四月一日二日の頃には漫々たる波濤宛ら湖水のやうに爲つた、城中の者共今は合戰する勇氣も無く筏に乘つて隊參した、卽ち年寄分の者百五十人に腹切らせ、殘る人數の命を助けて城を收めた、此の城は中村孫平次差配して、土他の人心を取り鎭める、此の機を用ひて、熊野近在の一揆原を攻め亡ぼさうと協議區々の處

へ新宮本宮の社人神の川谷々浦々の庄屋年寄降人と爲つて罷り出で、

『お親ら大軍を進め給ふに及ばぬ、我等長く幕下に屬いて、忠勤を勵み奉らう』と詫言した。

此れに由つて紀州一圓は殘る處も無く秀吉の手に入つた、秀長は熊野邊に設けられた關所關所を悉く拂ひ除かせて、旅人の便利を計るべく命じ置き、根來雜賀の諸方面に守護職地頭を定め置き、四月二十七日勇しく凱陣した、次に起るは四國征伐であつた。

四國攻も亦秀長、秀次の兩旗で支配した、總人數三萬餘騎、五月二日大阪を立つて、十日阿波に着し、翌日長曾我部新右衞門の籠る和氣の城を遠卷にした、新右衞門はこの合戰、容易に勝利あろまじきを覺つて、甲を脫ぎ、戈を橫へて降參した、これは秀次の功であつた。

秀長は長曾我部元親の弟長曾我部親安の居城一の宮へ向つて、短兵急に攻め立てた、親安も暫くは應戰したが、秀長の猛勢に敵すべきやうはなく、これも人質を出して降參した、手初めの軍は雙方とも幸先好かつた。

（三）

阿波國木津の城は桑名左衞門が籠つて居た、音に聞えた名城で、地の利も眞く兵糧も充滿て居た、秀長は疾から其のことを聞いて居るので、秀次の勢を戮せ十重二十重に取り卷き、多勢に任せて攻め寄せた、流石の左衞門も協はじと看て取つたのか、風雨激しき夜、城を逃げ出て處定めず落ち延びた、まことに此の時の羽柴勢は、一擧に四國を征服する覺悟であつたから、海陸十萬餘騎の兵を以て攻め立てた、秀吉親らは岸和田の城に陣を置いて、其處に諸軍勢の動靜を監督し、秀長總大將として、

阿波國へ攻め入ると同時に、毛利輝元は三萬騎を率ゐて伊豫に薄り、浮田秀家は二萬六千騎を率ゐ、蜂須賀小六、黑田官兵衞を參謀として讃岐へ押寄せた、此の時四國の總大將長曾我部宮内少輔元親は阿波國大西の城に在つたが、早くより根來雜賀の徒と結んで岸和田へ渡り、羽柴の大軍を迎へ擊つて、輸贏を決しやう心で居たから、取出を撫養、木津に築き、自ら宗徒の耶蘇を率ゐて、堅固に防戰の準備をしたが、阿波の諸城秀長秀次のために纏々落城の悲運を見るに次ぎ、四國第一の險と恃んで讃岐屋島の城も仙石權兵衞のために拔かれて、城主悉く滅亡した其のために附近の城取出は悉く降參した、伊豫の諸城も亦毛利輝元のために攻め討たれて、敗北の報頻々と來るので、流石の元親も懼れを爲し、家老谷忠澄と云ふを秀吉の本陣へ送り、子息右衞門太郎盛親を人質に送つて降參した、秀吉は元親の

望みを容れ改めて土佐國を宛行つて、殘る三州を我手に收め、七月二十九日大阪へ凱陣した、次は北國の平定である。

紀伊全く平ぎ、四國悉く手に屬いた上は、一刻も早く成政を攻め討たねばなるまじと云ふので、八月六日大阪を出發した、秀吉の策畧として此の役には北畠信雄を同道した、成政は音に聞えた勇猛の大將である、隼人の昔から信長の幕下に屬いて、柴田佐久間と共に武名を轟かした戰鬪上手である、然も正直の心から信雄を亡君の形見として、眞心から冊きあることも知つて居る、信雄を先陣に攻め討たば、彼の勇氣其の半を殺ぎ得るであらうとの心があつた、信雄は秀吉に左程深き謀計があらうとは知らぬ、和睦以來の親切に報いるは此の時であると思ふので、宗徒の人數六千餘騎を從へて、秀吉の陣に加はつた、秀吉の總勢十萬餘騎、越前加賀を經て二十日越中境へ薄つた、先陣は前田又左衞門利家であつた。

成政は斯くと聞いて、俱利迦羅峠の嶮に三十餘箇所の城塞を築き、名を惜む侍大將を籠らせて嚴重に防戰した、秀吉の本陣は石動山であた、山の絶頂から敵の陣中を瞰下しつゝ兵を分つて攻め立てた、成政は此處を先途と戰つたが、衆寡敵せず、さしもの成政も遂に髮を剃り壞ち、信雄に由つて秀吉の軍門に降伏した、秀吉と成政とは最も舊き昔昵みである、秀吉が信長の草履を摑んで居た頃には成政の情を蒙つたこともある上、信雄が種々に執成すのを無碍にも仕難れ、罪を赦して新川一郡を與へ、越中を手に收めて名譽ある勝利を得た。

十六 新關白

(一)

此れで北國一帶も亦秀吉の手に屬いた、越後に上杉景勝は居るが、此れは一昨年以來秀吉と和睦して絶えず秀吉に好意を送つて居たから、秀吉には最も利益ある味方であつた。

斯くて秀吉は、東北は北陸、西南は中國四國までを自己の勢力範圍に收めた、十月北國から歸つて關白を拜し從一位に叙せられた。

實に大永の初めから天正の今に至るまで、都近くに兵戰止む時無く、朝威漸く衰へて、武名次第に輕く爲り行き、公武何れも有名無實の體と爲つて、世は早や末と見えた時、信長尾張より起つて、王

道の衰を起し、萬民の窮を援はうとした、其の計畫十分に成らずして、忽ち逆臣のために亡ぼされ、四方に悪逆の徒雲霞の如く起り、世は再び暗黒の間に押包まれるかと見えた時、秀吉猛然と立つて中國より攻め上り、逆賊光秀を山崎に打ち、柴田勝家を越前に攻め亡ぼし、引續いての戰闘に、親ら兵を率ゐ馬を進め、幾百度と數知れず生死の間を往來して、漸く天下一統の基礎を定めた、其の年初めには、前に北島征伐の大事を控へながら、打ち絶えた大嘗會の祭事を行ひ、內裡の東に院の御所を造營して、公卿雲上人へ御知行を進め參らせた、されば都の柳櫻長閑に錦を織り、西山東山の霞、美しく棚引きて、加茂川の水の流れも有難き御代に咽ぶ、折柄近衞、鷹司兩家の內に關白職の爭ひあつて、二年の間任官の御沙汰も無かつた、由つて秀吉親ら請うて其の要職を承けたのであつた、姓素性も無き百姓より起つて、一の人の位に就いたは、昔も今も聞きも及ばぬ出世と、上下目を側めぬ者も無かつた。

されば秀吉の望む處一として行はれざるは無く見えたが、心に任せぬ二つのものは依然として目の前に橫はつて居た、一は德川家康今日に至るまでも、家老の人質を送らず、自らもまた上洛せぬのと、一は淀の城に在る茶々どのがまだ打ち解けた狀を見せぬのとであつた。

されば秀吉からは再三再四家康に使者を送つて、早々上洛せらるべきやうと促し、信雄からも家老

を遣はして、一日も早く諸家老よりの人質を出し、秀吉公の疑ひを避けさせ給ふやうと云ひ遣つたが、家康は尙承知しなかつた、兎角する程に十一月十三日家康の股肱で、岡崎の城代をして居た石川伯耆守が家族を引き纏めて大阪の城へ走つて來た、曩に於義丸の守護として大阪へ來た時、奧間つた座敷で秀吉に懇々と說かれてから、軀は岡崎へ歸つたが、心は大阪に殘つて居る如く見られた、夫が愈〻代の主を見限つて、秀吉の勢ひに屬いたのであつた、秀吉の歡びは譬ふるに物もない、其の反對に家康の不平は深く且大きかつた。

やがて其の年も暮れて、天正十四年の春と爲つた、秀吉は大阪から京へ上る度毎に、必ず淀の城に立ち寄つて茶々どのに對面した、茶々どのは今年十九の春を迎へて、玉の肌に光澤が增して來た、身なり飾る綾錦が華かに好く似合ふやうに爲つた、艷やかな髮には良き香りが焚き籠められて、一筋二筋動くことに、匂ひ微かに洩れ出ろ、黑水晶の玉を見る如き瞳、霞を帶んだ月の面を見る如き顏、秀吉は見る度に胸が躍つた、茲に家康と手を握り、西の方九州を攻め討ち、東の方奧羽を切り從へなば、日本六十餘州を脚下に踏まへて立つべき地位に在りながら、茶々どのの前には子供の如く爲つて、一圖に其の歡心を買はうと努めた。

某々どのと共に、二人の妹姫も健かに成人した、心には何樣悲しみを持つて居るか知らぬが、『上樣御意に入り』といふので、三人の幸福は他の羨むほどであつた。

（二）

秀吉關白と爲ると共に、前田德善院玄以、淺野彌兵衞、增田右衞門、石田三成、長束正家を奉行に任じた、世に云ふ五奉行は此れである。

中にも淺野彌兵衞は、秀吉の御臺所おねゝの方と兄妹の緣故もあり、何彼に付けて、正直且つ勇氣に富んで居たので、內外の評定には必ず同席するが常であつた、されば此の度奉行を置くに付いても、第一に此の人を選み定めた、玄以法印は織田信忠に仕へて、才氣あり信義あり信忠卿は御父信長公にも優つた智勇兼備の名將であつたから、其の御見立悪しきことはあるまじと云ふので、第二に選み出されたのであつた、長束正家は丹羽五郎左衞門の懷刀で、物事の捌き軟かに滯り無く、殊に算數の達人なればとて、第三に選み出された、三成は秀吉初めて北江州へ入府した時から、始終側に附き從つて、精悍しく働いた功に由り、且は才氣勝れた者なればと云ふので、第四番に選み出された、

右衞門は萬事の損益に明うして、特に五奉行の一人に加へたのであつた。

されば德善院法印は京都所司代として洛中洛外の出入、神社佛閣の儀に至るまで一人にて裁判致すべき旨を沙汰せられ、長束正家は知行方萬算用の儀を任として忠勤を勵むべき事、殘る三人は萬端然るべく取り行ひ、諸人の傷まざるやう分別すること肝要、もし大事出來致すに於ては、五人合體の相談、其の宜しきに就て極め申すべく、大體の事は一人若くは二人の計ひにて濟ますべきこと、國々の取り沙汰、萬出納の儀は早速埒明くべく油斷あるまじきこと、訴訟の儀に付いては心を空にして聞き届け申すべきこと、富威兼備りたる者と、采邑、不足にして殊に貧困なる者の公事は、殊に注意用心すべき旨を云ひ添へ、別に有司役人の病根として第一は、私慾依怙あるまじきこと、第二は、私の宿意を以て公事を亂るまじきこと、第三は金銀を貯へ過ぎ、酒宴、遊興、女色、美食に溺れざるもの三箇條を觸れ出した、まことに有司役人の病根は、貪慾が原と爲る、此の病根深く爲り行く時は音物をも收むるに至るべく、從つて裁判に私生じて、富者權者の肩を持ち、貧者弱者を虐ぐることあるべきに付き苞苴音物は少分たりとも收むべからず、尙自他恥辱の道な深く防ぐべきこと肝要なりとの一項を添

へた、秀吉の此の用意には、誰も感服したのであつた。

夫と前後して九州方面から島津一家の内情を頻々と報じて来た、義久九州を蠶食し、到る處に武威を振ふ、其の爲め大友一家は遂に所領を失ふに至る、此の儘に捨て置かせられては、御當代御威光にも關はるとの注意であつた、由つて秀吉は寄り寄り九州陣の用意を爲ながら表面公勅を島津家に傳へて、早々上洛天恩を拜すべき旨を通じたが、島津家からは禮儀ある返答を爲なかつた、秀吉の覺悟は此の時早く定つて居た。

已に天下の政治を司り、西國に大敵を亡すべき用意に忙しき身も、入つては風月煙花の樂みに浮身を窶す、秀吉の左右には千の利休、曾呂利新左衞門、細川幽齋等頓智頓作の名家、茶事俳諧の巨匠等附き添つて心を慰むるのであつたが、多趣味多方面に亘つて、度量廣く、嗜好深き秀吉は、一方に猛勇剛膽の士を集めて、古今の軍物語に興ずることも屢次あつた、黒田官兵衞、淺野彌兵衞、蜂須賀彦右衞門、蒲生飛驒守、堀久太郎等皆其の相手であつたが、近く越中から佐々成政を呼び寄せて絶えず側近くに置いた。

（三）

成政は信長の家老にして、鬼柴田と共に勇名を馳せた大剛の士、且信長の重役として今日まで生を保つ只一人の古老であつた、一旦は秀吉に戈を向け、忽ちに敗北して、僅に越中の中一郡を領知するのみの敗殘者であるが、其の骨は鐵であつた、其の魂は石であつた、秀吉が織田家に對して、動ともすると、冷淡の態度を取るを無念に思つて居た、殊に昨日の敵、懐には怖ろしい刃を收めて居るかも知れぬ、成政を側近く置くは、好んで虎狼の背を撫でるも同じであると云ふので、秀吉の股肱は一方ならず危み思つたが、秀吉は絶えて心に介する狀も無かつた、日毎に成政を呼び近づけて、昔今の談話に興ずる、成政は遠慮なく前へ出て、信長の大恩、柴田、佐久間、明智等の武勇を語つて、少しも憚る處なかつた、最初は秀吉を恨む狀も見えたが、後には自から威德に靡いて、二心無き態度を示した。

されど秀吉は尚多少の用意があつた、斯くまでに成政を近づけながら、越中一郡の外に知行を與へることを爲なかつた、秀吉は尚成政の勇武を怖ろしく深いのであつた、成政に大祿を宛行はゞ再び

叛旗を飜すかも知れぬと思ふ疑ひがあるのであつた。

『岡崎殿まだ入洛せぬ、秀吉を疑ふ心深いと見ゆる』

秀吉は思はず云つた、前には成政が何候して居た。

『殿下目の上の瘤と見え申した、此の瘤を取除くには、深い手術要り申さう』

秀吉は聞き咎めて、

『其の手術聞かう、何樣ぢや』

『彼方より於義丸殿を迎へさせられて、此方より禮儀を盡させられぬ、殿下御手には朝日姫在しますぢや』

朝日姫は秀吉の爲めに異父の妹で、今年四十四の姥櫻、大阪の城に淋しき日を送つて居るのであつた。

『呶』と秀吉は頷いた。

『岡崎殿はまだ正室を有たせられぬ、此の御婚儀兩家の間を結び付ける端緒では在すまいか』

成政はまた云つた、秀吉は思はず口許に笑を含んだが、其の事に就いては何事も云はず、

『越中は不便ぢや、年の中半分は雪に閉ぢられる、老後の身を置くには寒氣が强い、今に好い領地與へやうぞ』

成政は何時に無き秀吉の詞を怪んだ、常ならば後は直ちに酒宴と爲るべき處を、其の日は其の沈沙も無く立ち上つて奥へ入つた、すると間も無く織田有樂齋と富田平右衛門とが御前へ招び出された、爾うして何事かの命令を承つた、二人は急ぎ仕度して、まづ伊勢へ下向、其處で信雄へ口上を申し傳へ、北畠から瀧川三郎兵衛、土方勘兵衛を借り受け、都合四人濱松の城へ乘り込んだ、家康に對して最後の談判を開くためと推量せられた。

最後の談判は、家康と朝日姫との緣談であつた、家康まだ正室を有たせられぬに由り、關白殿下より御妹朝日姫を遣はさるゝと云ふのであつた、斯くせば兩家は一家の如く、將來長く親好を結ぶことならうとの意味が含まれた。

秀吉は天下統一の實を擧ぐる事について、氣を焦思つた、殊に遠く九州へ軍を出すに際し、背後に隔心の者あるは、最も懸念なるべきを察して、家康との和睦を急いだ、家康を手の中に丸めるは、尋常の謀計ではなろまじと思つて、こゝに婚姻政略を取らうとしたのであつた。

關白殿下よりの申納といふに、流石の家康も拒み難れた。

（四）

三月三日參內、御祓儀を申し陳べた歸ろさ、秀吉は淀の城へ入つて茶々どのを見た、茶々どのも最初ほどに無愛想では無かつた、秀吉が笑顏を以て對すると、亦笑顏を以て迎へるやうに爲つた、身の周圍に仕へ册く老女腰元數多くあれど誰一人心の杖柱と恃むべき人は無い、一族は亡び一門緣者悉く秀吉の幕下に屬いてその鼻息を伺はぬ者は無い中に、其の身だけが意地を持つて秀吉を恨み思ふも、其の效絕えてある間數との考へも出て居た、殊に其の身の考へ一つで、二人の妹が何の樣な運命に落ちるかも知れぬ。

もし身一つにてあらば、越前に於て兎も角も爲ろのであつた、人間の皮を被て、秀吉の前へ面を曝すことは爲なかつたのであつた、縱し悲しき囚れと爲つても、心に刃を磨いで秀吉の胸先に一太刀報う處であつた、夫が阿容々々と今日まで命を長らへたのは、只管二人の妹を憐むからであつた、弓矢八幡幸ひに姉妹を捨て給はずば、我身一つは如何とも爲れ、二人の妹に然るべき婿取つて後々の繁昌の基を開いてやらうとの心があつた。

其の爲に惜しからぬ命を長らへて居た、針の莚に座る如き思ひで、大阪の城にも居た、淀の城に移つてから時に笑顏を以て、秀吉に見ゆる程とも爲つた、心に二人の妹の幸福を願はずば、何時までも秀吉に背を向けてあらう、されど秀吉の手に由つて、妹達に將來の光りを添へやうと思へば、勢ひ秀吉の情を身に占めねばならぬ、抑も我は何であらう、抑も秀吉は何者であらう、茶々どのは胸に手を置いて考へた。

其の身は淺井備前守長政の姬である、贈太政大臣織田信長の姪である、然も其の父は亡び、其の伯父は世に無い、云はば孤兒も同じ境遇である、緣を求めて北島殿御側へ參るとも、秀吉の手前を憚りて、捗々しき援ひの手は付け能はじ、信長公恩顧の侍大將は數あれど、今は秀吉の意に背いて、我身を庇護ひ吳るゝ者はあるまい、天下廣しと雖も、當時秀吉を敵として安穩に身を持つ者あらじ、秀吉原は卑しき者の胤と云へ、今は一の人の御位、日本六十餘州を手の中に收めて、片手に公卿殿上人、片手に大名小名を抑へて、超然と立つて居る、我身もし彼の人の心に從はゞ、二人の妹に光映さう、信長公の姪にも爲、淺井殿の總領にも爲、關白殿下を眞人に持つて恥ぢることは絕えて無い、元より

女儀、自ら戈執り馬に跨つて敵を征服する器量は有たぬ、同じ眞人と奉するならば、天下第一の人たるべし、夫に御臺所は御實子在しまさぬ、孫七殿御養子として在しませど、一皮隔てた甥、萬一我身に幸福あつて、殿下御胤を宿すことあらば、お世嗣の母、將來當家の地位と權力とを繼いで、當然一の人の御位に卽かせらるべき和子の母、諸大名の同情、水の低きに就く如く我身に注がう、上は攝家清華の貴きより、下は槍持旗持の足輕に至るまで、悉く我身の爪の垢を舐らうと願ふであらう、女としての光榮此の上無い、すれば一旦滅亡した淺井の血統は長く禁廷の藩屏と爲つて子孫千載の後まで繁昌せう、我身の體軀には、織田家の血汐流れある、淺井家の血汐交りある、一旦の恨み憤りに、其貴き血を涸すのは道で無い、然も大きな幸福は我身の前に展開れて居る、此の手もし其の大運の端に掛らば、榮華望む儘に爲らう、二人の妹は云ふ迄もない、一門緣者天上に浮び上るであらう。

茶々どのは利害を見る目が開いて來た、秀吉の恩に馴るゝについて、榮華を願ふ心も出て來た、亡き父母を思ひ、二人の妹を思ふ、女らしい氣分が現れて來た。

（五）

今までの笑は眞の上面の笑であつたが、此の後の笑は心からの笑で無くてはならぬ、今までは殿下との間に深い溝と、濃い雲とを隔つて居たが、今からは其の溝と雲とを拂ひ除かねばならぬ、父の仇、母の敵とは云へ、軍の慣ひ例あること、柴田淺井兩家には仇なれど、信長公怨敵たる光秀を攻め討つたは秀吉である、柴田勝家を亡したも三法師殿御ためにした軍と思へば織田家に不忠の者とは云へぬ、已に信長公に恩誼あり、三法師殿に眞心を盡す上は、我身を殺しても大切に册かねばならぬ、殊に越前を逃れ出てより以來、彼の人の我身に對する扱ひ、我身に對する眞心、且つは我身に對する情、仇には爲らぬ、仇には爲らぬ。

茶々どのは其の日、秀吉の前を退いて其の身の居間に入つてから、翌日の朝、天のほの〴〵と明け放るゝまで、臥床にも入らず樣々に思案した、爾うして覺悟の臍を堅めた、腰元共に扶けられて、朝の化粧、朝の膳、朝の衣裳を著け終つた時は、最う昨日の茶々どのでは無かつた、一夜一睡だもせぬ目の中は、朱を加したやうに赤くなつて居た、瞼も重く、眉も曇つて見えた、されど夫れが茶々どのゝ美しさを加へるに於て最も適切であつた。

已刻過ぐる頃、

『御方召しまする、召しまする』と呼ぶ聲が遠く長局の彼方に聞えた。

茶々どのは急に胸の躍るを覺えた、老女の取次ぐ暇も待たず、優雅に立ち上る、腰元は左右より手を取つて扶け歩ませる、長き廊下を渡る間茶々どのは、心の橋を渡る如き心地であつた、秀吉は見晴しの好い高殿に座を占めて例の盃を擧げて居た、見ゆる限り霞棚引きて、其の靉靆たる間に、雲雀の啼音絶間無く聞え、川の堤から野面に掛けて、丈短き桃の木が一面に花を付ける、昨夕の雨に綻び初めた菜の花が黄金の蓆を敷いたやうに遠くへ連つて、淀川を渡る白帆の影、微に響く船歌、見る物聞く物一つとして酒興を添へぬは無かつた、茶々どのは何時もより近く寄つて、秀吉の側に坐つた、秀吉の目には花よりも月よりも茶々どのが床しかつた、雲雀よりも船歌よりも茶々どのゝ聲が懷しかつた、秀吉が前に在る盃を取り上ぐる時、茶々どのは摺り寄つて、

『御酌、此れに……』

云ひつゝ銚子を取り上げた、恁麼ことは今までに例の無いことであつた、時に秀吉から酌を促すことがあつても、横を向いて聞えぬ振をして居るのが常である、夫が今は茶々どのから進んで銚子を取つた、秀吉は夢かと驚いた、同じ酒ながら、味が勝れて居た。

『甚う機嫌克う見ゆる、一獻參らせう』

秀吉は心を引いて見るやうに云つた。

『身に占めて……身に占めて……戴きまする』

茶々どのゝ此の應答も秀吉は意外であつた、堅い蕾が一夜の中に開かうとは流石に思ひ寄らなかつた。

『身に占めての、此の盃、和御寮心に占めての』

念を押すやうに訊ねた。

『戴きまする』

『呍』と秀吉は夢心地に盃を差し出す。

茶々どのは恭しく押戴く。

其處へ富田平右衛門が濱松から歸つて來た、次の間に手を支いて家康の口上を陳述した、秀吉は片頬を茶々どのに向けて、心の底から湧き出づる歡びを見せつゝ、平右衛門の口上に耳を傾けた。

『朝日姫様御婚儀の事、岡崎殿お受けでござりました』

『ほゝ』と秀吉は更に片頬の笑を見せた。

（六）

『されど其の儀に付き、前以て契約致し置かねばならぬことありと仰せられ、三箇條の申し出ござり申した、一は岡崎殿御嫡子長丸樣（後に秀忠）在しまするにより、朝日姫樣との御間に縦ひ和子樣生れさせられても、世嗣には定むまじきこと、今一つは縦ひ婚儀を取り結ぶとも、嫡子長丸を人質には參らせ間敷きこと、今一つは現在の領地及び此の後加増と爲るべき知行所悉く長丸樣御相續たるべきこと、此の條々御許容あるに於ては、有難く朝日姫樣を御迎へ參らせる旨御返答ござり申した』

平右衞門は辯說爽かに申し陳べた、秀吉は一々頷く。

『岡崎殿口上有理と聞いた、左樣のこと念とするに足らぬ、早々承知の旨を申し遣はせ、確と申し付けた』

平右衞門は委細を心得て引き退つた。今日は秀吉のために二と無い吉い日であつた、今まで此れの み思ふ儘に爲らぬを恨んで居た茶々どの、心は傾き、家康と朝日姫との婚儀は結ばれる、秀吉は一時に胸の開ける思ひがした、氣に入りの扈從腰元多くを寄せ集め、其の日は日の暮るまで酒宴に興じた。

三日月の影は西の山の端に沈んで、淀川の水の流れ靜に城の石崖を打つ、城内の松はざゞんざの聲面白く、簷の吳竹、千代の翠に戞つて、葉末に落つる露も碎けた、此の夜の淀城は千秋萬歳の聲に滿され、長閑な風が吹き渡る。

秀吉の二つの歡びはやがて二つの悲哀を作る基であつた、此時まで心の儘ならぬ物として居た淀君の心を傾け、家康に義理を結んだのは、偶家の基礎を危くする因であつた、淀君もし飽までも秀吉の心に從はずば、難攻不落と呼ばれた大阪の城無慚に陷ることある間敷く、家康飽まで秀吉の心に違うて、此處に再び戰端を開くに至らば、家康如何に强くとも、最後の捷利は秀吉の手に落ちて、豐臣家二代の天下を危くすることなかつたであらうを、時の運は是非も無や、天地を見拔く秀吉も、三十年五十年の後を見拔く目は無くて、當座の滿足に笑を見せた。

翌日からの淀君は秀吉のためにのみ姿容を作るに至つた、花にも勝る心の笑を秀吉にのみ捧ぐべく開いた、秀吉の滿足は云ふばかりも無い。

家康と朝日姫との婚儀首尾好く調つた後家康は四月二十三日本多平八郎を使者として目錄を納めさ

せる、由つて同じき二十八日朝日姫は大阪城を發して、遙々岡崎へ首途した、淺野彌兵衛萬事を差配、道中恙無く五月十日岡崎の城へ着き、十四日濱松の城中で芽出度く婚姻の式を擧げた、家康も此の婚禮を滿足に思つたのは、二十六日榊原小平太を使に立てゝ、首尾殘る方なく祝言の終つた事を秀吉に報告したのでも知れた。

秀吉はこの婚儀成る上は、家康直ちに上洛するであらう、去年東尾張の軍を收めてから、幾度も催促して尚其の運びに至らぬ家老共の人質を送つて來るであらうと待つて居たが、五月が六月に爲り、六月が七月に爲つてもまだ沙汰無かつた、九州の風雲はます〳〵急に爲つて來る、秋の初め頃は島津中務丞大將として豐後の國境に大軍を屯させ、附近の城々を攻め立つる由も聞えた、秀吉の地位としては、强ひても家康を大阪へ招いて、和睦の盃をせねばならぬ、由つて九月末淺野彌兵衛と織田有樂齋とを岡崎へ遣はし、更に深き志を傳へさせた。

彌兵衛は機智に富んだ老功の武士、有樂齋は圓滿無比の人であるから、家康も疎略にはせぬ、直に一間へ招待して、具に來意を問ふのであつた。

（七）

『斯く婿男と爲る上は、長く一家の交りあるべきに付き、早々上洛、まづ禁裏御所へ參つて、天恩の忝きを謝し奉り、次に大阪の居城へ來て、城内の狀、城下の景色をも見させ給へ、此れ然しながら武士たる者の務め、一家の親好ある者當然に盡すべき義理あらう』と云ふ、これが淺野、織田二使の齎らせた口上であつた。

されど家康は承知の旨が無かつた、彌兵衛は家康の耳に口寄せ、

『御前夫にても尚殿下を疑はせ給ふとありや、殿下二心無きを知らしめ給ふため、大政所を當お城へ送り參らせうとの御沙汰も在す、夫にても尚殿下御催促に應じ給ふお心在しまさぬか』と呟いた。

流石の家康も秀吉が忠程までにして我を待つかと浸に心が動いて來た。

『扨は殿下思召として大政所を此方へ送らせ給ふ思召あるぢや晴』と念を押すやうに訊れた。

『直々仰せを承つたではござらぬ、なれど忠程に思召きるゝ儀、深く推量申し上げござるで、大政所當お城へ入來せらるゝと入れ違ひに、御前御上洛と事定まらば、今より歸つて、其の儀殿下へ申し上

げろで在しまさう』と云ひ足した。

家康も夫を拒む詞無かつた、委細承知の旨を答へる。

此の時まで幾度使者を送つても、また最愛の朝日姫を縁付けても、家康の心打ち解けぬので、何時も不成功に終るのであつたが、今度の使ひばかりは闇の夜に光りを認めたのであつた、彌兵衛は急ぎ歸つて秀吉に有の儘を復命した、秀吉は一人の母に奉ずること極めて深かつた、日吉丸の昔から深き苦勞を掛けて居る、今天下に肩を並ぶる者の無い大身と爲つては、手の屆くだけ心の到る限り、孝養を盡し居たのであつたが、天下一統の大志を成し遂ぐるに於ては、其の大切な母人をも敵同樣の德川家康へ送るを辭さぬのであつた、國内の和平を保つためには、親身の母を體の好い人質に送るを厭はなかつた、大政所の前へ出て、此の度の一伍一什を物語つた。

『九州は亂れに亂れて、島津一家朝廷の仰せを奉ぜぬ、然る上は秀吉大軍を引き率れて、征伐の途に就かねばならぬ、弓矢取る身の習ひ、奉公の忠を盡す道是非に及ばぬ儀なれど、只岡崎殿深く秀吉を疑ふ狀あるに於ては、大軍を長途に驅くること宜しからぬ、何事も天下靜謐の爲、何事も禁理御所御ため、岡崎の城へ行して、朝日姫の樣子を見させられ、此の儀切に願ひ奉る』と滲々兩手を支いて云

つた。

大政所は年老いたれど秀吉の母であつた、我子に忠義の誠を盡させるに於て、少しの恥を忍ぶ位は心とする處無かつた、直に頷いて、

『おいの、私も朝日殿顏見たう思ひ居つた處、夫が殿下御ためとあれば拒みはせぬ、歡び參らう、早々手筈を定め給へ』と快く云つた。

秀吉は幾度も恩を謝し、幾度も禮を陳べて引退ると共に、大政所出發の用意を命じ、富田平右衞門を前觸として岡崎の城へ遣はし、朝廷へ執奏して家康を權中納言に進める旨沙汰をした。

家康も重れ重れの厚意に對して、今は捨て置くことならず、初めて家老井伊兵部少輔、本多平八郎、榊原小平太等の子息を大阪へ遣はして人質とし、十月十三日濱松から岡崎へ移つて、大政所來着を待ち受けた、大政所は十月十日大阪を立つて、十八日岡崎に着き、家康夫妻の出迎を受けて、芽出度く親子の對面をした、大政所は七十近い身を岡崎の城に置いて、

『中納言殿は片時も早く都へ行して、朝廷の大恩を謝し給はれば道立つまいぞ』と云つた。

（八）

家康も今は猶豫すべきで無いので、井伊兵部少輔、大久保忠世、本多重次等に岡崎城の留守を命じ、纔て大政所を守護し參らするべき旨を吩咐け置き、二十日本多、榊原、酒井等の面々を從へ上洛の途に就いた、大阪へ到着したは同二十六日の晝であつた、秀吉は守口邊まで迎ひの者を出し兎も角もと秀長の邸へ迎へ、直に訪問して長途の勞を慰めた、由つて家康は其の翌日、北畠信雄と共に大阪城へ入つて秀吉に對面し、金銀絹布を參らせた、秀吉は滿面に笑を漾へて、

『此れへ〳〵』と云ひながら、手に取るばかり側近く招き寄せ、茶壺、刀釼其他天下の名器多くな引出物として與へ、やがて酒宴を開いて、老臣重役をも席に連れ、十分の歡樂を盡した、家康は霜月一日都へ入つて天機を伺ひ奉つた、正三位に叙せられたは此時であつた。

秀吉歡びの餘り家康に廣大な邸を與へ、沐浴の料として近江の國守山附近の土地三萬石を送り、本多平八郎、榊原小平太を從五位に叙した、家康は首尾殘る方無く十一月岡崎へ歸り、翌月井伊兵部少輔をして大阪城を守護させ大阪へ歸らせた、家康は大阪に逗留中秀吉が今度大軍を引き率れて九州征

伐の途に上ると聞き『關東諸方面は其の身引き受け、總てを處分すべきに付き、後々に心を置かず十分の捷利を擧げさせられ』と云つた、豐臣德川の二家は此の時から懇親の間柄と爲つた、家康は秀吉の大きな手に撫でられながら、心に怖しき謀計を抱いて、表面に歸服の色を見せた、今の秀吉の勢に手向うては、如何にしても捷利の實を擧ぐること爲ろまじきに由り、時節到來を待つて大望成就の光を見やうとの心を胸に疊んで殊勝な奉公振を見せて居た。

茶々どのは次第に好い幸福を得て來た、昨日までは捕囚同樣の身であつたが、今は一の人の寵妾として『淀君樣』と敬はれる、秀吉には左右に多くの美人が附き纏つて、柳絲花紅いろいろの色を見せて居たが、淀君色を獻らせてからは、三千の侍女一時に色を失つて、悉く秋の扇となつた、まだ藤吉郎であつた頃から、有らん限りの誠を以て、眞人の事業を扶け、羽柴家の大黑柱を細い手に撐へて來た政所（おねゝ殿の事、母儀を大政所といふに對して、政所といふ）さへ、近頃は淋しい夜を送ることが多かつた、されば秀吉の身についた榮華の半は、淀君の手に握られろ樣となつた、秀吉を掌の上に載せて、自由に扱ふ淀君は、諸大名に對しても亦無上の權勢者であつた。

正義忠節を根本にする諸家中は、まさかに淀君の鼻息を窺ふ者もないが、媚と阿諛とで立身の道を

得やうとする侍は日ごとに淀の城へ出仕して、淀君の機嫌を取つた、淀君の命と云へば、何樣事でも爲て見せた、淀君一言の執成は、命懸の戰場で敵の城一つを取つたよりもまだ效があつた。

それに就いてお仲お千代の兩姬達も、次第に肩身が廣くなつた、從一位關白、これに天下の寵權を持つて居る秀吉の命を握つた淀君は、人々凝視の焦點となつた、榮華の絶頂であつた、權勢の凝塊であつた、假令淺井家の繁昌が以前の通りであらうとも、此ほどの榮華を夢に見ることはなるまいと思はれた。

斯ういふ間にも、九州に於ける戰雲は次第に黑く廣くなつた、『殿下九州御征伐』の風評が京大阪に滿ち渡つた。

秀吉は淀君の酌に醉はされながら、一日も天下一統の大志を成すことを忘れなかつた、帷幕の勇士は戰鬪準備に忙殺された。

十七　九州の風雲

（一）

秀吉は淀の城から大阪の城へ歸つた、花何時しか散つて、見る目清しき若葉の翠、彼方此方に繁り合ふ、淀の城に在る時は、千紫萬紅時ならぬ名花に圍まれる思ひ、大阪の城へ歸つては青葉清しき森の中へ入るやうに感じて、氣分が一時に新しくなる、奥殿に入つてまづ大政所に對面、恙なく麗しき姿を拜して、子供の親に甘える如く心を慰め、更に政所（おねゝの事）に對面して留守中のことなどを聞き、お目見得の室へ出で、奉行物頭の挨拶を受けた、すると長東政家座を進み出で、

『申し上げまする、筑紫の探題大友宗麟上府、お目通りを願ひ奉る、お許しござりませうか』と執成すやうに云つた。

秀吉は機嫌よく大友宗麟去年の暮にも使者を送つて加勢の儀を賴み參つた、島津の猛威を支へ難れ、我等出陣を願ふ心あらう、直ぐ對面、此れへと申せ』

政家は云ひ甲斐あるを歡んで、恰々と引き退つたが、程もなく宗麟を伴つて次の間へ伺候した、宗麟は五十の阪を越えた老人、流石に威あつて猛からぬ姿、眼鋭く眉秀でて一癖あるべき狀は見えた。

『宗麟近う』と秀吉は馴々しく聲掛けた。

島津大友兩家の確執はやがて其の身が九州に手を付ける動機となるので、疏略なく歡待した、まづ近侍扈從に酒肴を運ばせて、取り敢ず盃を下される、宗麟は暫くして、

『大友能直初めて鎌倉殿の仰せを受けて、豐前豐後の守護職に補せられてより、斯く申す宗麟に至るまで十三代、九州探題を承つて一度も武威を落したこと在しまさぬ、然も島津義久猛威を振つて、屢次領地を犯し來る、先年信長公お扱ひにより、近衞關白殿お詞に從ひ、一旦和睦致したれど、義久當時の約束を履まず、叨りに兵を動かして、領内所々を犯し申す、大友一家代々六箇國（豐前、豐後、筑前、筑後、肥前、肥後）を治めたれば、薩摩、大隅、日向の三箇國も當然旗本たるべきに、島津一家叢頃薩摩、大隅二箇國を押取り、日向國にも手を掛け申す、當家より制止致せば却て合戰を挑み、直に鐵砲を打ち掛ける、夫に付き豐前の龍造寺、筑前の秋月も我意を構へ、一揆浪人を驅り催して、恣に國郡を橫領致す段心外に存じ奉る、只今我等に一味の者は、立花左近將監統虎、高橋主膳入道紹運の外ござり申さぬ、所詮我等一家の力にては、此の多くの叛逆人を制止すること協ひ申さぬで、早々お手勢を差し下され御征伐在らせられれば、宗麟御先を仕り、九州一統の功を樹つべく存じ、其の意を得たく態々參上仕つてござる』と詞も淀まず云ひ立てた。

秀吉は愈機嫌、滿面に笑を含み、

『さらば九州の逆徒退治のこと、去年以來思ひ立つてあつた、島津義久我意を募り、恣に國郡を攻め討つ條奇怪なり、まづ以て毛利三家を差し下す、早々歸國、我等到着を待つて居らう』と云つた。

宗麟は秀吉の賴みある詞に滿足して、早々御前を退いた、と其の翌日細川幽齋を執次にして島津家の家老鎌田刑部左衞門政廣、夫に大隅の國正興寺の住職文之和尙同道、秀吉公御目通の儀願ひたき旨を云ひ込んだ『昨日は大友家の主將に見え、今日は其の敵たる島津義久の家老に會ふも、時に取つて面白からう、まづ此れへ召せ』と秀吉は笑ひながら云つた。

徳川家との和睦悉く成つて、秀吉は心にかゝる雲無かつた、島津義久家老の者を遣はしたは、先年來の辯解をする爲であらうと思ふので、すぐ對面を許したのであつた。

幽齋と義久とは和歌の友である。

幽齋は歡んで退去して程なく刑部左衞門と文之和尚とを伴つて伺候した、正面の間には秀吉衣冠麗しく座を占め、次には安國寺慧恵、其次には堀久太郎、其次には佐々内藏助、其次には小早川隆景の席順で居並んだ。其の狀極めて嚴しく見え渡つた、細川幽齋進んで鎌田刑部左衞門政廣參上の旨を申し上げる、刑部左衞門は顔を上げて早速お目通りを仰せ付けられた歡び扱改めて『島津義久御願ひの筋別儀にても在しまさぬ、義久弓矢の功に由つて、八箇國（薩摩、大隅、肥後、筑後、筑前、肥前、壹岐、日向）を打ち從へ、九州第一の弓取りと呼ばるゝに至り申したも、私の利慾を計るのみにては在しまさぬ、曩祖忠久、薩摩、大隅、日向三箇國の守護職に補せられたは、文治の昔、の源 右府公緣倉幕府を開かせられた御時ござる、以後三百八十餘年連綿として相續ぎ、當主義久迄十三代、天正六年大友一家と兵を構へて後、到る處に捷利を得て、國々の大小名引き續き幕下に加はり申した、去年殿下より兩家長く和睦して禁裡御所御爲に忠節を盡すべき旨御沙汰を受けたれど、大友宗麟もすると日向國へ討ち入つて、當家領分を簒食致さうとするにより、止むを得ず應戰、今日に到り申した、過ぎ去つたことは云ふに及ばぬ、此の後にても宗麟改心の氣色なく、懲りすまに兵を出さば、當家も亦防ぎ戰はねばなり申さぬ、殿下よく〳〵此の理を御推量あらせられて、改め義久に九州守護の職分を授けられ遣はされ、すれば代々弓矢の德に由つて彼の地を平定、二心なく忠節を盡し奉るでござらう』と憚る色もなく言上した。

秀吉は嚴かに、

戰の次第は大友宗麟よりの注進に由つてよく知つた、島津義久、永の年月武威に耽り、九州全土を掻き亂すこと奇怪に思ふ、殊に先年急々上洛日頃の大恩を拜すべき旨申し遣したに一言の返答にも及ばざるは、其の罪萬死を容れざる處、只今の口上思ひも寄らぬなれど、鎌倉殿以來武功の家柄を存じ、大隅、薩摩の二箇國に肥後、日向、筑後半國宛を添へ義久の下知に任す、日向半國は襄の守護職伊藤三位入道義祐の、弟民部太夫祐兵に返し、豐後、筑後及び肥後の半國に豐後を添へて、大友宗麟に返し遣はし、肥前一國を毛利に與へ、筑前一國を吉川元春に送るべし、此の儀違背あるに於いては天兵立ろに向ひ、鹿兒島の城下を焦土に致すであらう』と荒々しい聲で云つた。

刑部左衞門は意外の返答を聞いて、一旦は驚き一旦は怖れ、

『御諚の趣謹んで承り奉る、早々歸國、義久に申し聞け、兎角の御返答申し送り奉ろ』と云ひ置いて座を立たうとした、秀吉は押止め、

『其の返答六月晦日を限りとする、六月中に返答なくば、七月には此方出馬致すであらぞ』と念を押した。

此の事早く薩摩に聞えたので義久殊の外腹を立てた、九州は元來島津の旗本に屬すべき土地である、然も相違の御返事、其の意を得ぬ、斯る上は、大友一家を鏖殺にして、天下の頭領たる秀吉に對抗しやうとの議を定めた、鹿兒島の城下では此の大合戰を始むるに付いて、用意怠りなく見えた處へ、刑部左衞門と文之和尙とが歸つて來て、大阪城の模樣を報告した、秀吉は所詮島津家に對して九州の守護職たるを許す狀がない、宜しく大友一家を攻め亡ぼし、九州を一統し、長く秀吉の勢力に反抗しやうと、高が都のへろ〳〵武士、九州武士が手に合はうかと、まづ後顧の憂ひを除くべく、筑前古所山の城主秋月種實、肥前、佐賀の城主龍造寺隆信、肥前勝の尾の城主筑紫廣門へ向け、早々人質を差出せと命じた。

(三)

秋月、龍造寺二家は此の沙汰を得て、直に命に從つたが、筑紫廣門のみは島津家に弓を引いて大友の麾下に走つた、島津義久手始めの戰爭は、勝の尾の城攻から始まる。

島津修理太夫義久が近くは大友一家を鏖殺にし、後には羽柴關白の大軍を迎へ擊つべく、初めて鹿兒島の城を發したは、其の年六月十八日の事であつた、一族島津圖書頭（義久の從兄弟、大隅國串良城主）及び家老伊集院右衞門太夫忠棟（大隅松尾の城主）に一萬餘騎を附け、七月六日筑後高取に進ませた、高取の城は筑紫上野介廣門の一族、筑紫左衞門の居城であつた、島津勢は翌日筑後川を渡つて、在々村々を燒き拂ひ蕪地に押寄する、城主左衞門は萬一當城を敵の手に渡すことあつては、一大事と思ふので、士卒を勵まし防ぎ戰つたが、寄手は名に負ふ薩摩隼人、石火矢を怖れず、弓鐵砲を物の數ともせず、直押に押し包んで遂に城中へ乘入つた、左衞門は恥を知る武夫、只一人敵陣へ突き入つて名譽ある戰死を遂げた、一子新助春門は大力無雙の剛の者、目の前に父を打たれ、無念遣る方なく、大童に爲つて當るを幸ひ斬り立て薙き立て戰ふ間、敵の侍

大將川上左京亮斯くと見るより好き敵ござんなれと云ひ樣、立ち向ひ打ち合つたが、いざ來い組まうと云ふまゝ、刺し違へて天晴の最期を遂げた、城主敢なく討死したので、高取の城は瞬く隙に亡び、伊東入道信覺、友清大助等悉く討死した、夫に由て勝の尾の城は柱も傾き棟も落ちて、今は早や此までと見え渡る、大將廣門は本丸に引き籠り、戰鬪の光景を見て居たが、今は此までと覺悟して、白の用意取り取り哀れに見えた、やがて近侍を呼んで、

『家の運命も今日を限りと見え渡つた。我日頃舞樂を好んで、日夕樂み弄びし間、冥土の旅の思ひに一曲舞ひ囃し度く思ふ、早々此の事寄手衆へ云ひ送れ』と吩咐けた。

其の者は心得て敵の陣中へ城主廣門懇望の次第を通達した、島津圖書頭其の由を聞き、

『々優しき望みかな、武士の情、彼の心任せにさせよ』と云つて暫くの間戰を止めた。

中では今日を名殘の酒宴、一族緣類涙に沈んで見え渡る間を、廣門は樂人共に申し付け、勇しく樂を奏でさせ、己は立派に裝束して選城樂の一曲を風流に舞ひ成した、折柄秋月右馬頭種實、兼て廣

門と所緣があるので種々扱ひ、圖書頭の許しを受けて驅け付け、廣門が選城樂を舞ひ終るを待ち、切に降參を勸めたのであつた『廣門は義を知る者、勝負は時の運、弓折れ矢種盡きて花々しく討死するこそ武士の本意と聞き及べ、阿容々々と降參して、恥を後の世に貽すは、偶、先祖の名を辱むるに當る、此の儀は用捨在らせられ』と義理を重んじて云ふのであつたが、種實樣々に云ひ聞けたので、遂に其の情に背くこと爲り難れ、兜を脫いで敵の陣門に降伏した。

此の事直に八代の本陣に注進したので、義久大いに歡び、園部の小松に引き下し、筑後三潴郡大善寺に押籠めて、多くの番卒を附け置いた、此の狀を見る者、傷しや、昨日までは廣門と世に呼ばれし人、今日は狹門と爲りけるよと指し笑はぬ者もなかつた。

これが軍の手初で、島津勢は幸さき好い勝利を得た、筑紫一族の勇を以てするも、敵對し難ぬる島津殿、一郡一莊の主などが、戈を交へて勝利を得ることなるべき歟と、國中の大小名、何れも舌を卷くのであつた。

（四）

されば風を臨んで島津の本陣へ來り投ずる者次第に多く、肥前筑後の龍造寺、秋月は云ふに及ばず、筑前絲島郡高祖の城主原田五郎右衞門信種、豐前田川郡香春嶽の城主高橋九郎元種、同京都郡馬ヶ嶽の城主長野三郎左衞門種信、豐前仲津郡城井の城主城井民部少輔鎭房等數千の兵を率ゐて來り加はつた、義久は夫等の諸軍勢を先頭として筑前岩屋の城に迫つた、岩屋の城は筑紫廣門の緣者で、大友宗麟の片腕と賴む高橋主膳紹運の居城であつた、紹運は義を知る武夫、賓滿山の城に子息統增を籠め、其の身は岩屋の城に籠つて、島津の大軍を引き受けやうと覺悟した、然も城兵は三千餘騎に足らぬ。

此の事筑前立花の城主立花左近將監統虎（宗茂の事）に聞えた、統虎は紹運の實子武勇智略二つながら群を拔いて居た、家老十時攝津守を呼び寄せ、島津の猛勢岩屋の城へ押寄せた氣に聞き及ぶ、彼の城近年殊の外取荒し、塀石垣も崩れて見ゆる、その上に無人、大敵を引き受けること協ふまじと存する、早々賓滿の城に引き籠り、天の時をも地の利をも見させらるゝやう申せ、やがて統虎參上致すであらう』と云はせた。

攝津守は主命を含んで、急ぎ岩屋の城へ出向き、紹運に會つて主人の口上を落ちなく語つた、されど紹運は聞き入るゝ狀も無く頭を掉り、

『左近將監殿お志、辱く聞き申す、されど賓滿の城は一度敵の手に落ちたる處、我等一命を捨つるには不祥の場所ぢや』と云つた。

折柄側に詰めて居た紹運の家老飯山中務少輔進み出で、

『畏れながら立花公御諫言、御有理に存じ奉る、是非賓滿の御城へ籠らせられ、當城の儀は最初より某に預けさせられたれば、御後に殘り島津の大軍を引き受けて、花々しく切腹致すでござらう』と云つた。

紹運は夫をも聽かず、

『否々、其の方は忠義厚き者、此れにて一人腹切らせるは本意で無い、生死只一つぞ』と詞强く云ふのであつた。

攝津守も中務少輔も返す詞なく、太息を吐く、紹運は重ねて、

『島津の旗本には九州の諸大名八九分まで附き從ひ、總勢八萬餘騎にて押寄すると云へば、縱ひ何處方に籠るとも、開運の時あるべくは思はれぬ、同じ命を捨つるならば當城にて切腹、武士の本意を遂げ申す、此の儀左近將監殿へよく〳〵通達なさせられ』と云つた。

攝津守は是非もなく暇を告げ引きさがる。

實に紹運の云ふ如く島津の大軍は岩屋の麓、築山、横嶽、二日市、太宰府の邊、一寸の隙間も無く充滿て、旗指物馬標、翩翻と南風に飄つた。紹運は此の多くの人數を目の前に見ながら、少しも騷ぎたる氣色なく、最期の覺悟を堅く極めて、門々を堅く鎖させ、矢彈丸の盡きる限り、刃の齒の續く限り、防ぎ戰ふべき旨を云付け、要所々々に兵を配つた。

すると七月十三日の夕方、紹運の歸依淺からぬ莊嚴寺の老僧が島津圖書、伊集院右衞門大夫、兩將の使者として岩屋の城へ遣つて來た、紹運は出でて對面する。

『方丈よく入來した、紹運の命も今日明日と迫り申した、よき折柄、序に引導を授け置かれ』と事も無げに云つた。

年こそ若けれ、九州全土を敵にしながら、義を守つて立花の城に籠る立花統虎を子に持つただけ、紹運の覺悟は立派であつた、方丈はまづ時の挨拶をした。

『早々引導を授けさせ、それを土産に一合戰いたすであらう』と勇しい聲であつた。

（五）

方丈は衣の袖を掻き合せながら、

『引導にはまだ時早くござり申す、愚僧此れへ參つたは私の對面で無い、島津伊集院兩大將より申し入れらるゝ儀、まづ聞かせられ、此度大軍を引率して太宰府に陣を置くこと、岩屋殿に付いての弓矢に在らず、筑紫廣門表裡を構へ、所領を横領して國家を妨ぐる條、大勢を催し出張したに他ならぬされば時日を移さず、高取、勝の尾の兩城を攻め壞ち、廣門を擒にしたれば、早や本意を遂げたも同樣、なれど實滿の城は筑紫抱への城、廣門沒落の上は、當方へ受け取るを順序と存ずる、然も岩屋殿子息を籠らせられ、堅固に要害を構へらるゝこと、理由なき義と存じ申す、早々實滿山の御城を渡されゝば、當城には弓矢を向けず、早々軍勢を引取るであらうとの事ござつた、お味方の小勢を以て、彼方の大軍を敵となさるゝは、鷄の卵を以て石垣を碎かうとなさせらるゝにも優して、覺束なく存じ申す、一旦の恥辱は永久の恥辱にては在さぬ、早々兩大將御懇望に任せられ』と詞を盡して說き勸めた。

紹運は夫にも耳を傾けなかつた。

『御坊のお使ひと云ひ、兩大將情ある詞と云ひ、直に納得仕るべき筈なれど紹運事實子立花左近將監諸共、大友宗麟殿執次を以て、關白殿下の御家人に罷り爲る上は、實滿山の城も當岩屋の城も、また立花の城も、悉く殿下の御城にて在します、我等弓矢の家に生れて、殿下より御預り申し上げたる城、此儘島津殿に引き渡すこと相成り申さぬ、實滿山の城御所望と在らば、まづ殿下の御下知を受けさせられ、殿下よりの御下知とあれば、實滿山の城は云ふに及ばず、當城をもお渡し申し上ぐるでござろ』と答へた。

莊嚴寺方丈は押返して說き勸めたが、紹運は遂に聽かなかつた。

此の事方丈から兩大將へ復命する、さらば弱々とは城を渡すまい、卷城にして攻め立てよと味方の諸大名に觸れ知らせ、十七日塀柵を構へ、堂々と矢合を始めた、島津の大軍潮の如く必死となつた高橋勢を相手として戰ふのであるから其の目覺しさ譬ふるに物も無かつた、晝の銃音は雷霆の鳴り止むこともなく、夜の矢叫びは閃く電光絶ゆることもなく、晝夜も分たず戰つた、されど城兵は少しも怯む氣色無かつた。

すると或日朝の戰ひ漸く酣と見えた時、島津の軍中から鎧武者一騎進み出で、馬の鞍壺に突立ち上り、大音を振絞り、

『城中へ物申さう、暫く矢止めを許させ給へ』と呼び立てた。

敵も味方も此の聲を聞くと齊しく、弓鐵砲の音を止める、暫くすると城の櫓に物々しい人影映して、まづ半身を現はした武者があつた、段々縅の鎧に前立物打つた兜を着て、手に鐵扇を持つて居た、遙に彼の騎馬武者を瞰下して、

『これは當城の侍大將を承る麻布外記と云ふ者、如何な御用ぞ、夫れにて仰せられ』と云つた。

彼の騎馬武者は馬を乘り放つて城近く進み寄り、

『拙者は島津殿の御內、新納藏人と申す者ござる、さても紹運公、二三十年度々の籠城に、諸人へ情を掛け、處々の合戰に武功を顯し給ふと雖も、威勢衰へ果てた大友一家へお味方あるがため、拔群の功を樹てらるゝことも無い、一張一弛は武士の慣ひと申す、時に從ひ降參あれば、幸ひやがて一家に下らう、某推擧仕る、早々平和の御返答あらせられ』と云つた。

（六）

麻布外記と名乗つた鎧武者は片頬に笑を含みつゝ、

『此は新納殿のお詞とも覚え申さぬ只今の御口上、紹運へ申し達するまでもなければ、某直直御返答申上ぐろ、何れも鎬り聞かせられ、夫れ盛なる者は必ず衰へ、生ろゝ者は滅し、始めるものは終りござろ、違き昔を温ぬれば、源平兩家天下に權を爭ひしより以來、盛なる者の衰へぬ事やあろべき、鎌倉將軍を初めとし、足利、織田、細川、畠山、吉良、一色、赤松、山名、越前の朝倉、江州の淺井、出雲の尼子、周防の大内、近き例は肥後の菊地に至るまで、名を得た大家、悉く滅亡して、中には宗廟血食せざる向もある、大友一家頼朝公より豐前豐後を賜ひ下つて後、連綿として血脈絶たぬ、殊に三代前よりは菊桐の御紋を給はつて、九州の探題職を承り、近來合戰の利を失ふと雖も、尚一二國を收め領する、此れ自から大友一家の武德を現す證と見えた、島津殿御家中のことも承り及びあれど十年以前には本郷北原の士卒鹿兒島まで亂入して、お家の根柢に逼つたとも聞き及ぶ、近年俄に世に出でられ、九州全土の七八分までを手の中に握られ、武威漸く芽を吹き出す、さりとて唯今の廣言は

鳥無き里の蝙蝠、貂なき山の鼬とやら、聞苦しく覚え申した、今こそ左樣に宣ふとも纏て關白殿下御進發あれば、島津殿軍勢も當城の將卒を見る如く慘なき運命に至らせられう、家盛なる時は忠を勵み功名を表はす者あれど、衰へたる時心を變ふろは世の習ひ、なれど夫を眞の忠義とは申されぬ、新納殿は島津殿落日とならせられた時、主を捨てて間狹を潜らせらるゝお覺悟と見え申した、當陣幾萬の將卒何れか百年の齡を保ち申さう、仁義を守ろを人の道とする、其の道を守らざる者は鳥獸に劣り申す、紹運二人の子供を有ち、先祖の血を傳へながら、鳥獸の眞似は致し申さぬ』と辯舌流ろゝ如く陳べ立てた。

新納藏人は理の當然に返す詞もなく退いた、麻布外記とは名乘つたが、此れぞ城主紹運であらうとは、後に隱れなく知れ渡つた。

城兵と寄手との間には、其の後數日に亙つて激しい矢彈丸を交へたのであつたが、多勢に無勢、殊に城中の兵粮には限りがある。彈藥にも定まつた數があろので、際限もなく籠城することは能きぬ、此の上一二日を防戰せば、何れ程悲慘な最期を見ろかも知らぬと云ふので、城主紹運は今日（七月二十七日）を最期と覺悟した。朝早く起き出でて家の子郎黨に名殘の盃を與へ、鎧取つて投げ掛け、祕

藏の薙刀を小脇に掻込み、太く逞しき三歳駒に跨つて『今度の戰に花々しく討死した兵共の供養をするぞ』と云ひ切つて、大手の門を八文字に開かせ、慕地に打つて出た、寄手の軍勢斯くと見るより、『素破大將の出馬と見えた、生擒にして手柄にせよ』と云ふまゝ、雲霞の如く押寄せるを紹運は物ともせず蛛蜘手十文字に斬り入つて、瞬く隙に十數人を斬り伏せたが、鐵石ならぬ身は、二三個所に深手を負うて、今は腕も魂も續かぬやうに爲つた、見ると我身一人に斬り卷くられて敵の大勢はちりぢりに陣を退く、早や抗ふ敵も無かつた『いざ、さらば心靜に腹を斬らう』と城内に取つて返して高櫓の上へ昇つた、主の先途を見屆くべく、絶えず前後を取り卷いて居た十人餘りの家の子郎黨は次の間に座を占つて濕かに打語らふ、紹運は墨汁の筆を取り上げて、

（七）

屍をば岩屋の苔に埋めてぞ
　雲井の空に名を留むべき

と一首の歌を書殘して、腹掻割く、生年三十九、武士の中の武士であつた。

其の間もあらせず寄手の兵押し入つて、紹運の首打落し、太宰府觀世音寺の本陣へ持參して、兩大將の實見に供へた、忠長も忠棟も敵ながら惜むべき良將かなと急ぎ床几を下りて紹運の首を上座に置き、香を焚き花を手向けて伏し拜み、二日市の山上に葬つて、秋月から佛心寺の茂林和尚を請待し、大施餓鬼を行つた、仁慈を旨とする島津の家中は敵將の首を葬るにも厚く禮を以てした。

大友宗麟の片腕と呼ばれたは立花伯耆守鑑速入道道雪と、高橋主膳鑑種入道紹運との二人であつたを、斯る所業に及んだは、偏に大友父子武運傾く徴ぞと敵も味方も云ひあつた。

次は立花城の攻撃であつた、立花城は筑前國糟屋郡立花山に在る、立花山は七つの峰から成つて居るが、城の在るのは最も南方でまた最も高い山であつた、大友能直六代の孫、遠江守貞宗の子左近將監貞載初めて此處を居城と定めてから、世に西の大友家と呼ばれて、一時九州の一角に雄飛した。こんな關係から立花城は重要な防禦地であつた。

處が貞載七代の孫に當る但馬守鑑載、永祿八年毛利大膳大夫元就に款を通じて宗家たる大友宗麟に弓を彎いたので、宗麟は一族戸次（後に立花と改む）丹後守鑑連入道道雪を討手として城を攻めさせ永祿十二年全く道雪の手に攻め落したので、宗麟は道雪を筑前の守護職として當城に籠らせ、兼て中

國の抑へとした、道雪の武功は九州全土に於て誰知らぬ者なかつたが、去年九月筑後高良山で病死したので、其の後を相續したのが、立花左近將監統虎であつた。

統虎は前に記した高橋紹運の長男である、幼名千熊と呼ぶ、子供ながら怜悧にして且膽力に富んで居た。大友島津兩家確執に及んで後は、絶えず雙方に弓矢の爭ひがあつた、千熊は子供ながら戰好きで、父諸共戰場に立つこともあり、時には立花城へ遊びに來て、道雪の側近くに扈從することもあつた、道雪は兼てより千熊の器量に目を注けて居た、或る時死罪に行ふ者あつて、道雪親ら罪科を云ひ渡したが、此の時こそ千熊の膽力を試みようと思つて、

『千熊々々』と慌しう呼んだ。

千熊は御前に蹲踞る。

『餘の儀でない、此の罪人其の方に遣はす、見事に首を打ち落せ』と吩附けた。

千熊は惡びれた狀もなく承知の旨を答へた、されど根が子供、不意に大事の用を吩附けられたので、あるから、少しは驚きもしたであらうと、胸元に手を入れて見たが常と變ることもなく沈着いて居た道雪は愈〳〵千熊が將來大丈夫と爲るべき器量あるを見込んで、紹運に賴み入れ直に世嗣と定めたのであつた。

千熊十二歲の時、同じ年頃の童子を數多召し連れ、鷹狩をして遊んで居た時、一頭の狂犬驅け出て吠え掛り嚙み付いた、居合せた童子共は怯ち怖れて逃げ去つたが、千熊は少しも慌てた狀無く、飛び付き樣、刀を拔いて刀背打ちに打ち据ゑた、犬は一聲悲鳴を擧げて何處ともなく逃げ去つた、千熊は其の後を見送つて、靜に刀を鞘に納め、志す鷹野へ着いた、紹運其の事を聞き千熊を呼んで、

『其方太刀を拔きながら、何故犬を斬らであつた』と詰り訊れた、すると千熊は莞爾笑ひ、

『太刀刀は敵を斬る物とこそ承れ、犬猫を斬れよとは承らでござり申した』と答へた。

紹運は此の健氣な答を聞いて、涙を浮べ歡んだ。

其の千熊が今は成長して十八歲と爲つて居た、養父道雪病死の後、左近將監に叙せられ、立花城の主として島津の大軍に當る事と爲つた、忠長忠棟兩大將に取つては、油斷ならぬ大敵である、まだ二十に足らぬ若大將ながら、武名は筑豐四州に鳴り渡つて、鬼神の如く怖れられて居た。

岩屋の城沒落した翌日であつた、島津陣から寶滿の城へ使者を立てた、其の使者は神文誓紙を携へて居た、城主高橋統增（統虎の弟）和睦の心あるに於ては、島津圖書頭一命に代へ、疎略あるべからあつた。

す、武士の意地を貫く爲、罪も無き多くの士卒を失ふは本意なるまじく、早々下城なされ次第和睦の事滲々談合仕らうとの旨を云はせ、爾うして携へて居た神文を差し出させた、統増は十六の若武者まだ思慮が定まらなかつた、忠長、忠棟兩將の手に不知と乘せられ、宗徒の家來數十人を引率して島津の陣へ赴くべく城を出ると、侍ち構へて居た島津勢は、押し寄せて前後を圍み、嚴しく警護して肥後國へ伴つた、宛ら擒を扱ふと同じ仕向と見えた、統増夫と心注いて無念の齒を噛み締めたが效なかつた。

（八）

島津勢は此の手段成功して、刃に血塗らず統増を擒にしたのを歡んで、同じ手段に立花城をも手に入れやうと思つたのが、心利いた使者を差し立て統虎に口上させた、其の意味は、

『義久、左近將監殿に遺恨の仔細在しまさぬ、九州悉く薩摩探題の下知に從ふ處、岩屋立花兩城のみ我意を立てらるゝより、夫を制すべく罷り向うた、然も紹運殿其趣意に背き、强ひて楯を突かるゝ故、詮方なく攻め落し申した、當城其儀を納得し、忽ち降參あるに於ては、隣交の約を堅く定めて、速かに人數を引き取り、御舍弟統増殿を返し參らせよう』と云ふのであつた。

統虎はつく〳〵聞き、

『使者の口上其の意を得申さぬ、一々返答に及ぶことなけれど、一通りの道理を云ひ聞け申さう、岩屋、寶滿、立花の三城は、關白殿下御朱印を以て預りあるを、更に島津殿下知に從へとあること第一に心得申さぬ、紹運已に戰死を遂ぐる上は、統虎も當城の出丸近く島津殿軍勢を引き受け、紹運追善の爲め一合戰仕り、其後にてこそ如何樣の談合をも仕る、島津圖書頭殿は仁義ある大將と承る、武士は矢彈丸の上にこそ勝負を定め申せ、口頭の爭ひ好ましく存じ申さぬ旨滲々お傳へ遣はされ』と云つた。

使者は統虎の意を諒して、こそ〳〵に歸つて行つた、其後も島津家からは手を代へ品を代へして、尚三四度も降參を勸めて來たが、統虎の覺悟は泰山の如く重かつた、末には返答もせず打ち捨て置いたので、此の上は攻め亡ぼすより外無しと決しながら、大暑の折柄殊に長陣、士卒の疲勞も容易ならぬ、岩屋の合戰に宗徒の勇士二十七人を失つて、殘りは多くは手負ひばかりである、疲れた兵を以て要害堅固の當城に攻め掛らんこと、勝利中々思ひも寄るまい、城は落ちず矢彈丸は盡き、不覺の敗北

を招るよりは、夜に紛れて陣を退かうと云ふので、近所の在所に火を掛け、八月二十四日一時に陣を引き上げた、統虎井樋山の頂より此の光景を瞰下し『薩州勢長途の疲れに攻め倦んで肥後へ退陣すると見えた、驀地に足輕を驅け追ひ拂へ、敵の多勢に城の麓を蹂躙られ、父紹運の弔ひ軍もせず、退きたい儘に退かせ、手段も無く見物したと云はゝは、末代までの恥辱ぞ』と沙汰をした、逸夫の面々は斯くと聞いて躍り上つた。

『大將の御諚ぞ、先を驅けて功名せよ』と獲物々々を打ち振り、聲を揚げて追ひ掛くる、島津勢の後陣斯くと見て盛り返し戰つたが、立花勢の猛威に當り難れ、忽ちに頽れ立ち、四途路に爲つて退く處を、隙間もあらせず追ひ詰めて、分捕功名數知れず、味方は小勢ながら弓矢の道に長じたる勇士共なれば、大軍をも怖れず拔群の捷利を得た、此の時立花勢の手に收めた敵の首級は三百六十餘と註されろ。

討手は捷鬨を揚げて引き取つた、統虎の面前に生々しい首級が實見に供へられた、兎角する程に天はほの〳〵と明け渡る、統虎は悉く實見を終つて後、

『各忠戰に由つて、敵案外に早く引き取り、花々しい軍もなく殘念に存じ申す、此の事世上に流布致さば、彼れ見よ、左近將監、紹運殿の弔合戰もせず、坐ながらに手も下さず、運好く大難を逭れたなど謗はれんは口惜しからう、高取居の城（筑前糟屋郡植木村に在る）には、島津家の侍大將星野中務少輔縞重帽籠つて當城を抑へある、されど岩屋の城は落ち、寶滿山の城は島津の手に附きたれば、今は當城ばかりと思ひ蔑り油斷して居やう、切ては高取居の城を屠つて、父君の孝養に報い度く思ふ、皆が急いで其の用意を爲』と命じた。

（九）

昨夜の一戰に捷利を得た逸夫の面々は『承ろ』と應答も敢ず、陳々に觸れ廻をして忽ち用意に取り掛つた、八月二十五日の空よく晴れて秋の氣澄み渡り、西風强く吹き荒んで、いら〳〵暑い日であつた、統虎は一千餘騎を率ゐて、已刻近く高取居の城に押し寄せた、先陣は小野和泉、菰野三河、宗徒の兵三百餘人を左右に連れて、面を振らず圍の內に收め入り、處々に火を放つて燒き立てた、折柄の猛風に煽られて、餘焰八方に散じ、焰々と燃え揚るので城兵心は猛く勇めども防ぎ難れて、城主星野中務其の弟民部少輔、何れも亂軍の中に討死、高取居の城は統虎の手に落ちた、此の事忽ち飛脚を立て

秀吉に注進し置き、捷軍に乘じて岩屋の城に馬を向けた、岩屋の城には紹運の魂今も殘つて居やう、主の後を追うて花々しく討死した忠義無類の人々の魂も又殘つて居やう、其の岩屋の城を攻め落すは、父の尊靈を慰むる第一の道、武士の道を重んじて潔く討死した忠臣義士の手向には、此れに增した供養あるまじと云ふので、上下齊しく勇み立つた、紹運歿落後の岩屋城には秋月家の家老、桑野新右衛門數百餘騎の人數で守護て居た、統虎は八月廿九日の朝早く犇々と攻寄せた、されど新右衛門は名譽の侍大將であつた、數度の合戰に一度の後れを招つたことも無い軍上手であつた、統虎千餘騎を引率して、嚴しく攻め寄するを聞きながら、要所々々の備へを堅くして驚き噪ぐ氣色も無く鎭り返つて居た、統虎は最初の間、鐵砲組の足輕に云ひ付けて、盛んに鐵砲を打ち掛けたが城内は閑然と鎭まつて、應戰する者も無かつた、すると立花家譜代の忠臣小野縫右衛門進み出で、

『此の城一通にては落つまじ、縫右衛門命を亡ぼすか、此の城の基礎に龜裂を入れるか、まづ御覽あらせられ』と云ふ儘、潛ひ得た忍術を以て白晝城内に忍び入り、如何に手術したのか、焔硝倉に火を放けた、流石の利右衛門も此の騒ぎに驚き慌て、一支へもなく敗北したので、岩屋の城も難なく統虎の手に落ちた、統虎は父紹運の位牌を城中の大廣間へ祀つて懇に供養した。

此の事も亦飛脚を以て直ちに秀吉に報告した、秀吉は比類なき働きを賞美せられ『九州の一物は立花左近將監』とあつて、無類の感狀を送られた、統虎の面目九州全土に輝き渡る。

十八　九州出陣

（一）

秀吉は九州からの注進櫛の齒を挽くが如く到着する、立花統虎の手に由つて多少の捷利は認めたれど、島津一家の振舞打ち捨て置く限りで無い、さらば速かに出陣の用意をせよと云ふので、來年二月以前に薩州表へ參陣すべき旨、其の年十二月一日から國々へ布令を廻した、畿内五箇國、北陸、山陰、中國、南海、東海道の諸國を併せて三十七箇國、此の動員令に動かされて、我も我もと仕度した、遠國の軍なれば兵糧彈藥、馬の秣糧、夫等の用意に脫漏あるべからずと云ふので、國司高祐、建部壽德、池田清右衛門、宮木長次の四人を奉行に命じ、十二月十日大阪を出發させ、三十餘萬人に當つべき兵糧、二萬頭の馬に當つべき秣糧、一箇年に渡り用意させた、四人の奉行は兵庫尼崎へ出張して、手寄

り手寄りに米穀を寄せ集めた、お扶持方受渡に付いては石田治部少輔、大谷刑部少輔、長束大藏太夫奉行を承り、殘る方なく始末する、國々の諸大名は宗徒の人數を京、大阪、堺に上せて、或は弓鐵砲、或は彈丸藥、大和奈良の諸國に命じて、償を厭はず兵器を集め、鎧、陣羽織、馬の具等を調製するので、町家の賑ひ一方ならず、何時に勝れて、芽出度い年の暮れ、歡び合ふ聲都の隅々に充ち渡る、殊に八幡愛宕の兩社は武運長久を祈る武夫、國々より詣で來るので、一山の賑ひ古今未曾有の繁昌と打ち囃した。

秀吉は大阪で年を越えて、春は早々筑紫出陣の用意を爲やうとあつて、淀殿を初め寵愛淺からぬ上臈達を呼び集めた、時は師走の末ながら本城の本丸には早くも百花の咲き亂れた春の半を視して、日毎夜毎に歡び聲充ち渡る、大阪の町々は諸國の大名より派遣せる使者名代、一夜の宿も借り難れて宮の拜殿に憩ふもあり、提燈數多點し立て、酒樽進物夥しく持ち附けて、時めく人々の門々へ伺候するもあつて、何時に勝れた年の暮れ、またなく芽出度く覺えたが、流石に大晦日の夜は靜になつて、空も長閑に天は明けた。

翌れば天正十五年正月元日、在藩の諸大名大小立派に扮裝つて、年頭の祝儀に登城する、二日の晩

には御謠ひ初めとて四座の大夫等を召し寄せ盃の數を回らす、お氣に入りの利休、新左衞門、紹巴、紹叱等もまた罷り出て御祝儀を申し上げ、芽出度く謳ふ謠ひの聲々も裕に、萬歳の歌舞大夫共には小袖二襲宛、一座の者にも一襲宛を引かれた、明日にも三十萬騎に大將として九州の果へ出陣すべき使命を帶びながら、悠々として舞ひ歌ひ、風流の樂に耽る、まことに前代未聞の大腹、天下一の器量人ぞと今更ながら驚き感ぜぬ者は無かつた。

正月の十日過さて後、九州出征の時、御掟の條々と云ふを發布した、其の要は左の如くである。

一兵糧並に馬の秣糧は九州の地に參着せしむるの日より下し行はるべき事

一別紙出征の日時二月十日より相違なく立ち出で、泊り泊りに立ち障りなく、奉行次第其の旨を守るべき事

一喧嘩口論仕出來し候はゞ雙方其の罪遁るまじき事

一推買狼藉等あるまじき事

一奉公人先主に暇も乞はず、主取を仕る者ある時、先主見付けて理不盡に成敗仕り候はゞ却て落度たるべし、見付け次第當主人に相斷り、其の上を以て屹度申し付くべく、また屆けあつて後奉

公人を遣し候はゞ其の主人落度たるべき事

一城を打ち圍むこと、相定める攻手の外、一切中止せしむべき事

一合戰に出で立ち前陣後陣の儀、軍奉行次第下知を相守り申すべき事

右軍法に背き、自由の驅引之れ有るに於ては嚴刑に處せらるべき者なり、依て如件

斯くて秀吉の出陣を二月一日と定めて諸奉行は夜を日に繼ぎ用意をした。

秀吉の軍令は極めて公平且つ峻嚴であつた、殊に前陣後陣の爭ひに於て一毫の苦情をも許さなかつた。

その年十一月正親町天皇御位を陽光院の皇子に讓らせたまふ、後陽成天皇と申し奉るは此れなり、

然も秀吉の關白は故の如く、十二月太政大臣に任じ、部下の諸大名に官位を授けた、卽ち北畠信雄は内大臣に、弟秀長は權大納言に、秀次は權中納言に、浮田秀家は參議に、前田利長、釜子秀康、同じく秀勝は少將に、木下勝俊(後に長嘯子)、織田有樂齋、織田信秀(もとの三法師)、織田信雄(信長の弟)、前田利長、京極高次、井伊直政、筒井定次、大友義統(宗麟の事)、丹羽長重、長曾我部元親、蜂屋賴隆、蒲生氏鄕等は侍從に任ぜられた。

こんなに立身出世しても、秀吉の本姓といふは無かつた、そこで朝廷へ乞うて、姓を賜はるべき旨を奏請した。

その結果、豐臣の姓を賜はつた、功勳ある部下の將に、多く豐臣を授けたのは此時である。

(二)

玆に雙方の勢力を比較するも無益の事ではあるまい。

まづ豐臣勢の兵力はと云ふと、畿內五箇國百四十一萬石、東山道の內近江、美濃、飛驒、信濃の四箇國二百萬石、北陸道六箇國二百四十一萬石、東海道八箇國二百二十四萬石、東山道の萬石、山陽道八箇國二百六萬石、南海道六箇國百四十萬石、山陰道、八箇國百十九萬石、西海道の內豐後及び豐前の大半、筑前の糟谷郡を合せて六十一萬石、五畿七道四十八箇國に亙つて、其の石高凡そ千三百三十二萬石に當る、一萬石で二百五十人の兵員を出すとすれば、其の數實に三十三萬三千餘人と爲る、秀吉の勢力は殆ど日本六十餘州の三分の二を占めて居た、關東には北條、蘆名、最上等まだ勢力範圍に屬せぬ處もあるが、夫等は德川上杉の二家堅く抑へをして居るので、後顧の憂れも無く、敵に當る事が出來るのであ

つた。

其の中でも勢力の強い大名は、毛利、前田、北島、上杉、浮田等である。

夫れに對して島津勢の勢力はと云ふと薩摩、大隅、日向、肥前、肥後、筑前、壹岐の七箇國に筑前の大部分と豐前の中、企救、田川、京都、仲津の四郡とを合せ、これも石高に積ると二百九十六萬石一萬石に二百五十人の兵を出すとして、總數七萬四千人、豐臣勢の三十三萬三千人に較べると、五分の一に過ぎぬのであつた、心ある者はまだ弓矢を交へぬ間から、島津家の運命を危んで居たが、島津家は代々武勇を以て鳴つて居る、新參成上者の秀吉、京大阪の緩若共、縱し幾十萬騎にて押寄せると も、敗を取ることあるまじとの確信が、上は大將義久から下は足輕小人に至るまでの胸の底に固まつて居た。

當時島津家に服從して居た諸大名は、肥後人吉の城主相良修理太夫賴房、同矢部の城主阿曾内記惟賢、同熊本の城主十郎太郎久元、同宇土の城主伯耆左兵衞亮顯孝、同隈布の城主隈部但馬守親永、同南ケ關の城主大津山河内守祐房、筑後三池の城主三池上總介鎭員、肥前佐賀の城主龍造寺民部太夫政家、肥前大村の城主大村丹後守善前、同平戸の城主松浦肥前守鎭信等多くあつたが、心から服して居たのは少かつた、勢ひ止むことを得ず暫く幕下に屬いて、大勢を窺つて居るのみで、島津家の旗色もし惡くば直に叛旗を飜さうと思ふ者も少くなかつた、只薩摩、大隅、日向の三箇國のみは最も忠實な島津の味方であつた。

此れより曩秀吉の先陣は、深く九州路へ入つて夫々に任務を盡した、一手は仙石權兵衞秀久を大將として長曾我部父子、十河存保等數千餘人、豐後沖の濱から乘船して、上の原に陣を取つた、他の一手は毛利大膳太夫輝元を大將として黒田官兵衞參謀となり、吉川元春、小早川隆景赤馬關から豐前に入り、小倉城を攻め、松山の城を陷れ、吉川は香春ケ嶽に、黒田は馬ケ嶽に、小早川は松山に各陣を布いて、本隊の到るを待つつ、日毎に敵狀を報告した、されば秀吉は京大阪に身を置きながら、具に九州の形勢を知り得たのであつた。

其の人々の報告に由ると島津義久は十月二日大擧して大友一家を攻め打つに決し、弟義珍に三萬七百餘騎を授け、同家久に一萬餘騎を附けて進發させた、即ち家久は佐渡原の居城から日向路を經て豐後に向ふべく、義珍は肥後八代から肥後路を經て大友家の本城を屠るべく進發した、義久は自ら一千餘騎を率ゐて日向汐見に陣を取つた、義氏の大部隊は二十一日野尻に進み、二十二日高城を拔き、

續いて烏が嶽の城を陥れ二十三日片ヶ瀬勝の尾の諸城を攻め、續いて津賀牟禮城を落し、本陣を其處に布いた、津賀牟禮城は豐後直入郡に在つた。

（三）

一方、家久の本隊は緩々諸城を陥れて、十一月二十五日豐後大野郡松の尾山を發し、竹山の城を陥れ、利光の城に逼り、城主利光鑑則入道宗圧に降參を勸めたが、宗圧は偽つて降參する體に見せ置き、二十六日の闇の夜に紛れ、島津の本陣へ逆寄せしたので、家久は喝と怒り、只一揉みに攻め潰せと云ふので、十二月五日から自ら全軍を指揮して、大手搦手より攻め寄せ辛うじて三の丸を燒き、二の丸までを陥れたが、城兵は堅く本丸を守つて防ぎ戰つた、流石の島津勢も力盡きて一旦梨尾山に郤き、七日水路を絶つて、八日再攻撃を開始した、けれど城兵は尚屈せぬ、折柄府内に陣を取つて居た長曾我部元親は密使を送つて、一日も早く援兵を送られたく云ひ遣つた、仙石權兵衛は利光の城危急との報知を得て、速に大軍を進めやうとした、元親も存保も輕々しく大軍を動かすは容易の事ならまじ、殊に遠慮なく敵地へ深入するは、敗軍の原たるべく、關白殿下より戒れ戒れも仰せ渡された

ことがあるから、まづ暫く時機を觀る方宜からうと諫めたが、久秀は遂に肯かなかつた、利光の城敵の重圍に陥り、あはや落城との報を聞いて、其の儘に捨て置くは武士の義理でない、諸君もし行かずば、久秀手勢を引具して、只一人赴かんと云ひ諍つたので、止むを得ず夫に從ひ、十二月十二日の朝、全部隊を擧げて戸次川の左岸竹中山に至る。

島津勢は斯くと聞き、諸し此方から逆寄して九州武士の骨を見せうと、戸次川へ攻め寄せて遂に敵軍を打ち破つた、仙石勢は此處を先途と戰つたが、地理は知らず、同勢は一致せぬ、瞬く隙に打ち破られて、元親の長男信親、十河存保を初め、大將分數十人討死し、元親の家老桑名太郎左衛門も亦傷き仆れて、右往左往に落ち延びた。

此等敗北の報も亦た日ならず秀吉の手許に着いたので、『さらば速に打ち立つて薩摩武士に一泡吹かせよ』と天正十五年二月一日秀吉は出陣の令を下した。三好孫七郎秀次は京大阪の留守居、前田又左衛門、堀尾茂助、一柳市助等三萬餘騎夫に附けられた。

名にし負ふ三十三萬餘騎の軍勢は次第次第に進發する、街道筋は雲霞の如き軍勢で塡められたが、

軍法正しければ最と靜肅に喧嘩口論の禍も無く、先勢已に豐後豐前の山谷に充滿たれど後陣は尙備前播磨の浦々に控へて居た、秀吉は出征後の政治向萬端殘る方なく留守居の者に命令け置き、三月一日京都を發足、大阪を經て陸路を九州路へ向ふ、其の日の扮裝は、緋縅の鎧に鍬形打つた兜を猪首に着なし、赤地錦の直衣華に四邊を拂つて見えた、夫に從ふ侍大將も皆華々しく扮裝ちて、年老つた人々まで我劣らじと好き鎧、眞き兜を着けたれば、袖草摺、縅の絲、長閑き春の日に照り合うて勇ましきこと云ふばかりもなかつた、恁程麗しく勇ましき軍容、古今例あるまじと沿道の入々目を側めて見物する。

六日は岡山に一泊、十二日赤阪へ着き、十七日は安藝國廣島へ着き、嚴島を見物せうとの事であつたが、折柄風荒く、海上穩かならねば、二三日逗留して居ると、二十日の朝は風凪ぎ波靜に、海島の羽音靜に聞え來る、さらばといふので、嚴島へ漕ぎ渡つた、水夫舵取共船歌事々しう謠ひ出で賑しき云ふばかりも無かつた、宮島へ着いて鳥居前に上陸すると、社僧、神主、內侍共出迎へて御祝儀樣々取り繕らふ、百八十間の廻廊は天下第一の奇觀、潮の滿ち引く毎に景色變りて、夕日を受くる鳥居の上に白鳩三つ五つ羽を休める、赤き色と白き鳥と配合極めて好く、鏡の如き水を湧りて美しき蜑共種

種の貝拾ひ參らせろ、秀吉は目の前に大敵を控へながら、悠々と打ち寬ぎ、

聞きしより飽かぬ眺めの嚴島
　見せばやと思ふ雲の上人

と一首の歌を詠んだ、扈從の面々は手を拍いて打ち囃す、此の景色もし都近くに在らば、雲の上人にも見せ參らすべきにと、幾度も繰返し云つた、斯くて嚴島明神に鳥目千貫を寄進し、神官僧侶へも懇ろに引出物して、その日出發、二十五日赤間ヶ關に着陣、長門の浦々に目を放つて此邊の風光に旅中の心を慰めた。

秀吉が嚴島に千疊閣を建造すべく思ひ立つたは此の時である、千疊閣の瓦には「天正十五年」の文字も刻してある、秀吉がこゝに此の大規模の建物を築いたは、これをもて軍議の場に充つべき目的であつたのは云ふまでも無い。

（四）

今日は船して豐前國へ渡り越えんと用意する折柄、風の音荒く浪高く岸を打つた、秀吉は見て、

『此の邊、平家の大軍滅亡した處と聞く、秀吉今大軍を引率して、九州征伐の途に上るを、知盛維盛等の亡靈羨ましく思ふと見えた、いで〳〵手向して取らせう』と有り合ふ筆を取り上げて、

波の花散りにし後の事問へば
昔ながらも濡るゝ袖かな

と書き付けた、此の歌に感じたのか、海神も鎭まつて、程なく風止み、波もまた靜になり、秀吉の船は恙無く門司に着き、此處に全部隊の部署を定める事になつた。

門司赤間ヶ關は通路の自由、九州の要、殊に將來朝鮮、大明、南蠻の船舶も渡來すべきに就き、最も堅き要害を構へ置くべしとあつて、直ちに城普請を命じ、赤間ヶ關の城には增田右衞門長盛を入れ、門司の城には丸毛三郎兵衞、木戸十丈坊を番手に入れ置き、全軍を二手に分つて、本軍は親ら統轄し、他の一隊は弟秀長を大將として十萬餘騎を授け、日向大隅へ向け進發すべく毛利、小早川、吉川、黑田、蜂須賀、脇坂、加藤嘉明、淨田、宮部、筒井、尾藤の諸大將を加はらせた、大友宗麟先陣たるべきは無論である。

爾うして其身は小倉の城から馬ヶ嶽の城に移つて、方々の城々から人質を入れさせ、國中の仕置を

堅め定めて、秋月攻擊の用意に掛つた、軍の手始めに、まづ豐後國を攻めよとて亂入する、島津方にても猿て用意をして居るので、島津中務を大將として、二萬餘騎を差し添へ、府內の城に櫓籠つて防ぎ戰つた、秀吉は親ら城の南北を巡視し、まづ遠卷にして攻め立てよと命じ、稻麻竹葦の如く取り卷いたから、流石の薩摩勢も、協はじと覺悟したか、雨風の夜に紛れ、山の手から船を出して落ち延びた。

『素破城兵水門より逃げ行くぞ、追ひ掛けて打ち落せよ』と早船で追ひ掛け、敵數多討ち取つて手柄をした、卽ち府內の城は大友宗麟父子に與へ、軍の手始め最も幸先好ければ、此の勢ひに乘じて、岩尺城を攻め落せと、四月一日蒲生氏鄕は大手を受け持ち、前田利長は搦手を擔當し、谷大膳大夫、小野木縫之助參謀、丹波少將秀勝總大將として關の聲を擧げ、ひた〳〵と攻め寄せた、城中では猿て期した事なれば、騷ぐ氣色もなく、閑に合せて應戰し、押しつ押されつ進み戰ふこと夥しかつた、鐵砲の聲、曳や聲、太刀打、攻め鼓、先陣を名乘る聲、山々に充ち滿ちて、物凄さ譬ふるに物もなかつた。

秀吉は柞原山の頂に馬を立てゝ軍の樣を見物して居たが、旗本から度々使者を送つて、猶豫せず

卽時に攻め落すべき旨を命じた、蒲生氏鄕身を挺んで、命を輕んじ、南北に開き合せ東西に追ひ廻し引き組んで首を取るもあり、取らるゝもあり、左手右手に追ひ付いて、斬つて落すもあり、落さるゝもあり、決戰二時に渡つて手負死人數を知られど、事ともせず攻め上つて、遂に狹間へ火を掛けた、折柄疾風、本丸二の丸一時に焦土となつて、さしもの要害も忽ち秀吉の手に落ちた、卽ち增田右衞門を使者として氏鄕利長に感狀を下された、中にも前田家の勇士河原兵庫頭、大平左馬丞、坪內治左衞門の三人、蒲生の家來にて一番乘の功名を博した阪小枝、名古屋山三郎、蒲生四郎兵衞等へは拔群の手柄、武士の鑑となるべしとて、金銀多く下された。

秀吉の九州征伐は、最初から勝算が立つて居た、卽ち大軍の威力に任せ、敵城を押し潰し、もし抵抗するものあらば、短兵急に攻め擊つて、直に鹿兒島の城に薄らうとの心あつた、秀吉に取つて九州は屑でもなかつた、これは眞の小手調べ、最後の目的が大明征伐にあつたのはこの當時よりの希望であつた。

十九 九州征伐

(一)

翌日は大擧して筑前に入り、大隈城に陣を置いて、秋月右馬頭種實の本城古所山の城を攻むべく用意手配ある處へ、右馬頭父子髮剃り壞つて降參した、人質としては子息三郎種長の妹、十六に爲る美しきを參らせ、他に金百兩、米二千石、九州第一の名器と云はるゝ檜垣の茶壺を獻じた、秀吉は直ちに許容、先陣の勢に加へて、四日古所山の麓荒平に進んだ、立花統虎初めて秀吉の御前に伺候して拜謁の榮を得たのは此時であつた、されば近國の大小名風を望んで降參する者引きも切らぬ、中には島津の股肱と賴んだ者もあつた、秀吉は悉く目通を許し、本領安堵の旨を諭して、立花、秋月等と共に先陣を勤むべき旨云ひ渡した、十日は筑後に入り、高良山に陣を取つた、龍造寺政家、筑紫廣門皆伺候する、卽ち夫等をも先陣の內に加へ、直に肥後の國に進み入つた。

島津家の大軍は義珍を大將として去年十二月以來甘原、白丹、菅迫、田北、朽網、野上、斷株の諸

城を守つて居たが、秀吉の大軍潮の寄するが如く逼り來つて、力と賴む秋月も降參、龍造寺もまた彼方へ親好を通じたと聞き、次第々々に背進して、今は竹迫、御船、津守の諸城に兵を集め、肥後熊本の城に入つて防禦しやうとしたが、其の城主たる城十郎太夫久基、忽ちに叛旗を飜し、宇土の城主伯耆左兵衛亮顯孝もまた秀吉の幕下に屬いて、此方へ弓を彎く狀が見えたので、今は此れまでと思ひ切り、四月十四日陣所々々を燒き立てゝ薩摩大口の城へ郤いた、大口は新納武藏守忠元の居城であつた秀吉の軍勢は宛ら猛火の原野を燒くが如き勢ひを以て、次第々々に軍を進め、今迄は忠義厚く防備を嚴にして居た城々が一矢だも報いず降參、直に先陣に加はるので、人數はます〳〵殖えて來た、四月十六日は木山に進み、翌日宇土に入り、二十四日出水、二十九日川内川を渡つた、秀吉は其の日隈の莊に進み、翌日八代に入り、此處に四日の休息をして二十四日出發、田之浦、佐敷、水俣、出水、阿久根、高城を經て五月三日薩摩高城郡東水引村大平寺へ入つた、此間に附近の大小名金銀米穀を捧げて拜謁を願ひ出る者幾人もあつた、中に肥前平戸の城主松浦鎭信は金十枚、米五百石、千斤入の茶壺を獻じ、兵船を以て薩摩の沖を脅さうと云ひ入れた、肥後人吉の城主相良賴房は金二十枚、米二十石を獻じ、二心なく奉公致すべき旨を誓つた、秀吉は川内川の左岸なる猪子嶽、猫嶽、安養寺岡等に

城を築いて大々守護の兵を置き、日毎に鹿兒島攻撃の準備を急ぐ、陣地の廣さ四方三里に及んで、旗指物馬標、宛ら林の如く見えた、京泊の川口には千百艘の運送船を備へて、兵糧彈藥武具馬具もまた十分に充ちて居た。

一方の秀長勢は行く〳〵城々を攻め落して、三月十八日豐後大分郡府内の城に入つた、島津勢は次第々々に退却して日向へ入つた旨の注進を聞いた、然し秀吉から本隊の赴くまで切りに功を急ぐまじとの命令を受けて居るので、其處に暫く息を休めて居ると、其の月下旬秀吉から使者が來て、薩摩勢退却の後を追ひ、日向大隅へ進軍すべき旨の命令書が着いた、さらばと云ふので、黑田、蜂須賀、尾藤、大友の諸隊を先陣にし、伊藤祐兵、佐伯惟定を案內者とし、長曾我部元親、野島元義及び大隅の兵船凡そ五千餘騎を沿岸の警備に任じ、親ら毛利、吉川、小早川、浮田、宮部の諸隊を率ゐて、長驅日向の國へ入り、まづ東白杵郡延岡の安宅城を攻め落し、四月六日耳川を渡つて高城を取り卷いた。

（二）

高城は島津家の勇將山田越前守有信が、一千三百餘騎を以て嚴重に守護して居た、僅の勢ではある

が、大將の命令次第に由つて直に一命を捨てやうとする忠義の者ばかりであるから、骨が舍利になるまで一歩も退くまじと云ひ合せて居た、殊に山田有信は薩摩武士の手本と呼ばれた剛の者、高城の要害は日向一と聞えて居るので、秀長の大軍を以てするも、容易に落城すべくは見えなかつた、其處で秀長は城外に取出を築き、井樓を組み立て四方八面を取卷いた、まづ城の北には毛利小早川勢の二萬五千騎、城の南には吉川勢の一萬騎、城の西には浮田勢の一萬五千騎を配置し、城の東は筒井大友勢の一萬五千騎に親ら率ゐる一萬五千騎を合せ、三萬騎を備へた、此の城から程遠からぬ都於郡城には島津義久大軍を以て籠城してゐる、雙方の間に連絡が附いては味方の爲に一大事であるので、義久の援兵を遮斷する目的を以て、中間に在る根白坂へ、宮部善祥坊の兵四千餘騎を派し、東方に在る小山へ、黒田官兵衞の二千騎、西の小山へ尾藤知定の兵三千騎、中野方面へ蜂須賀家政の六千餘騎を派して嚴重に備へさせた、されば高城は袋の中の鼠も同樣に爲つた、城内僅に一千三百餘騎を籠めてゐるばかりの處へ、秀長十萬近くの兵を以て十重二十重に取り圍んだのであるから、城の運命は早や旦夕に逼つて來た。

島津義久は近き將來に於て豐臣の大軍と大會戰をする目的で、都於郡城へ薩隅二州の兵を招集した

然も其の兵まだ到着せぬ間に、高城から屢次危急を訴へて來た、今は一刻も猶豫爲り難しと云ふので、四月十七日義氏家久と共に二萬餘騎を率ゐ、北鄕一雲、伊集院忠棟先陣として宮部善祥坊の櫛籠つた根白坂の要害へ攻め掛けた。

善祥坊は戰に馴れた古兵、兼て斯くあるべしと覺悟したので、壕を深く、柵を堅くして防戰の用意をしてゐた、島津勢は一擧して攻め破つて、高城との連絡を取らうとするので、屍を踏み越え、血の海を渡り、喚き叫んで肉薄した、流石の善祥坊も此の勢ひに敵し難れて、あはや敵の爲に一陣二陣を斬り崩されやうとした時、秀長の本陣から藤堂與右衞門高虎手勢を率ゐて加勢に來た、宮部勢は夫に勢ひを得て一旦奪られた取出を奪ひ返し、夜一夜を奮闘した、すると十八日の朝霧漸く晴れんとする時、城北に居た小早川隆景、根白坂の東方を守つて居た黒田官兵衞、左右から三千餘騎を引率して短兵急に打ち掛けたので、島津勢は三方四方に敵を受け、四途路蕩途路に爲つて敗軍した、義久の養子島津三郎次郎高近、漸う十五の花武者が、

『見苦しき味方の振舞、いで〳〵薩摩武士の爲んやうを見よや』とて引き返し、太刀振り翳し群る敵陣へ割つて入つたが、敵の打ち出す鐵砲に胸板を打たれて戰死した、島津勢の死傷幾百人とも數を知

れぬ、義久は大勢如何ともすること能はず、在々所々へ火を放ちつゝ都於郡の城を退き、家久は佐土原の城へ入つた。

小早川隆景、黒田官兵衛は此の勢ひに乗じ、島津勢を追ひ打たば、必ず義久を擒にすることが出來やう、而して直ちに鹿兒島の城下へ逼らば、手を濡さずして捷利を得らるゝと思つたので、直ちに使を馳せて總大將秀長へ申告した、けれど秀長は『本隊の行くまで叨りに深入すべからず』と秀吉から命ぜられて居るので、此の勸めに從はなかつた。

斯る悲境の間に立つても高城は尙陷落しなかつた、秀長も左右なく攻め掛る體も無く、雙方が睨み合つて日を送つた。

(三)

薩摩勢は肥前肥後方面から敗戰の報知頻りに至り、戰ふ毎に將士の陣歿數知れずあるので、勇氣切りに阻喪して義久の陣中何れも顏色なく見えた、折柄高野木食上人（名は應其、興山と號す）と一色宮内大輔顯秀とは前將軍足利義昭の使者として都於郡の城へ到着した、義久は疎略なく歡待し、木食上人を黒貫寺に請じ、宮内大輔を光照寺へ案内し、日を定めて對面した、誓紙を廢せた前將軍の主意は、天下國家のため、一日も早く和睦あるべしとの儀を勸め入れるのであつた、最初の間は義久許容の狀も無かつたが、遂に一家中の意見を聞くことに爲つて、城中の大廣間へ一族老臣一統を召し寄せ、前將軍忠告の意味を語りて、和戰何れに決すべきかを訊れた、すると北鄕一雲は大山の搖ぎ出る如くに搖ぎ出で、

『鎌倉殿以來武威九州に鳴つたお家、如何に悲運に陷ればとて、猿面冠者の前に兜を脫ぎ給ふは、御先祖へ恐れも在すで、縱ひ一門斷絶の悲しみを見るまでも潔く決戰せらるべし』と勸めたが、薩摩山の城の主喜入攝津守季久、都於郡の城主前田和泉守政親を初め義久が杖柱と賴む侍大將何れも『一旦和睦、御家名を全う爲させらるべし』と主張した。

夫に附いて雙方へ加擔の者も出來、義久の御前に於ける大事の評議は一決するにも至らず物別れとなつた、伊集院忠棟は此の狀を見て、

『斯く御家中の議論一致せずでは和戰何れにしても取り返し附くまじきお家の恥辱と爲らう、須く佐土原侯（家久の事）に談合して、家中の人心を定むる外あるまじ』と考へたので、其日直に家久の許

に到り、今日の一伍一什を物語つた。

家久も島津勢の現狀に鑑み豊臣の大軍を敵として戰ふとも、勝利の見込あるまじきを悟つて居たので、遂に和睦と決定した、由つて忠棟は家久を同道して義久の前に出で、

『今は早や弓折れ矢盡きて、如何ともせんやう在すまじく、薩摩の運盡き、協ふべき樣もなし、近年肥後、肥前、筑後、筑前の陣、去年十月より豊後表の合戰、三箇國の者共皆疲れ、武具兵糧も續き難く覺え申した、日本國の兵を引き受け、縱し籠城するとも、まては一戰を試みるとも、遂に其の甲斐あるまい、一方に主力を盡し、もし仕損ぜば、愈一家の極みと存じ申す、只速かに和睦爲さゞれば以前の如く三箇國の御知行協はせられずとも、薩摩一國を御安堵在らせらるゝであらう、すればお家の名は殘る、此の御覺悟肝要と存に申す』と詞を盡して說き勸めた。

義久も頷き、

『爲るまじきことを强ひて爲さうとするは愚者の術、一二人の力に大磐石は動かせまじ、義に應ずる時は義を以てし、勇に及ばざる時は和を以てするが武士の慣ひ、此の度の大難を逃ればやがて本意を遂ぐる時もあらう、和睦の調へ方最も急、早や早や談合致せ』と云つた。

忠棟は云ひ甲斐あるを歡び、

『さらば忠棟進んで人質と爲り申す、御方は鹿兒島へ御歸着、關白殿御沙汰を待たせられ』と云つた。

義久は力無く、

『當家の事は關白殿任せ』と云ひながら座を立つた。

由つて忠棟は高岡の僧善哉坊を使として、秀長の本陣へ降參の旨を云ひ入れ、親ら人質と爲つて二十一日秀長の陣へ出た、主家の爲とは云へ、面皮を捨てゝ敵の陣門へ恥を露す忠棟の心中を推察する者、誰とて哀れを感ぜぬは無かつた。

(四)

其時の忠棟の口上は、

『何卒義久の一命を助けさせられ、偏に願ひ上げ奉る、もし御憐愍もなく在しまさば、是非に及ばず此れにて切腹致し相果て申す』と云ふのであつた。

秀長は其の口上を善哉坊から聞いて居た。

『左程までに思ひ詰めあれば、萬きに計ひ申さう』と情ある返答をした。

實に秀長は兄の秀吉にも優つて思慮あり、分別あり且情深き大將であつた、秀長が十萬の兵を率ゐて、豐後府内の城を攻め落した時、或る人が見て『日向の山々如何に嶮岨なりとも猛勢に切所なしと諺に云ふ、府内より逃去るを追ひ掛けて日向の國へ逼り敵の足をも屯させず大隅まで追ひ詰め、義久兄弟の首を刎れて猛威を天下に振ひ給はゞ、日本六十餘州忽ち平定すべきを、中納言殿の軍勢聞き及し程は猛けからぬと見えた』と嘲るやうに云つたとき、側に居た香西成資は聞いて『構へて爾うでない、只兵を用ふる道、地により人により時勢に由る、何とて一定の形あるべき、一夫突き出づる時は、三軍も當ること能はずと云ふは、日向の國のこと、敵の島津中務は大剛の武將、むざと輕んじ一擧に過りを招る時は、後難圖るべからず、中納言の兵を用ひ給ふは、大軍を擧げて險扼の地に入り山陣を取つて堅く守らせらるゝにある、此れ明かに攻め且守り給ふ處、十萬の大軍には何れかに隙あるもの、敵に隙を窺はれては、敗北忽ち至るであらう、されば守る故は卽ち攻むる所以、能く兵を用ふる者は、客を變じて主とし、主を變じて客とし、其の宜しきに會うて勝を制する、此れ良將の謀計、敵は窮迫して心を責め、我は悠々として心を平かにす、兵威を以て敵を壓し、和を以て敵を誘引き、双に血塗らずして敵を降し、能く手懲けて十年の知己の如く爲させる、洵に此れを仁將と云ふ、仁者に敵なしと云ふは此の理に外ならぬ、此の君もし長命にて在しまさば、關白殿下のお家、永久に繁昌しやう』

と云つた。

香西成資の評まことに能く的中つて居た、秀長もし長命にてあらば、大阪の城も易々德川勢の爲に攻め取らるゝ事も無かつたであらうとは、後の心ある人々が取沙汰した處であつた。

伊集院忠棟が秀長の陣中へ驅け込んで和睦の儀を願ひ出た時は、恰と卯月の末で、霖れ間もなく雨降り頻り、處々の大河に水漲つて、人の往來も爲り難ぬる時であつた、されば兵糧運送も心に任せず、山國の習なれば、土地の農家に徵發すべき物も無くて、大軍を控へた秀長部下の將卒は、何れも憂ひの眉を顰めて居た處へ、圖りなく島津兄弟降參の使者を得たので、一同は蘇へるやうに歡んだ、秀長が忽ち善哉坊の口上を入れ、直に忠棟の願ひを入れて、好きに計らはんとの旨を返答したは、夫等の憂ひ山の如く積まれてあつた爲でもあつた。

卽ちお側衆福地三河守長光を差し添へ忠棟を秀吉の本陣太平寺へ送らせた。

然も高城を守つて居た山田有信は容易に城を出やうともせぬ、義久から再三使者を遣はして早々下

城致すやうと云はせたが、夫でもまだ意地を張つて居た、弓折れ矢盡きて屍を敵陣に曝すとも、此の城容易には明け渡すまじと云つて居たが、夫ではお家の爲なるまじ、御前御爲を思はば、早々下城致すやうと幾度も云ひやつたので、其月廿九日漸く城を明けて退去した、後は宮都善祥坊引き受けて守護をする、義久は五月一日都於郡の取出を引き拂つて鹿兒島へ入つた、義珍は日向西諸方郡眞幸院に入つて蟄居した。

（五）

秀吉が薩摩出見境から阿久根、高城を經て大平寺へ入つたのは、其の月三日の事であつた、大平寺は薩摩郡宮内に在る伽藍であつた、元明天皇の建立で、光明皇后の勅願所たる靈刹、川内川の流れに沿うて、眺望極めて好く、四邊に京泊とて最も良き港もあるので、兵糧船數千艘岸邊近く濼うて、川内川尻から三四里の間、旗指物幕を打つて飾り立てた船舶幾千艘とも數知れぬ、諸軍勢への兵糧其の他は此の港で割り宛てるので運送の車馬櫛の齒を挽くが如く京泊の繁昌古今未曾有と云はれた、邊の住民悉く本地安堵の旨を達せられたので、枕を泰山の安きに置き、思ひの外の君を得 奉つて、

永く繁昌の基を定むる事、此の上の歡びなしと、一體に歡び合うた、秀吉は川内川に船橋を架けさせ、往來の自由に供へる、奉行は九鬼大隅守、脇坂中務少輔であつた。

其處へ福地三河守は伊集院忠棟を伴うて參着した、秀吉はお側衆木下半助を以て降參の趣意を問はせる、忠棟は半助に對面、謹んで口上した、其の要は『義久儀剃髮染衣の身と爲つて、御禮申し上ぐべきの條、前非を御恕し爲させられ、すれば向後異心なく忠勤を挺んで 奉 ろでござる』と云ふ詞に僞りあるべくは見えなかつた。

半助は聞いて『武士は相互、一度敗軍の將となつては、恥を忍び面皮を露して、賴む主の爲に此れ程の憂目をも見ればならぬのか』と漫ろに忠棟に同情する心出で、其の旨を秀吉の前に披露した、秀吉は熟々聞き、

島津一家數十年來公儀を輕んじ奉つて、隣國他領へ亂入して、狼藉を働くこと其の罪甚だ輕からぬ、されば此度の序を以て根を斷ち葉を枯らし、儼と嚴罰仰せ付けらるべき筈なれど、賴朝公以來連綿として續きある家を亡ぼすも如何、殊に忠棟の仕方神妙に存ずるゆゑ、本領安堵の沙汰に及ぶまじきに限らぬ、まづ篤と實否を取り糺し見よ』と前野但馬守、淺野彈正少弼、木村常陸介に改め執次役

を命ぜられた。

由つて三人は改めて忠棟に對面して、尙よく口上を聞き取つて、再び其の旨を言上したので、さらば免許爲さるべしと、秀長の本陣へ新執次役三人を遣はした、島津義久降伏に付き、萬事を奉行させる爲であつた、秀吉は其の翌日忠棟に對面して本領安堵仰せ付けらるべき旨を沙汰したので、忠棟は云ふばかりもなく歡んで立ち歸つた。

義久は一旦鹿兒島の城を退いたが、秀吉和睦を聽許する旨を聞き、一門宗徒の面々を悉く持城に返し置き、僅七十人餘の人數を率れて伊集院村に入つた、伊集院は一族伊集院家の領地で、鹿兒島とは、程遠からぬ處である、其處の雪窓院には、その身の生母が住んで居る、母御寮の前に一期の對面を遂げ、潔く髮剃り墮つて、秀吉の陣所へ罷り出やう心と知られた、側には一族として喜入季久、地頭として伊集院久治、家老として町田出羽守久倍附き添つた、軍敗れ、國亡びて空しく兜を敵の軍門に脫ぐ、淺猿しき我子の姿を見るに付け、母の禪尼は衣の袖を浸した、また義久は縱ひ秀吉の本陣へ參るとも、油斷なき大將、知何なる手術あるかも知れぬ、其時は潔く切腹する心でゐるので、或は此れが今生の別れと爲るかも知れぬ、一門緣類悉く倒れ、城も遂も敵の手に渡つて、淋しく後に殘らるる老いたる母の行末を思ふに付けて、胸も張り裂くる思ひ、まことに悲しい母子の對面であつた。

『何事も浮世の義理、武門の習ひとござり申す、義久の姿はこれを最後と御覽ぜられ、縱令一命を全うするとも、髮を剃つては魂のない屍骸同樣の身でござる』と云つた。

一座の者は皆泣いた。

（六）

『何と仰せぢや、髮剃りこぼてば、枯木同樣の骸と喞、彼の骸も同じと喞』

雪窓院はは樣〳〵と涙を溢して痩せ窶れた手頸に義久の手をぢつと握つた。

『魂のない骸ござる、假し一命は助かつても、魂のない骸ござる、されば今の一時が、百年に替ふる御對面ござるで、此を現世の御名殘と……』

義久も又た覩上げた。

『骸と喞、骸と喞、魂のない骸と喞、されど其骸、首のないには優つてあらう』

『いや』と義久は遮つて『武士としては首のないを歎び申す、されば今日より後の義久は眞の武士に

ては在しまさぬ、もし眞の武士ならば、御兩親の賜物たる黒髪は切らぬ筈ぢや』

『ちやが時世ぢや、命あらば恥を雪ぐ時も參らう、一たんの恥は恥ならずと昔の人も仰ぜられた、要りは最後の勝在すに、むざと命は捨てられまじいぞ、可いか』と力強く念を押して『むざと命は捨てられまじいぞ』

『御方思召し、義久存ずる旨と符節を合すやうござる、命捨つる心ならば、敵の陣門に恥を曝らすことと仕らぬ』

『おゝ、おゝ』と雪窓院は悲喜交々至るやうに云つた『その詞忘れまい』

『萬事を心得、ちやが片時も身を放さず、鋭き太刀を携へ申す、關白殿仕方に由つては、命よりも意地、如何やうの覺悟極めるかも知れ申さぬ、後には兵庫殿（義弘の事、その頃は兵庫頭）在す、又六郎（義久の子、歳久の事）も罷り在る、假ひ義久大平寺の露と消ゆるも、家名を墜すことござるまいと存じ、後々に心置きなく、今より發足仕る、只御齢を召させられて、武門にあるまじき憂目見たまふ御身の上を思ひ遣り參らする』

義久は流石涙であつた、側に居た一族老臣、誰とて袖を濡らさぬものなかつた。

『武藏はお供致さぬぢやの』

雪窓院が武藏と呼ぶは、新納武藏守忠元であつた、忠元は薩摩の逸物として、人々に重きを置かれた。

『居城大口に罷りござる』

『一雲も同樣在すか』

『彼の在所都の城は、要害堅固の處ござる、士卒心を一にして防がば、三五年の籠城は必然なり申さう』

北鄕一雲も又智勇兼備の勇將、忠元と共に島津の龍虎と謳はれた者であつた。

『さほど頼みある家人持ちながら、今日の覺悟なされた哺』

『右衞門（忠棟の事）の誠心捨てられ申さぬ、昨日まで味方について、今日は忽ち弓を彎く、九州武士の頼み無さに、ふつと思ひ決めござる、されど義久、心から降參致すでない、只一身を犠牲にして、家を全う致したい心、眞實降參致すなりや、只一人にては參らぬ、兵庫殿も同道、又六郎はさしづめ人質にも爲る身とござる』

雪窓院はやつと義久の心が分つた。

『何は然れ、母子一世の別れとある、これに盃、喃、これにて……』

侍女の甲乙は早くも心得て、銚子土器を運ぶのであつた、雪窓院はまづ取り上げる。

勝軍の盃を酌むとは違つて、一座は何となく濕つて見えた、義久は心の中に、一世の名殘を惜みもし、又老後の短い生母の幸福を祈りもして、幾度も盃を擧げた。

（七）

然し何時までも斯くてあるべきではない、義久は潔く髮剃つて名を龍伯と改めた、同時に家老一族頭を圓めて、季久は弓託、久治は抱節、久倍は存松、忠棟は幸侃、有信は昌岩と改めた、義久は思ふまゝ母子別れの盃を酌み交し、いざとばかりに立ち上つた、處が龍伯の輿を舁くべき人足共貧軍の成行を危んで、何處ともなく逃げ去つたから、伊集院家の侍八人申し合せて輿を舁いだ、其時の有樣云ふばかりもなく悲慘であつた。

龍伯の轎子は大平寺へ急ぐ、圓き頭に黑き衣裳、昨日の姿には引代へて見るも甲斐ない扮裝であつた、山田昌岩以下十五人死を決して供に立つ、舍弟義弘を初め一門の歷々は一人も供に附かぬ、此れは秀吉の心を忖り難れるに由つて、萬一の事ある場合に於いて、龍伯及び其の手に屬く家老の面々悉く切腹、夫を合圖に島津家譜代の領內に決死の兵のみを集め、協はぬまでも刃の續く限り防ぎ戰つて、薩摩武士の本領を見せやうと云ふのであつた、此の時に於ける龍伯以下十五人の供人は生死安危の瀨戶際である。

一行次第に進んで行くと、秀吉の陣中から『島津義久髮剃り壞ち、近臣の者を引き率れて、降參致す』旨早くも注進があつたから、迎ひの爲として數十人の騎馬武者、道の左右に居流れて待ち受けた、初め都方の緩若共何程のことあらうと蔑んで居た敵の爲に、散々の不覺を招つて竝に空しく降參するのであるから、輿の內の龍伯は云ふに及ばず、義氣に富んだ山田昌岩等は、此の時の恥しさ忘れ難ぬると口惜涙を流した、夫から大平寺までは上方勢犇と詰めて嚴重に警戒める、其間をすつと通つて秀吉の陣中へ着いた、家來は門前に殘し置き、龍伯只一人、門內へ驅け入つた、秀吉の側衆は此の狀を見て、

『彼れ見、義久只一人ぢや、只一人此れへ參つた』と指示し笑ふ樣に云つた。

秀吉は斯くと聞きつゝ、上段の間に悠然と坐つて、

『さもあらう、我が思うた通りぢや、何故斯く遅く来つるな』と獨語のやうに云ふ。

執次の役人慌しく出で来りて、島津殿参上の旨を披露した、秀吉は機嫌克く、

『此れへ呼べ』と無雑作に云つた。

執次役は心得て引き退る、暫くすると龍伯は幕の外まで来て、其處に控へた、關白の本陣とは云へど、假の陣であるから對面の間は僅二間に過ぎなかつた、秀吉は焦慮氣に、

『島津、島津』と催促する様に云つた。

側に居た淺野彌兵衛は幕外を透し見て、

『御遠慮のやうに見え申す、幕外に居らせられる』

云ふと秀吉は聲を張り揚げ、

『何とて左様には辭儀致すぞ、急ぎ内へ入り候へ』と云つた。

龍伯は兩刀を抜き取つて幕外に投げ置き、無腰の儘進み入つて、緣端に平伏した、秀吉は莞爾と笑ひながら、

『去りとては島津入道田舍侍とのみ思ひあつたに、さも無く禮儀に適うた、能くこそ参りつれ』と初めから打ち解け、『此れへ此れへ』と云ふのであつた、秀吉はつく〳〵見て、

『腰の邊り淋しう見ゆる』と後に伺候して居た小扈從の持つて居た差料を取り上げ、

『刀は備前包平、脇差は三條宗近、能く斬れる、此れ遣はさう』と手親ら龍伯の前へ投げ出した、まことに意外の待遇であつた。

（八）

龍伯は手に取つて有難く戴く、折柄近侍の者、三寶に土器、瓶子を添へて運び出る、秀吉は一獻の後龍伯に與へた。

『和睦調ひまづ祝着、して其の方心中如何樣に思ふな』と云つた。

龍伯は顔を擡げて、

『されば、關白殿下御下向と聞きたれど何程の事かあるべき、薩摩の中には軍に勝れた者在す、隨分

手強き合戰仕るべく存じの處、御旗印を見て國人共云ひ甲斐なく頭を下げ、昨日まで龍伯の爲に恩を着た者までが、今日は弓矢向け申す、されど尙國中の者共、龍伯と生死を共にするに於ては、一廉の防ぎも致すべく存じたれど、思ふに任せぬ身上となつて、恁樣に見苦しき狀を御目に掛け申す、斯く零落れて御陣所へ伺候致す上は、只今此の處に身命を召させられうとも、一言御怨み申し上げぬ、此れにて殿下御心次第に爲させられ』と詞清く云つた。

秀吉は聞き、

『只今の申し出で其の方分別相違なくば、此方にも別儀無い、卽ち本國相違なく安堵、爾今以後渝ることあるまじ、ちやが此れまで參つて鹿兒島へ足を入れず引き返すは、弓矢の禮儀何うあらう、由つて鹿兒島の城下まで押進む、早々歸つて支度を急げ』

龍伯は此の時まで一命を助らうとは思ひ掛けであつた、舊領悉くを安堵しやうとは思うても見なかつた、秀吉には重れ重れ憎しみを受けて居るから、必ず深き咎めを受けるであらうと觀念して居たに拘らず、恁程心安く且つ叮嚀な口上を聞かされたので、幾旬の旱魃に雨を得た歡び、活々とした聲で、

『只今の御諚辱く承る、さらば此れにて御暇を給はり、急ぎ鹿兒島の城へ歸つて、殿下御迎ひの仕

度仕るでござり申す』

秀吉は只頷いた、御前に並み居る人々も、意外に寬大な詞を聞いて不審の目を輝かすばかりであつた、龍伯は頂戴の兩刀を捧げて、四五間ばかりも行き掛けた時、秀吉は矗然と立つて、長押に掛けてあつた大薙刀を取りおろし、小脇に挾んでつか〳〵と緣端まで驅け出し、

『島津、島津』と呼び返した。

伺候の面々如何なる椿事出來すべきかと手に汗を握つた、龍伯も驚き顧眄り平伏した、秀吉は愈々機嫌よく、

『如何に龍伯、今日我等へ刎對面の記念なくては協ふまい、此の薙刀は我等祕藏の物、引出物に取らさうと』再び手親ら龍伯に與へるのであつた。

龍伯は歡び、恭しく拜領して罷出る。

秀吉の部下も島津の家中も、龍伯に對して今日此れほど優渥な沙汰があらうとは思ひも掛けぬことであつた、少くも薩摩、大隅、日向の內一二箇國は秀吉の手に收められるであらうと思つて居た、それが案外にも舊領三箇國を下された、秀吉は人々の思ふほど、島津家を重く思つて居なかつた、三十

餘萬騎の大軍を率ゐて親ら討手に向ひながら、義久に斯程に手遲い沙汰を下す、若し秀吉が日本六十餘州を平定して、一代の事業悉く終るのであらば或は義久に詰腹を斬らせたかも知れぬ、島津の舊領地を一分もしくは三分の一に減じたかも知れぬ、爾うして諸大名の勢力を殺いで、己の地盤を堅めるに努めたかも知れぬ、なれど秀吉の望みは其樣小さいのでは無かつた、秀吉の目からは薩摩、大隅日向などが豆の如くに映つて居た、縱し九州全土を手に握るとも馬の秣糧にも足りぬ程に考へて居た。

（九）

秀吉の望みは大明四百餘州に在つた、南蠻、天竺の土地に在つた、九州征伐は島津一家を敵にするにあらずして、島津一家を手の中に懷けるに在る、志忽ち成つて、百萬の軍勢を朝鮮大明へ向ける時、武勇絕倫の義久兄弟をして、其の先陣を驅けさせやう望みがあつた、味方勝利の報を聞きながら、秀長へ命じて妄りに深入りすべからずとの旨を傳へたは、己の手に義久兄弟を征服しやう心があるからであつた、禁裡御料を取り除いて、殘る國々を大小名に宛行ふとも、秀吉は惜む處ないのであつた、人善勝れた矮い身軀の胸の底には、此の時已に大明、南蠻を一呑にすべき大計畫が宿つて居た。

されど秀吉股肱の武將ば主の大計畫を知らでであつた、まして今の今まで當の敵として居た龍伯以下の者が、太閤の心事を知る筈はないから、鐵を以て報いらるべきか、毒酒を以て返さるべきかを危んで居た目の前に、芽出度い土器を下されたのであるから、龍伯は心から秀吉の大度量に歸服した、斯る大將を敵として刃を磨いだは此の身の心得違ひであつたと悟つた、卽ち鹿兒島へ歸ると共に、最愛の娘お勝殿を人質として大平寺の本陣へ送つた、秀吉は龍伯から人質と聞いて直ぐ前に呼び出した、お勝殿は花の蕾漸く唇を染めやうとする十八の美女であつた、綠の髮、雪の如き肌、淸しき目、締りある唇、姿容都にも數あるまじき綵緻であつた、秀吉はまづ此の美しさに打たれながら、心の底にはもし身替にてはあるまじきかとの疑ひもあつた、忠義厚き家來の娘を我娘と僞つて送つたのであれば、心から秀吉に歸服して居るのではない、永く秀吉の幕下に屬いて忠勤を勵む者で無い、一旦降伏は許したれど、尙施すべき手段があらうと思ふので、前に在つた菓子臺を取り上げ、

『能く參つた、菓子取らさう』と云ふ儘お勝殿の面前へ投げ出した。

けれどお勝殿は驚いた狀も無く、只一目御覽じた儘であつた、沈着いた仕方、下々の者の胤では無かつた。

『龍伯實子ぢや、龍伯實子ぢや』と繰返し云ひながら『此れで九州は安泰、まづ芽出度い』と斜ならぬ機嫌であつた。

二十　新納武藏守

（一）

龍伯髮を剃つて秀吉の陣門へ降り、更に人質を出して二心なき旨を誓つたので、島津一家悉く秀吉の本陣へ伺候し拜謁を許されたが、新納武藏守忠元のみは居城大口に籠つて大平寺の陣へ伺候しなかつた、其處で龍伯からは再三使者を送つて、速かに殿下へ降參、御陣所へ參りお目通りを願ふやうと傳へた、武藏守は滿身是膽である、主の詞をも肯かず、頭を振つて、

『仰せに從ひ殿下の御前へ降參せば、薩隅日の三州中、一人の男子も無きに似てお家の恥辱此の上ござらぬ、忠元當城に楯籠り、幾度の御催促にも從ひ參らせぬは其の故ござる、然る上は謀計を同して殿下の御首を申し受け、此れまでの恥辱も雪ぎ申す、已に姬君を人質に遣はされた上は、今更如何ともなし難けれど、生死は此天、御病死と思召されて、姬君御一方を捨てさせられ、すれば天下の實權御方に歸すること、水の低きに就くも同じでござる、姬君お一方を以て天下に代へ給ふとも、御先祖へ御不孝には爲るまい、義の在る處必ず勝利がある、畏れながら少しく惑はせ給ふ所なきか、忠元、御返答此の外ござらぬ』といふのであつた。

使は急ぎ歸つて其事を龍伯に傳へた、龍伯は忠元の口上を道理と聞きながら、尙決し難れて再び使者を遣はした。

龍伯は早く秀吉の度量に服して居た、例の鋭い目に睨まれて、いつまでも幕下に屬かうとの覺悟を極めて居た、再度の使者は云ふまでもなく、此の意味に由つて忠元を說く心であつた。

龍伯から遣はした二度目の使者は、平和論の頭領たる伊集院入道幸侃であつた、宗徒の郎黨三四人を引具して大口の城下へ入つた、忠元は早くも斯と知り、部下の忠義者を呼び寄せ、さて云ふ。

『お家第一の不忠者伊集院右衞門大夫此れへ參る氣な、斯る不義不忠の侍に城下の土地一寸たりとも踏まるゝは本意でない、參り次第打ち取り武士の見せしめにせよ』と云つた。

屈强の侍は委細を承つて城下盡處へ屯し、伊集院幸侃今にも到着せば、忽ち討つて取るべき用

意とりん〳〵であつた。

幸侃は大口領へ馬を乘り入れると直ぐ城下近く殺氣の充滿て居るを覺り、さては、鬼と綽名を招つた武藏守、我等を打ち殺さん謀計ありと見えた、然しながら弓矢八幡も御照覽、幸侃私慾の爲に和睦の道を開いたのでは無い、一圖にお家萬代の基礎を堅うしやうが爲の謀計、大口衆の銃先如何に鋭くとも忠義に凝つた胸板を貫くことは爲るまい、此命彼等の的に爲つて打ち碎かるゝ程ならば、お家の基礎は忽ちに覆らうと思ひながら、心に弓矢神を念じて驀地に馬を進めた、待ち構へた若侍は斯くと見るより素破こそと一齊に銃先を向けた、幸侃は采配打ち振り、

『この顏見識らぬか、主君仰せを受けて武藏守へ物申しに參つた、其の彈丸一箇にても我等胸を擦過らば、お身達皆叛逆謀叛の罪に落ちるぞ』と大音聲に叫びながら肅々通つた、其見幕に怖れて誰一人火蓋を切る者無く、皆が顏見合せて躊躇ふ間、幸侃は忽ちに城内へ馬を乘り入れた、忠元も今は是非なく對面の間へ案內した、幸侃は今日こそ主君よりの御旨を傳へて、武藏守鐵石の心を慰めやうと思ふので、常には優して嚴しく控へて居た、忠元はやがて對面する、一應の挨拶終つて後、幸侃は座を改め『大守御諚謹んで承れ』と云つた。

流石の武藏守も大守御諚とあるを背くべき樣は無く平伏した、幸侃は詞に力を入れて龍伯御諚の次第を陳べた。

『其方より申し越の條道理なきにあられど、我等已に殿下の陣門へ降伏して、永く忠勤を勵むべき旨誓うた、然も其の舌未だ乾かざるに忽ち約束を變更するは武士の道にあるまじきこと、忠心を失ひ私慾を專らにするは家の恥辱、且親子の愛情は天地自然の道、禽獸の末に至るまで此の情を有たぬ者は無い、況や人、縱ひ天下を掌に握るとも、節義に背き寵愛の娘を捨つる事は、我等目の黑い間爲し難ぬる、其の方も早く降伏、殿下へ拜謁致しくれよ』と云はせた。

忠元は夫でも不平の狀であつた、幸侃膝を進め、

『貴公何とて殿下に御對面は爲されぬな、大守に於かせられても、貴殿心底心許なく思召さるる』と情なげに云つた。

忠元は目に稜立て、

『否、我等此の儘にては關白殿に對面致されぬ、武士の意地、薩摩に骨ある者一人も無きやうに思はるゝは御先祖へ御不孝、我等格別の御厚恩を蒙り、先祖惟久日向新納院を下されて後、代々御奉公の

忠を忘れぬ、兎角錆矢一筋にても、殿下本陣へ射掛け申さでは成らぬ、此の儀龍伯公御前へお傳へ下され』と忌々しさうに云つた。

幸侃は念を押す如く、

『すると貴殿、斯ほど申すをお肯きはないか、坊主になつた幸侃の面の皮を剝がうとか』

『敵の陣門に曝らした面、目を開いて見たうはない、其許卑怯の心に由つて、薩摩武士の面目は地に落ちた』

（二）

すると幸侃は玉のやうな涙をはら〳〵と流し、

『其のお心がお館のお爲に爲り申さぬ、武士の意地、弓矢の面ばかりにて忠義は立たぬ、早々御對面爲させられ、只今の忠義は此の一事の外何事も在しまさぬ』と云つた。

忠元夫にても異議を挟まば、跳り掛つて刺違へ、一命を果さう覺悟であつた、忠元は暫く考へて居たが、漸う心が解けたらしく息を吐き、

『御方御爲なるまじき儀とあれば、忠元死したる心に爲つて晉木の陣所へ參るであらう、忠元心から關白殿へ降參致すでは無い、一圖にお家御武運を思ふ爲でござる、其儀具に傳へられ』と云つた。

幸侃は歡ぶこと限りも無い、やがて立ち歸つて其の事を龍伯に知らせた、龍伯は秀吉の前へ出て、新納武藏守降參を披露した。

流石の忠元も、竝に武士の意地を立て貰くは宗家たるお館のためなるまじとの一言に屈して遂に秀吉の本營へ赴くことに覺悟した、宗徒の人々を城内へ呼び集め、幸侃の口上、龍伯の使命、夫等を殘る方なく告げた上、

『今は是非ない、恥を忍んで關白殿御陣へ參る、武士の意地やがて貰く時もあらう、縱ひ殿下御陣所へ參るとも心から頭は下げぬ、心から屈服はせぬ、皆が左樣に心得』

座の者悉く主の心を察し遣つて、不覺の涙に暮れぬはなかつた、忠元はやがて城下の知覺寺へ入つて髮剃り壞ち、名を雪齋爲舟と改めて、秀吉の本營へ赴くべく淋しく馬を進めるのであつた、其時の秀吉本陣は、日向の延岡を東に去る三里半晉木に在つた、晉木から大口までは半日の道程であつたが、途中に羽月川の流れがある、殊に梅雨の後を受けて、水嵩高く增して居たから容易に渡ることが

出來なかつた、由つて遠く馬越の城を廻つて來たので、督木の本營へ着いたのは、日のとつぷりと暮れた頃であつた、秀吉は龍伯からの披露に由つて忠元の到着を待つて居たから、斯くと聞いて直ぐ對面の間へ呼び入れた、雪齋は歷々の家來衆綺羅星の如く並んで居る間を、臆した狀もなくすつと通つて次の間に座を占める、心から手も支かれば、また頭だも上げなかつた、一座の面々は何れも手に汗握る、秀吉は雪齋の顏を見たく思つたが眞遂に『顏を擡げ』と命ずることも出來ず、近侍に命じて兜を取り寄せ、夫を當座の引出物として與へた、けれど雪齋は有難く戴いたばかりで、まだ顏を擡げなかつた、秀吉は本意なく思ひながら、今度は銚子盃を運ばせて、親ら一獻、然る後、

『雪齋、盃與れやう』と云つて與へた。

雪齋は夫でも面を擡げず、不性無精に盃を取り上げた、秀吉は餘りの面憎さに、前に居た淺野彌兵衞を見遣り、

『彌兵衞、一句詠た』

『如何樣遊ばされました』

『怎う申すのぢや、鼻の邊を松風ぞせゝる』

秀吉は笑ひながら云つて雪齋を沈と見た、雪齋は頭こそ圓く剃つて居たが、頰鬚蓬の如く生ひ出で面を半分埋めて居た、秀吉の今の句は夫を嘲ける意味もあつた、彌兵衞は手を支いて聞いてゐた、雪齋は聞くと齊しく、

『上髭をちんちろりんと捩り上げ、鼻の邊に松蟲ぞ棲む』と返歌して、受けた盃を芝生へ投げ捨て、詞も無く座を立つた、近侍の人々更に手に汗を握つた、秀吉は雪齋が五六步退つた時、天地に響く大音を張り上げて、

『雪齋々々〳〵』と呼んだ、秀吉の鋭い目に睨まれ、秀吉の大きい聲に呼ばれた者、皆驚き恐れぬはないのであつた。

けれど雪齋はさのみ恐れたさまもなかつた、再びそこに平伏して、例の通り顏を擡げなかつた。

『まだ云ひ殘いたことあつた』

雪齋はいよ〳〵騷がず、

『何事でござりまするな』

秀吉は笑ひながら、

『如何に雪齋、我等勢ひ斯くの如く廣大なるを見ても、其方まだ我等に弓を引くべく存じ立つかな』と訊れた。

雪齋は畏れ入つたやうに、

『爭か以後野心を挾み申すべき、去りながら、主人龍伯存じ立ち申すに於ては幾度にても馬前の働き仕ろ、されど龍伯は天性正直、一度お旗本と爲つて、主從の御契約致す上は、世間に如何ほど不思議なことあつても、龍伯に於ては御不審を蒙るべきことあらず、始終艮き御味方にて在します』と秀吉の猛威をも怖れず、何の憚る處もなく言上した。

秀吉は心の中に深く雪齋の器量を感じて、

『薩摩武士の標本は雪齋ぞ』と云つた。

誰あらう關白殿下から左程お手厚い詞を蒙つたのであるから普通の者にてあらば、面目身に餘つて感涙に咽ぶ程歡ぶべきを雪齋は爾した狀も見せ無かつた、更に御暇乞ひ申し上げて肅々と座を退つた、一座の面々天晴武者振に驚き感ぜぬは無かつた、幕の外には黒田官兵衞が見張つて居た、雪齋は見るよりつか〳〵と進み寄つて、

『殿下今より大隅、日向を御檢分とござらう、なれど拙者城下は通し申さぬ、此の儀前以て申上げ置く』と云ひ捨てゝ立ち去つた。

此の時雪齋からは銀二十枚と備前物の刀一口とを參らせ、秀吉からは引出物として薙刀と羽織とを與へた。

二十一　凱陣

（一）

此れより讓眞幸院に楯籠つた義珍も降參、一子久康を人質に出し、銀二百枚と刀一口とを獻じた、其外島津の一族悉く降參、北鄕一雲は日向都の城に籠つて、秀吉の大軍を迎へやうとしたが、龍伯と義珍との勸めに從つて、秀長の陣へ降り、人質を入れて二心なき旨を誓つた、されば此れに由つて薩摩、大隅、日向の三國、草木の末に至るまで、悉く秀吉の德に靡いた、九州征伐は小牧山陣に優る大計畫を以て進んだが、思ひの外早く平定して、秀吉は左程の損害を感じ無かつた。

されば秀吉は五月二十七日夫れ夫れに知行割を定め置き、曾木の陣を引き拂ひ、其の日九里半を驅けて肥後の水股へ泊つた、翌日は佐敷、其の翌日は八代に到着して、此處に一日の休息、六月一日八代から熊本の城に移つて肥後の仕置をした、阿蘇の宮の山中は要害堅固で容易に通行もならぬ關所を恃み、一揆徒黨の者集つて、動もすれば萬民の難儀を釀し、旅人を痛め苦める由を聞き、さらば速かに打ち亡ぼせとあつて、夫々用意を調へる間、阿蘇の宮の神主罷り出で、向後左樣の非義致すまじき旨誓紙を認め詫言したので其の儘安堵、肥後は九州一の大國、數年の間兵馬の爲に土地を荒されたれば、心を用ひて治定せればなるまじと、其時まで無祿無知行の儘秀吉の側近くに仕へて居た佐々成政を取り立て、肥後一國の守護職を命じた、成政の面目云ふばかりも無い、四日には山鹿へ進み、南の關高良山を經、太宰府に着き、七日博多へ到着した、南の關を出發する時から、皆御歸陣の道中とて、上下歡び合ふ聲、勇ましくも由由しく聞こえた、六日太宰府の安樂寺へ着いた時、龍伯から岩屋の茶寮でお茶一服差し上げたき旨申し出たので逗留、其の時龍伯に對つて、

『日本に大馬鹿者が二人ある、其許存じか』と訊れた。

龍伯は當時心から秀吉の大德に靡いて居た、暫く考へ、

『一向に心注きませぬ、誰人ござりませう喃』

すると秀吉はお茶の相伴に集つて居た細川幽齋を顧眄り、

『幽齋は存じ居らう』

『一向心注きませぬ、愚老推察、一人は惟任日向守ござりませうか』

『否々』と秀吉は頭を掉つた『日州は不忠者、大馬鹿者とは思はれぬ』

其次に坐つて居た黑田官兵衞を見て、

『官兵衞存じ寄りあるか』

『只今のお訊れ、古き昔のことござりまするか、または只今生きある人々ござりますか』と念を押した。

『今生きて居る者ぢや、お身達の目前に居る者ぢや』と愈笑ひ顏であつた。

『心付きませぬ、はて誰人ござりませうか』

『皆が存じ注かぬか、一人は恁う云ふ秀吉ぢや』

人々は思はずも顏見合せる。

『夫を何故と云へ、九州の果までも三十餘萬騎の大軍を引き連れ、地の理に暗い敵地へ押し寄すること、前代未聞の不覺ぢや、此の合戰今少し難かしくならば、兵糧盡きて無事に大阪へ歸ることゝ爲るまじき處であつた、大馬鹿者ならで爲ぬことぢや』

流石の官兵衞も返答なく口を噤んだ、一座の者皆無言。

『今一人は此れに居る龍伯ぢや、遠國へ大軍を引き率れ參り合うた秀吉を深く怖れて、地の利を得ながら軍らしい軍もせず忽ち降參した、此れも尙且日本一の大馬鹿者ではあるまいか、今少し持ち耐へ防ぎ戰はゞ、此方兵糧に困り見苦しき敗軍をする處、降參には、半月早かつた』と憚る色も無く云つたが、やがて大口開いて笑ひ『此も秀吉の天運ぢや、薩摩の武夫戰爭の法を辨へぬ爲でない』

龍伯は言句も無かつた、並み居る人々秀吉が無頓着に斯かることを廣言する度量の深きに驚き怖れた。

翌日は筥崎八幡宮へ參詣して、寶殿を伏し拜み、やがて其處に陣を立てた、近侍扈從の面々秀吉の本陣を中央にして、左右前後に小舍を營み、我劣らじと結構を盡したので、筥崎の社頭には時ならぬ邸町が出來上つた、秀吉は八幡の寶殿に端坐して野山を見入りつゝ、

千歲をも疊み入れたる筥崎の
松の花咲く折に逢はゞや

と詠んだ、側に居た幽齋は松に寄する祝の心を詠んだ。

劍なば此處に納めよ筥崎の
松の千歲も君が世の友

在り合ふ短册に書いて秀吉へ參らせた、秀吉はます〳〵興に入り、

『此の邊昔は繁昌並びない處と聞いた、今の模樣は何とあらう』と心あり氣に訊いた。

秀吉は遠き海外に大きな望みを抱いて居るので、昔の港、今の港、大船巨舶の往來する浦々には殊に深き注意を拂つた。

されば門司赤間ヶ關へ着いた時は、やがて大明南蠻の船舶往來すべきにつき、その心をもて港口を築くやうと命じ、城普請、石屋は堅固を旨と指圖した、博多は古の要津、定て用ふるに足るであらうと思つたので、それとなく問を試みたのであつた。

（二）

幽齋は一膝進めて、

『されば、此れも古より唐船の着いた處、上代太宰府を置かれてより、博多の町々次第に繁昌、在家十萬餘戸に及び、泉州堺の津にも劣らぬ豪家富商齎を並べて、繁昌一方ならずと承つた、仁明天皇の御宇、新羅人筑前大津に來ると、續日本紀に書かれある、其の大津は博多の浦と申しござろ、されば貞觀十一年太宰權少貳阪上瀧守より奉つた文の中にも、博多は此れ隣國輻湊の地、警護武衞の要、とござります、日本の書籍文書ばかりではない、唐の文にも霸家臺または八角島等記しござりまず、何樣舊き港、唐土南蠻諸國の船皆此浦に到着、西海第一の港と稱へられたに違ひござりませぬ』

『左程繁昌の地、今は何とて寂びてある、其の仔細聞き度思ふ』

秀吉は、愈興に入つて訊れた。

『さらばまづ博多の跡を見させられ、昔は南の町の中央に東西へ通ずる入海あつて、袖の港と云ひ、唐船の入つた處と聞き及ぶ、今は埋もれて横一二間の小川と爲つたれど、尙且東西に通じ居るでござります』

幽齋は知れる限りの說明に努めるのであつた。

『夫れ見やう、其の狀態見やう』と秀吉は直ぐ云つたが『然し此の儘にては興が薄い、南蠻船に乘つて海路を出やう、誰かある、用意を爲』と命じた。

小西彌九郎、其の頃は攝津守行長と爲つて、尙且お側に伺候して居たが、承る旨を答へて出て行つた、南蠻船を飾り立てゝ筥崎の濱へ着けたは夫から一時の後であつた、秀吉は心利いた扈從を引き率れ、船に乘つて博多へ漕ぎ出した、博多の町人斯くと聞いて歡ぶこと一方ならず、土地の舊家で茶事風流に趣味を持つてゐる神屋宗湛を先に立て、雲霞の如く港口へ出迎へた、『皆が大儀』と秀吉は鷹揚に挨拶して定めの旅館に入つた。

黑田官兵衞、細川幽齋を初め宗徒の匹々皆お供する、博多の町人は行列の後からぞろ〳〵と從つて秀吉本陣の門前に輩集した、秀吉は座に着くが否、

『博多の昔聞きたい、さしも繁昌の土地何とて恁樣に衰へ果てたか、理由存じある者あらば、此れへ召せ』と深く考へるやうに云つた。

お側衆は群集せる町人に對つて御諚の旨を傳へる、誰にてもあれ、一人御前へ出づべき旨を命じた神屋宗湛畏る畏る膝行り出た。

『博多町の今昔お訊れの事あらば、及ばずながら宗湛御返答申し上げ奉る』と云つた。

さらばと云ふので秀吉の前へ伴ふ、秀吉は上段の間に緩々として座を占める、左右には歴々の大小名袖を列れて伺候する、宗湛は縁下に蹲踞る、執次役は、博多の町人神屋宗湛お召に由つて參上の旨を披露した、秀吉は詞輕く、

『博多の繁昌泉州堺の津にも優り居つたと云ふ、其の頃よりの物語聞かうぞ』と云つた。

宗湛は手を支いた儘頭を揚げ、

『有難きお訊れ、宗湛知る限りを申し上げ奉ろ、上代より名に高き港、其形鳥の兩翼を擴げたやうに見えまするで、羽の形と申し居つたことが、何時の間にか博多と訛り呼ぶやうに爲り申した、昔唐船の入つたと申す袖の港は、今埋れて大水道の名を殘し、其の北の荻の濱には石垣長く連つて、東は筥崎、多々羅に及び、西は今津までも延びござり申す、此れも上代よりの遺物、異國船の來襲を防ぐ爲、石垣を築いたのが、其の後崩れ壞たれあつたを、文明弘安の頃蒙古の賊兵屢次來つて狼藉を働く爲、

再び修理致したが今に遺りあるのでござる』

(三)

秀吉は愉快氣に聞いて居た、宗湛は語を繼ぎ、

『其の石垣の堅固、東より西に連る有樣を見ても、當時の繁昌思ひ遣られまする、大内家繁昌の頃は袖の港の入海より南を領して政事を布かれ、荻の濱は大友殿所領であつたと申す、處が其の後大友大内兩家勢力の爭ひ起つて、合戰止む間も無く、さしも繁昌を極めた博多の町も次第々々に衰へて、町家大半燒き失はれ、見る影もなくなつた處へ、近く大友龍造寺兩家の合戰、續いて島津大友毛利の爭、其の度毎に殘る家々を燒き拂つて、御覽ぜさする通り一面の草原と爲り終る、榮枯盛衰は人の上ばかりともござりませぬ、陸にも海にも免れ難き數とは申せ、昔の繁昌を偲びて、今の寂寥を思ふ毎に、心ある者皆袖を濡しあろ、哀れ殿下御恩德に由つて、此の地再び昔へ復るを得ば、櫛田の御神さぞ御滿足在らせられませう』と涙を流すばかりに云つた。

秀吉はつくづく聞き、

『宗滿の願ひ道理と聞いた、肥前豐後の爭ひ、島津毛利の戰ひに家々を燒き蓋され、諸人難澁に及ぶこと見捨て置かれぬ、早々博多の町を再興せ、奉行は黑田官兵衞に吩咐くる、瀧川三郎兵衞、長束大藏大輔、山崎三河守、小西攝津守添へと爲つて町割致せ』と無雜作に命令け、更に宗滿に對つて『今云ふ通りぢや、町人の難澁を思ふに由つて、當町再興の趣意を立つる、皆が力を戮せ、心を傾けて昔に幾倍する基を開くやう心掛け』と云ひ渡した。

宗滿は手の舞ひ足の踏む處を知らず、門前に轉び出て、

『皆が歡べ、關白殿下御仁德雨の如く此の町へ降り注いだ、博多の町御再興、總奉行は黑田官兵衞殿、夫々御奉行、明日から町割繩張りに御着手あらせらるゝ』と大音に呼はつた。

幾百人の町人千秋萬歲を呼び叫び、氣も狂ふばかりに舞ひ跳つて、家々町々歡聲に滿たされぬも無かつた。

秀吉は大阪を出發する時、島津征伐よりも九州の何れかに亘き港を見附やうと思つて居た、幾年後、日本六十餘州の兵を引き率れて、遠く大明、南蠻へ渡航するには、最も亘く最も廣き港を有たればならぬと、港に住む町人一統の心を取り置かればならぬと、心に夫等の計畫を念として居た、されば博多

の町再興も、啻に由緒ある土地の衰微を救濟ふと云ふ外に、尙深い意味のあつたのが知れる。

翌日からは黑田官兵衞總奉行と爲り、其の下に瀧川、長束、山崎、小西の奉行附屬して、更に下奉行三十餘人を付け、町の區域を十丁四方と定め、竪橫の工事を割り、民家の建築に取り掛らせた、秀吉歡びの餘り、

博多町幾千代までや蓁るらん

と一句した、官兵衞の叔父黑田休夢取り敢ず、

建ち並べたる門の賑ひ

と附けた。

博多の津は往古夷賊防禦の土地として太宰府への道路に當つて居るので、北を外面とし、南を內面とし、南北を竪とし、東西を橫として町を割つた、南の外廓には橫二十間の濠を掘り、瓦町西南の隅より辻堂の東に至るを南方の要害とした、されば秀吉が此の町を再興するに當つても、諸奉行は昔の古實を溫れて、南北を竪として町を廣くし、比較的大きな家を建てたので、其處には富豪家が住むことになつた、本町と云ふは此れである。

（四）

竪町は昔太宰府へ往來した通路でもあり、また唐船の着いた海邊にも通するので、大通として町幅を廣くしたのであるが、東西はそれに反して町も狹く家もまた小さかつた、神屋宗湛は此の町割の相談相手となつて、力を盡したので、表口十三間半の居宅を下され、永く町役を除かれた、目下博多奈良屋町に祀られてある豐國神社は、宗湛が豐公の恩誼に報ゆる爲、自宅の裏へ祠を建て、祀つて居たのを、明治十九年博多町再興三百年に相當したのを記念するため、市民奮つて改築をしたのであつた、寶物には當時の町割間杖等が納められてある筈である。

秀吉は博多町の再興成就を見ると云ふ名目に由つて、尚暫く筥崎の本陣に逗留した、側には利休、幽齋、曾呂利新左衞門等交替伺候して機嫌を取る、晝は近海に舟を泛べて港の深淺を測り、夜は茶事俳諧に興じて夜の更くるを知らぬ、陣所々々へは夫々に酒肴を下されて、滯陣の徒然を慰めた、されば昨日は血腥い戰場に驅逐した人々も、今日は極樂淨土に浮び出た如く歡んで、豐臣家萬歲を祈らぬは無かつた。

秀吉の本陣外には篝火を焚き列れ、宿直數しく、御馬廻り衆番を務める外に、大小名幾百人、松原、筥崎、多々羅川四里四方へ陣を打つて、旗指物馬標思ひ思ひに飾り立てたれば、浦吹く風に靡いて、晝の眺め宛ら錦を延べ列れたやうに美しかつた、海上は志鹿、姪濱、鳥飼等遠き沖合に兵船幾千艘、此も麗しく飾り立てい、時には歌舞管絃の音さへ聞えた。

其の月二十七日秀吉は九州の處々で寄せ集めた花瓶多くを取り出し、夫に一箇々々優しく美しい草花を生け、秋の野に擬へて興を催した、實に風流閑雅の御催しと、一同皆秀吉趣向の思ひ附きよきを感じた、側には例の如く幽齋が詰めて居た、都から伴つた秀吉の壁女松の丸殿は花生に挿んだ花よりも尙美しく裝ひ飾つて座に侍る、秀吉は機嫌よく、

『幽齋發句　仕れ』と云つた。

幽齋は聲に應じて、

夏草に花の香ならず秋かなと詠んだ、松の丸は直ぐと續けて、

涼しき夜半の狹衣の月

すると同じ座に加はつて居た由己が三の句を、

白露の簾の隙に傳へ來て

と付けた。

秀吉は愈〻興に入つて見えた、すると加藤清正慌しく立ち出で、

『一大事言上、お側衆を遠ざけさせられ』と云つた。

秀吉は見て、

『清正か、折柄一折催しある處、一大事の執次、秋の野に野分した如く淺猿數う思ふ、彈正居やう、諸事は彈正に談合せ』と耳を塞ぐやうに云つた。

彈正少弼は淺野彌兵衞である。

『彈正殿へも只今進達、殿下直き直きお捌き在らせられでは協はぬ儀、お供衆の中に切支丹宗門のもの加はりござります』

清正は押して云つた、秀吉は直ぐ聞き咎めて、

『供廻の中に切支丹宗門の者あると云ふか、容易ならぬこと、而て何者ぢや』

『御馬廻衆の中高山三左衞門、幸山伊織、此の兩人ござります』

『言語道斷、怪しからぬ儀ぢや』

『確乎とした證據の品々御目に掛け奉る、神佛兩道の外邪教を禁じさせ給ふ日本國の中、切支丹宗門の者あつては御國の恥辱ござります』

清正は熱心な日蓮宗の信者であつた。

（五）

『勿論の儀、篤と詮議、愈〻夫と定まらば、直に召し取り當社神前に梟け、諸人の戒めとせ』

と秀吉は卽座に命じた。

『心得てござります』

清正が座を立たうとすると、小西攝津守は呼び止めた。

『加藤殿暫く待たせられ、只今御披露の儀、行長其の意を得申さぬ、切支丹宗門は遠くより渡來、諸所に信仰の傍輩數多くある、總見院殿足利將軍を奉じ都へ入らせられた時、南蠻人異國の教へを傳へ

て西國邊を布教すると聞かせられ、永祿十一年伴天連を招かせられ、四條坊門に南蠻寺を御建立なされた、其舊跡貴殿も親しく見させられあらう、伴天連の教は未來にあらずして現世に在る、未來の苦を除くにあらすして、現世の眞樂を謳ふに在る。されば洛中洛外に人を出し、山野の辻堂縁の下を捜させて、非人乞食、世に頼倚なき難病難澁の者を連れ歸り體を清め衣服を與へ、醫藥食物裕かに支給するが故、人々皆生菩薩現世に現はれ給ふとあつて、歸依信仰致しある、一向宗門徒の者共は檀家旦越の喜捨を受け、他力に由つて法を廣め行きながら、時には勢ひを恃んで武門武士に敵對、一撲を起す儕輩少からぬ、夫等に較ぶれば、伴天連の法、いみじく功德淺からぬとあつて、厚く御保護を加へさせられた、當殿下の御世となつて、切支丹宗門の者御憎しみ淺からねど、彼の者未だ殿下の御威光を傷けた例聞かぬ、況して一揆を企て、天下國家を亂す者あるを聞かぬ、さるを殊更御詮議、重き御刑罰を加へ給ふは偶々御仁政の曇りと存ずる、左樣なこと一々お執次致すに及ばぬ、穩便の計ひ然るべき儀ござらぬか』

清正は喝と急き立ち、

『舌長な口上、またしても異國人の肩を持ち御國の佛法を輕んずる條聞き捨てならぬ、殊に殿下仰せ

付け、一旦御沙汰あらせられたを反古にすること爲らうか、控へ居』

素破と云はゞ刀の柄に手を掛けんず狀も見えた、行長も負けては居らぬ。

『御邊其の一を知つて二を知らぬ、殿下は總見院殿を重く頭に戴かせ給ふ、曩には北國征伐、中國四國御一統、今また九州に御馬を進め給ふも、總見院殿御志を繼がせ給ふに外ならぬ、然も總見院殿御許し在らせられた切支丹宗門を憎ませ給ふことあるべき儀は無い、畢竟かお側に附き在る者差配宜しきを得ぬ爲ぢや、御邊が日蓮宗門に歸依致すも、高山三左衞門、幸山伊織が切支丹に歸依致すも、詰る處は同じ意味ぢや』

二人の爭ひ果てしもなく見えた時、秀吉は靜に行長を見返つて、

『津守はまだ總見院樣お心を知らぬ、一旦は切支丹を都へ招かせ給ひたれど、其の仕方に深く御疑ひを挾まれて、後には御不審のお心を發せられた、餘人は知らず秀吉御側に在つて時々仰せられた事共を承り在る、切支丹宗門の者他人より物を受けず、乞丐非人鰥寡孤獨の者を訪れ、偏に愚を賣らうとするは、やがて夫に由つて日本國の人心を收め、遂には不思議の禍を釀すまじきにも限らぬ、南蠻寺を建立させたは、信長一生の過りであつた、と、滲々と御意あつた、されば今に及んで切支丹宗門

の者を成敗致すは、取りも直さず總見院樣お志を繼ぎ奉るのぢや、虎之助躊躇するに及ばぬ、今申し付けた通り、切支丹信仰の者篤と詮議せ』

秀吉の一言は實に鶴の一聲であつた、さしもの行長も日を噤んだ、清正は面を起す思ひにて恰々と引き退つた。

(六)

清正の申達は果して事實であつた、秀吉旗本に屬して馬廻を勤める高山幸山の二人は、果して熱心な切支丹信者であつた、秀吉は屢に四國を巡視して、切支丹の弊害圖るべからざるものあるを察し、南蠻寺破却を命じやうと思つて居た處であるから、竝に切支丹宗の處刑するは當宗門の根據地たる西國の人心を新しくするのであつた。

やがて翌日清正の手に由つて兩人を召し捕り直に首を刎ねて、筥崎八幡鳥居の側へ曝した、其時秀吉の樹てた制札に左の如く記された。

定

一日本は神國たる處へ切支丹國より邪法を授け候儀、甚だ以て然るべからざる事

一其の國郡の者を近付け、門徒に爲り神社佛閣を打ち破らさせしは前代未聞に候、國郡所在知行等給人を下され候儀は當時の事に候、天下よりの御法度相守り諸事其意を得べく候處下々をして猥り候儀、曲事に候事

一伴天連其の智慧の法を以て志次第檀那を持ち候はんと思召され候處へ右の如く日域の佛法を追ひ破り候事曲事に候條、伴天連の儀日本の地には差し置かれまじく候故、今日より二十日の間に用意仕り歸國すべく候、其中下々伴天連に謂はす、族申し懸くる者あらば曲事たるべく候事

一黒船の儀は商賣の事に候故、格別に候事、年月を經、諸事賣買仕るべき事

一自今以後佛法の妨げを爲さゞる事は證人の儀は申すに及ばす候、何にても切支丹國より往還苦しからす候、條其の意を爲すべき事

切支丹禁制の源は此處に發した、南蠻寺破却の源も此處から起つた、當時諸國に在つた南蠻寺は、其の數實に四十二の多きに上つて居た、夫が此の制札と共に悉く亡びて了つた。

總奉行黒田官兵衞の繩張その宜しきを得たので、十一日鍬初をしてから、二十九日までに大凡の規

樓が成つた、秀吉は深く滿足、さらば筥崎博多の人々に別れを告げやうとて、七月一日出發、其日は宗像に一泊、翌日は長門の國赤間ヶ關へ着いた、此處から海路を都へ志す積りであつたが、秋風強く吹いて波荒く船を出すことならねば、空しく六日まで逗留した、されど六日もまた風荒く波高く、到底も長き航海を爲し續くべき見込なければ、遂に陸路を取ることに決して、その夜は船木に一泊、七日山口へ着いた、恰ど七夕の夜であつたので秀吉を初め人々和歌發句、女共は織姫に果物、色絲などを供へて夜の更けるまで語り續けた、八日出發、十日岡山へ着、十二日備前片上へ出て夫れより乘船、十四日大阪の城へ凱旋した、今度の九州征伐には秀吉不思議の功を樹てゝ、さしもの島津一家を味方に屬けたばかりでなく、やがて計畫すべき大明征伐の準備に第一の必要とあるべき港々の有樣を見極めたのは何れほどの利益であつたかも知れぬ。

大阪堺の町人は、關白殿下御着といふので、數百千人が隊を作り出迎へた、秀吉は九州の土産と云つて、多くの金銀米穀を頒ち與へ、まづ大政所の居間へ入つて無事の顏を見もし、見せもし、更におれいの方を引いて、留守中大儀の挨拶をした。

大阪に二泊の後、淀へ入つて茶々どのに對面、やがて入洛して天機を伺ひ參らせた。

『朝鮮上古の交誼を忘れて、國王少しも貢ぜぬ、海内の兵馬鎭まるを待ち、秀吉出馬、きつと打ち懲らし參らうと存ずる』旨を此の時始めて口へ出した。

義久改め龍伯は秀吉と共に入洛した。

二十二　北野の大茶會

（一）

秀吉は策て伏見向島に普請中であつた伏見の城成就したので、九州から歸ると共に、大阪城から引移つた、伏見城は伏見山に寄り、大龜谷を北の境とし、大手門を西に設けて、伏見一帶を城下と定めた、南は宇治川の流れ滔々と岸を嚙み、東は木幡山へ連つて、中央に内廓を置いた、東西四丁南北六丁、到る處へ桃の木を植ゑて、春の景色を彩つた、本丸は最も高く天主臺朝日に映じて、結構云ふばかりもなかつた、北には松の丸山岡丸、其の外廓に長束大藏大夫の屋敷在り、大手の堅めとして、石田治部少輔干疊敷の邊に住み、南に名古屋丸を置き增田右衞門尉其の前に屋敷を構へる、外廓もまた

同じほどの結構であつた。

斯して天下は秀吉の手に一統せられた。東に北條蘆名の一族あつて、尚獨立旗を翻して居たが、夫等は眞の九牛の一毛にだも過ぎぬものであつた、秀吉一度兵を動かさば忽ちに崩れ落つべき運命を有つて居た、秀吉已に諸國の大敵を打ち亡ぼし、官は太政大臣關白の高きに昇り位は一位に進んで天下の政事を掌の中に握れど、其志は區々たる日本の浦々にあらずして大明四百餘州に在つた、朝鮮、南蠻、天竺の諸外國に在つた、遠からずして二百萬の大軍を海外に出すに就いては、國内に少しでも異圖あるものを置くこと協はぬ、外に大軍を送り出して後、國内に動亂を見ることあつては、從來に築き上げた地盤覆る、斯くては半世の事業水の泡にならう、さりとて諸所に潜み匿れて密に刀を磨ぐ者に對して詮議の手を付くることは難しい、何とかして一時に國内不平の徒を探り出し、一網に打ち滅す手術なきかと獨心を苦しめたが、やがて思ひ立つことあつて、八月早々、洛中、洛外、奈良、堺、大阪、尼ケ崎等に高札を樹てた、其の文言は左の如くであつた。

高札

來十月朔日於二北野松原一可レ令二興行茶湯一候不レ寄二于貴賤一不レ拘二貧富一、望之面々令二來會一可レ催二興一禁二美麗一好二儉約一誉可申候、秀吉數十年求め置きし諸道具かざり立おくべきの條、望みし第一見物一者也

八月二日

所謂北野大茶會の催しである、貴賤貧富に關らず、心ある者皆來會せよとの立札であるから、夫を見た武家町人鄉士百姓浪人の末々まで驚きもし感じもした、足利將軍の時代から茶の湯のお催しにも數あつて、數寄を極め、結構を盡した會席も設けられた、されど北野松原の廣野に於て、天下の諸大名を驅り集め、志ある浪人、鄉士、百姓、町人、所有階級の者を寄せ集めて大茶會を開かるゝこと前代に聞きも及ばぬ、後世にも恐らく此れ程の大規模の茶會はあるまい、流石は太閤殿下、流石は徹底より身を起して日本國を掌に握らせられた太閤殿下、人の思ひ注かぬことを爲さるゝ、好い時に生れ合せて、千古未曾有の大茶會が拜見される、まことに芽出度いこと、諸國の大小名、詫好きの面々、爭うて珍器名品を持ち寄るであらうから、十月一日の北野はやがて珍器名品で埋もれやう、貴賤を擇ばず貧富に拘らず、望みの面々をして來會せしむる旨の御高札忝しとも難有し、我も行く、汝も行け、と到る處に取り沙汰、野の涯、山の奥までも此の風評の聞えぬ處は無かつた。

諸人の持て囃す如く、此の茶會は前代未聞の盛事であつた、何事も大きなことの好きな秀吉は、北野の松原一里四方を茶席にして思ふまゝ數寄を盡さう心であつた。

（二）

秀吉の眞意は斯して一興を催すと云ふだけでは無い、斯して天下の名器を一所に集め樂まうとするのみではない、貴賤老弱打ち交つて出入を許し、一の位に在る我等、警護の武士も置かず、只風雅に輕々しく茶會の席を徘徊すと聞かば、秀吉の政治を快よからず思ふ者、必ず茶人託數寄に紛れて忍び入り、親ひ寄つて刺し殺さうと企つるであらう、もし秀吉の首級を得べく近寄るべき機會ありとすれば、此の大茶會の席上に優るはあるまい、されど天運高き秀吉の身に浪人侍の刃立つべきやうは無い、忽ちに搦め取つて、異心を抱き居れる者に對し、悉く刃を加へ、國内不平の者等を一掃して、心安く海外征伐の途に上らうとの思慮があつた。

されど如何な勇士豪傑も、秀吉の心中に左程深き謀計があらうとは知らぬ、十月一日には殿下御催しとあつて都北野の松原に大茶會を催し給ふ由、いで〳〵傳來の名器を携へて御鑑賞に預らうと思ふ

者、我も我もと上洛して、北野松原の邊を徘徊、此處彼處と好い席を望む樣は一入興深く見えた。

當時の茶社會は、堺派と都派との二つに分れて、互に數寄を爭うたのであつた、堺の南北には遠より秀でた數寄者があつて、夫々に流儀を立て、京の數寄者は堺の數寄者を嘲り笑ふ、堺の茶人は東の數寄者を得失に敏き町人流と云ひ、京の數寄者は堺の茶人を無風流の骨頂と嘲つた、堺の町人は足利の初期から幾度も戰場を經て居るので、武士の風骨を帶んで居たが、京の茶人は一圖に風流を旨とするので、勢ひ損得に關らう狀も見えた、此の兩派の數寄者連中、此度を晴れと來會する旨聞えたので、其の爭ひを見るだけでも、例なき興であらうと云つて、心あるも心ないも十月朔日を待ち難れた。

態程まで人氣立つたが、秀吉はまだ物足らぬらしく、近習お伽の衆中三百五十人を選み出し、此の度北野の茶の湯に屹度罷り出づべき旨を云ひ付けた、當日の奉行は德善院玄以、千の宗易、此の二人に命ぜられた。

やがて其の日と爲ると秀吉は、高札の表に由つて、數十年來求め置いた諸道具を飾り立てた、中にも虛堂の墨蹟、內赤の盆、紹鷗の天目、珠德の茶杓、紹鷗の茄、尼ケ崎壺、象牙の茶杓、炮烙釜、金

の蓋置、小霰の釜、桃尻の柄杓立、備前筒の花入、胡桃の柄杓立、腰掛の天目、折ための茶杓、井戸の茶碗等人の目を引いた、次には千の宗易利休居士の席があつた、其處には烏丸の香爐、雁の畫、棗兒の茶壺、楢柴の茶碗、蛸壺の水瓶、竹の蓋置、折ための茶杓等最も評好く、次には泉州堺の茶人津の宗及、次には同じ堺津な屋の宗久、經堂の角々を思ひ思ひに圍つて棗子を飾り、華かに數寄を出して御機嫌を伺ひ奉り、其の外大木の下、松原の寂た處に野立の茶を參らせろもあり、傘一本の下に樂むもあり、又は荷ひ茶屋と云ふに事寄せて樣々の趣向を盡したのもあつて、五百餘人の數寄者夫々に趣向を凝らしたから、一里程は北野方面周圍一寸の空地も無く、炭の香、香の煙が充滿ちた、秀吉の茶席は都合三箇所あつて、第一席には近衞信輔、日野輝資、德川家康、北畠信雄、穴津の侍徒信兼の五人交々手前を勤め、二番の席には小一郎秀長、孫七郎秀次、前田利家、蒲生氏鄕、稻葉貞通、千の利休此の六人が交代に客に接した、三番の席には織田有樂齋、丹波少將秀勝、蜂谷賴隆、浮田秀家、細川忠興の五人が交代で衝に當つた。

こゝにこそ多くの趣向は凝らされたのであつた。

（三）

秀吉は扈從十人ばかりを召し從れ、まづ蜂谷出羽守の席へ入つた、賴隆の面目云ふばかりも無い、お茶を差し上げ四方八方の物語、秀吉の機嫌日本一にて、

『今より各數寄を凝した座席々々を回らうと存ずる、お身も參れ』と云ひ捨てゝ立ち上つた。

賴隆は直ぐお供する、扈從衆の中には加藤虎之助もあつた、福島市松もあつた、糟谷片桐脇坂の面面油斷なく前後を守護して供をした。

扨、此度集つた茶器名器、珍らしく面白きこと詞の盡すべきで無い、或は數寄屋の輕き作意或は思ひ思ひに作り爲した趣向、夫々に風情あつて、一々に目を樂しましめる、恁樣の珍器數を盡して寄り集まること、偏に殿下の御威光にあらずばなるまじと、人皆感じ合へる中に、秀吉は數寄屋數寄屋の結構よりも、其の主の面構、眼光、一寸した擧動にも心を注けて、心の底までも見拔かうと力めた。

斯て諸所を見廻つて居ると、只ある大木の下に面白き竹の自在を掛け、霰釜の寂びたのに颯々と松風の音を立て、心憎き程も色の良い青地の菓子器に紅白の饅頭を盛つて出し、伽羅の香り良いを焚

いで、靜かに客を待つ數寄者があつた、秀吉は早くも目を注げ、

『扨心憎く趣向しつるは、一服所望せう』

云ふ儘に膝行り入つた、主は殿下入來と見るが否、平蜘蛛の如く平伏して、まづ恭悦申し上げ、

『此の度の御趣向前代には聞きも及ばぬ、末代再びあるまじき御風流』と褒め稱へて後、粗末なるお茶參らせう』と赤樂の茶碗取り上ぐる、秀吉は其の狀をつく〳〵見たが、

『宗匠は何れの出生ぢや、年久しくなれど、何處やらに見覺ある』と鋭い目を光らせた。

主は垂頭勝に茶を立てながら、

『四國の住人ござりまする、姓名を申し上ぐる者にては在しませぬ、只數寄の道とて此度の御催しに外れまじく御覽の通りいぶせき器を背に荷ひ遙々參上、圖らず御意を得奉るでござります』と云つた、秀吉は磊と手を拍ち、

『其の語尾で思ひ出した、四國の住人とは、僞り、お身は惟任光秀の一族、明智孫十郎あらう』

と星を指した一言、主は手にする茶碗を取り落す程に驚いた。

『否、左樣な者にては……』

云ふ詞の終らぬ間、加藤虎之助は詰め寄つて刀の柄に手を掛ける、秀吉は詞も無く立ち上つた、主は取り返し附くまじき失敗を心に悔む如く、眦も裂ける程に屹と睨んで、後より跳り掛らうとする隙も與へず、福島、片桐立ち掛つて捻ぢ伏せた、秀吉の眼力は果して露も違はなかつた、彼の懐には怖ろしき七首が呑まれてあつた、明智孫十郎、主の仇を復はうとて、此の度の茶會に紛れ入り、此處に野立の席を設けて秀吉の入來を待つたのであつた。

『殿下御身を狙ふ曲者、此の儘には置けぬ、早や引き立て』

清正は大音であつた。

『おゝ、おゝ』片桐、糟谷、左右から手を取つて引立てやうとしたが、それは何の甲斐もなかつた、孫十郎は最後の手術を仕損じて、糺明の庭に置かれるのを恥ぢたるか、舌を噛んで死んだ。

死骸は西山へ捨てられる、秀吉はこんな男を尋ねながら、廣い茶席の中を、あちこちと見歩いた、時は次第に移つた、早や未の下刻となつた。

（四）

すると、席の外處の松の木陰に、桔梗の枝の美はしきを持つて、悄然と立つて居る婦人があつた、誰あらう、殿下側近く御入來と云ふにも心注かず、餘念も無く柵外の野景色を凝視て居た、秋は早や老い行きて、枯れ行く草の葉末に夕紅葉美しく蟋蟀の音も細つて、諸處に咲き殘る桔梗女郎花刈萱の色殊に哀れ深く見えた、夫に心を奪られたのか、または此の淋しく哀れなる野景色に對して、過ぎ越し方の事共を思ひ出すのか、身動きもせず佇んで居た、秀吉は其の後を通り掛つて見るともなく見たが、近侍の面々は、明智孫十郎の茶席で思ひ掛けぬ椿事のあつた折と云ひ、輕々しく賤しき女人に近付き給ふ主の上心許なく、互に目引き袖引きしたが、諫めて聽かせらるゝ方では無いので、誰諫言を參らする者なけれど、各自油斷なく心に刃を磨いで扈從した。

〈〈秀吉はつか〳〵と女の後に寄つた、女はまだ心注かずに居る、手に提げた桔梗の花が風に搖ぐ如くびり〳〵動いた、秀吉は輕く手に持つ扇子の頭に女の肩を打つて、

『此れよ此れよ』と聲掛けた。

女ははつと思ふ狀、振り返り樣、手早く懷劍を引き拔いて秀吉に斬つて掛つた、一言も詞は掛けぬ、何樣不意を窺つて只一突に突き殺さう思案らしかつた。

もし心に油斷あらば、秀吉は其の鋭き切先に掛けられて重傷を負うたのであらう、愚くすれば胸先を貫かれて迸り出る血汐の中に、敢なく命を落したであらう、けれども秀吉は一寸の油斷も無かつた、髮の毛の一筋毎、手足の頭の爪にまで魂が充滿た、敵が懷劍を拔く隙に、早や一間餘りも跳び退いて、

『退り居らう』と大喝した。

同時に特長の眼中から稻妻よりも鋭い光が閃き出た、曲者は初太刀を仕損じ、慌て氣味に再び切つて掛らうとする胸元へ、鋭き眼の光大銃の彈丸よりも怖しく來た、夫に打たれて思はずも逡巡する、加藤、福島、脇坂、糟谷、蝗の如く跳び掛つて有無を云はせず取つて抑へる、見ると面にこそ覆しき女の衣を纏つて居たが、實は骨太の男である、大力無雙の人々に抑へられながら跳れ返さうと悶ゆる力が並大抵の武士ではなかつた、高手籠手に縛めて秀吉の前に引き据ゑる、秀吉は見て、

『面を上げ』と云つた。

曲者は血走る目に屹と見て無念の齒を切る。

『見覺れぬ者、まづ名を名乘れ』と秀吉は云つた。

『斯く淺間しき身となる上は、何事も隱し申さぬ、佐々内藏助成政の家來久世又助、殿下を恨むる仔細あつて、今日の席へ忍び入り、心に刃を磨きござる、然も殿下御威勢我等下々の者手に立つやうは無く、阿容々々〳〵繩目の恥を受くるも、是非なき運命と諦め申した、只主君佐々殿殿下に對して一片の野心も有たせられで在した、肥後の國内に叛逆の者あつて、政事に脫漏あろやう云ひ立てたれど、まことは佐々殿忠義のお心、檢地檢竿の功に由つて、殿下への御貢を增し加へやう思召に外なりませぬ、然も其の眞心屆かず、情無き御最期を遂げさせられた、不愍と思召され、不愍と思召して家名再興の儀をお心に掛けさせられ、最期の願ひ、此の事のみを申し上げ置く』と迸る淚の中から云つた。

流石の秀吉も又助の孤忠を憐まずに居られなかつた。

『委細を聞き置く、諸事は我等思案に在る』

云ひ捨てゝまた次の茶席を訪ふのであつた、又助は忽ち下司の手に引き渡されて、其の日の中に首を刎れられた。

一里四方に餘つて幾百とも數知れず設けられた茶席の中には、孫十郎又助同樣隊を窺つて秀吉の側近く進み寄り、主のため、親のため、若しくは其身自身のために、深き恨みを返さうとした者五六人もあつたであらう、また多くの大名小名の中には、勢ひ止むを得ず秀吉の幕下に屬いて居ながら、折あらば刺し殺して原の地位勢力を占めやうと願つて居た者もあつたであらう、夫等は茶席の何れかに於て椿事出來するを待ち決然と奮ひ起つて秀吉を守護する如く見せ、押し裏んで斬り殺さう手段を定めて居たが、秀吉の大威光はさしもに廣き茶會の隅々に行き渡つて、誰一人手を下す餘地なかつた、明智の殘黨、佐々の浪人、刃を磨いて邊近く潛つたとの噂はあつたが、大閤の身に異變は無い、日本一の上機嫌、十人に足らぬ近侍衆を從へて、彼方此方と遊び歩いた、其の間に多少の隙あるべきが當然なるに、秀吉の軀は金鐵に包まるゝが如く、一點の隙も無かつた、悠々として高く笑ふ間にも、鋭き目は八方に働いて少しの油斷も見せなかつた。

其の爲に大名小名浪人武士悉く息を潛めた、心に刃を磨いた者も、鞘を脫するに至らずして息んだ、一日の茶會は明智佐々の殘黨を殺した上に、幾百の大小名に、大鐵槌を加へたのであつた、兎もすると頭を上げやうとする者の上に、大きな石を置いたのであつた、秀吉の大威光は此の時から更に輝いた、夫までは多少の野心を抱いて居た者も、到底企て及ぶまじきを覺悟して一齊に歸服した。

大茶會の終つたのは申の下刻であつた、秀吉は悠々として桃山の城へ歸つた。

二十三　聚樂第

（一）

秀吉の畫策する處、一として功を奏せざるは無く、又一として行はれざるは無かつた、北野大茶會の如き、何人の手にも企て及ぶまじき事を、秀吉は容易く行ひて、京の人々を驚かし、大小名の荒膽を取り挫ぐ、今は秀吉に向つて蟷螂の斧を揮はんとする者無し、天下第一の勝地といふ伏見向島の風光は、悉く秀吉に媚びるが如く、目の前に開かれ、天下第一の美人と呼ばれる淀殿は、秀吉の機嫌を迎ふる爲に粧ひを凝らされる、秀吉は已に天下諸大名の意嚮を見極めた、此上は東の方に北條一家を討ち、國内統一の實を堅うして、朝鮮に兵を出すべき計畫を定むるのが望みであつた、準備は着々として整へられる。

されど尚多少の不安がないでもなかつた、秀吉の地盤を固めるのは、朝廷との連鎖を堅うするにあ る、一の人として重きを置かるゝと同時に、朝廷の信任を深うして、六十餘州の人心を繋ぐにある、

彼は更にこれを思ふが故、前の年より奏請して、衷心から願ひ出たは、聚樂第行幸の事であつた。

最も容易なるまじき盛儀なればとて、前々より心構へす、天正十五年九月十八日、大阪城より移り て後、萬の調度、金銀を積みたる船數百艘、大阪京橋口より出て淀川を溯り、淀の城前へ漕ぎつけ、京都まで、五百輛の車と、五千人の人足とに依て、日ごとに運び入れられる、調度の設け由々しきに つけて、亭内の設備も又一通りならぬ計畫であつた。

設の御所は檜皮葺にして、御端の間に御輿寄せあり、庭上には舞臺を設け、左右には樂屋を作る、後宮の局、百官の詰所、百工心を碎き、丹青手を盡したるに由り、華麗莊嚴云はん方もなく、見る者其土工の優れたるに驚かぬは無かつた。

朝廷にては秀吉の願ひを容れさせられて、天正十六年四月十四日行幸の旨を仰せ出だされる、秀吉の光榮譽ふるに物ぞ無き。

已に當日となれば、禁中の奉行職、それ〳〵に用意を急ぎ、衞府の輩弓箭を帶し、上達部以下悉く參り集ふ、御殿の御守り其外の事嚴に定められる。

やがて南殿に出御あらせたまふ、御束帶の御衣は山鳩色とかや申す、御殿より長橋の御後まで、秀

吉關白と云ふに由つて御裙を取り奉り、陰陽頭反閇をつとむ、御劔頭中將慶親朝臣、御草鞋頭辨充房朝臣、鳳輦を御階の間に寄せ奉れば、左右の大將大臣例の如く勤むる、四足御門を北へ、正親町を西へ、聚樂第迄十五町の間、辻固の武士六千餘人と聞ゆ。

御行列の次第は、德善院玄以法印、諸家の記錄を伺ひ、故實の識者に尋ね、遠く應永永享の例に則りて定めたれば、華麗莊嚴人の目を驚かす、まづ烏帽子着たる侍を渡して、大典侍の局、勾當その外女官衆の輿五十餘挺、何れも簾をおろしあり、御供の人々、童姿まで流石に見えて花やかであつた、その後少し下つて、塗輿に乘つた供奉の衆は、宮方を始めとして、九條、一條、二條、菊亭、德大寺、飛鳥井、四辻、勸修寺、大炊御門、中山の諸卿、何れも隨身、烏帽子着の侍、馬副、布衣、雜色、傘持を召し具した、それに續いて左右前驅、鷹司大納言信房は左に、西園寺大納言實益は右に、次は伶人四十五人、徐に安城樂を奏でつゝ進む、次に鳳輦、御後に近衞左大臣信輔、北島內大臣信雄を始め烏丸、日野、久我、持明院、庭田、正親町の諸卿、德川、豐臣（秀長）、浮田、豐臣（秀次）、その次に秀吉花やかに扮裝て供奉をする、次には又前驅の騎馬武者ありて、諸國の大小名左右に列り馬を打たせる。

牽替の牛二頭、軸持、沓持兩人、牛童兩人は髮を下げ眉を作る、赤き水干の裝束、牛は紅絹に縫のしたのを着せ、牛面をかけ、金箔に角を塗る、沓は淺黃の糸を用ふるが古例であつたが、此の時は紅の緒が附けてあつた。

さて次ぎ次ぎの侍は數を知らず、馬上の裝束は五色の地に四季の花鳥、唐織浮織立紋縫箔などで、蜀紅の綾錦、目も覺るばかり、吉野山の春の景色、龍田川の秋の裝ひを、一所に集めたも同じであつた、然もその日は一天晴れ渡つて、紺碧の空塵も止めず、行幸御幸の記錄には、設の御所總門の外まで、家の主御迎へ申し上ぐる規定なれど、秀吉は敬恭を盡して供奉の中に加はつた、まことに近世例なき盛儀と知れた。

聚樂第に於ける日々の御饗應、申すも中々おろかであつた、その日は着座の御儀式を行はせられる、初獻の御土器から御氣色あり、三獻には天盃天酌五獻に及んで盆香合、七獻には御劔の獻上あり、とりん〳〵御さかな、くだ物、あつ物、金銀の作り花、蓬萊の島に鶴龜の齡、松竹の操なるに擬へて、千年を壽ぎ奉る、御宴滯りなく終つて、西表の御几帳を掲げたまふと、庭の遣り水に緋鯉錦魚の戲れ、木々の梢茂り合ふ若葉の中に、遲櫻、躑躅などの咲き殘る、池の汀の杜若、岸の山吹黃金を亂す、

今日の日も短きと思ふ間に暮れて、十三宵の雲間忽ち破れ、月は音羽の山の梢より溢れかゝるやうにさし出る、その詠め又捨て難きに秀吉は夜の管絃を催して御心を慰め奉る、一番は五常樂、二番は鄙曲、三番は太平樂、箏の琴は一條、四辻、庭田、飛鳥井の諸卿、琵琶は伏見、菊亭右府同じく中將の三卿、笙は大炊御門、伯三位、五辻の三卿受け持ち、四辻大納言、持明院中納言、五辻左馬頭發聲にて『德は是北辰の椿葉陰二たび改まり、尊さは尙南面の松花色十たび回る』と引き返し引き返し歌つた。

（二）

さて夜も明けろと、公卿百官參り集ひて、朝の政執り行ふ、設けの御所には、三日の御滯座と聞えたのが、御氣色殊に麗しく、五日の後、還幸との仰出されもあつた、秀吉の恭悅譽ふるに物も無い。されば今度の盛事を、後代子孫の者等、吾心を續いで、朝廷の御繁昌の祈り奉れ、との主意により、左の如き誓紙を奉つた、秀吉勤王の志、今に始めぬ事ながら、上下深くも感じ入つた。

一　京中の銀地子五千五百三十兩餘、可レ爲二禁中御料所一之事
一　米地子八百石の內、三百石院御所、五百石六宮關白領

一　於二江州高島郡一八千石、諸門跡諸公家衆へ進レ之
右如レ件

若御奉公懈怠之輩、於レ有レ之者、爲二叡慮一御計ひ被成候樣に可レ被二仰上一者也

天正十六年四月十五日　　秀吉

菊亭殿　勸修寺殿　中山殿

當時殿上の公卿百官誰とて秀吉の厚恩に預つて居ぬはなかつた、秀吉の大きな掌は文武百官を一摑にして、殆どその生殺與奪の權を握つて居たが、未だ一度も夫等の人に對して傲慢不遜の行爲をした事なかつた、『われ微賤より成り上つて、位人臣を極め、掛卷もかしこき殿上の交りを許され、永享以來絶えて無い行幸に遇ひ奉る事、實に望外の歡び、恐懼の至りなり、然あらば子々孫々に至るまで、上を守護し奉る可き事其身の冥加なるべし』と云つて居た。

末代奉公の忠を勵めよ』と下知をした、由つて右近衞權少將豐臣利家（前田）、參議左近衞中將豐臣秀家（浮田）、權中納言豐臣秀次、大納言源家康、內大臣平信雄の連名で、左の如き誓紙を差出し

た。

敬白起誓文の事

一就二今度聚樂亭行幸之儀一、各致二昇殿一供奉之事、誠以難レ有奉レ存候事

一禁裡御料地子以下並に公家衆御知行等存二疎意一間布候若散二私慾一無道之輩於レ有レ之者爲二各々一達て可レ致二誅伐一候當分之儀は不二申及一、至二子々孫々一無二異儀一樣に可二申置一之事

一關白殿被二仰出一候趣、於二何等之儀一聊不レ可レ有二違背一之事

右條々若雖レ爲二一事一、於レ令二違背一者、梵天帝釋、四大天王、總日本六十餘州大小神祇、殊に王城鎭守神、八幡大菩薩、春日大明神、天滿自在天神、別に氏神、部類眷屬、神罰冥罰、各可罷り蒙者也、

仍起誓文件レ如

その他長曾我部元親、木下勝俊、京極高次、井伊直政を筆頭として諸家の大小名又同じ意味の誓書を參らせた。

これやがて公武合體であつた、これやがて秀吉多年の志望その一半を成し得たのであつた。

整日は御歌會、此時秀吉も『寄二松祝一』を詠んだ。

萬代の君が御幸になれなれん
　綠木たかき軒の玉水

公卿百官それ〳〵に詠進あり、十七日は伶人舞の催しあり、十八日還幸の儀を仰せ出されて庭の松ケ枝、實に千代を壽ぐのであつた。

二十四　小田原征伐

（一）

次に起つたは相州小田原征伐であつた。

小田原の城主北條左京太夫氏政は、父祖代々關八州を領知して猛威を東國に振ひながら、未だ嘗て朝恩を恐れず、將軍家の命を奉ぜず、一度も入洛せず、臣民たる本分を盡した事が無い、秀吉は其の事を幣として津田隼人、富田左近將監を使者に差し下し、『早々入洛、天恩を謝し奉るべし、數多の國を領知爲ながら、朝恩の深きを思はざる者は、人にして

人にあらず』と理を盡し義を說いて度々忠告を試みたが、第一は箱根山の關所を恃むと云ひ、第二は遠國のこと、秀吉如何に武勇なりとも、足長に此れまでは豈夫動かじ、夫をも怖れず坂東勢に手を付くる事あらば、其の昔平氏の大將十萬餘騎の軍勢を率ゐて、由比濱原に陣を取つた時の如き辛き目を見せ奏れやう、坂東武士四十二の骨々には鐵の如き魂が籠つて居る、京大阪の緩若共が打ち出す鐵砲に傷けられること思ひも寄らぬ、秀吉もし我等に對面の要あらば、槍を伏せ兜を脫いで當城へ參れよと廣言しつゝ、津田富田の兩使をそこ〳〵に歎待し返した、秀吉は兩使の報告を聞き氏政に誠意なきを見て取つた、天正十七年十月十日五畿內、中國、四國、北國、駿河、三河、遠江、甲斐、信濃の諸國に布令を同して、軍役に任ずべき旨を披露し、來春三月一日出陣、小田原北條を攻め平ぐるの條、忠勤あるべき者なりとの沙汰をした。

夫には第一に兵糧彈藥の用意が無くては協はぬとあつて、長東大藏大夫を初め、其の下に屬く小本行十人に命じ、年內に二十萬石の米穀を買ひ集め、初春早々船に積んで駿州淸水へ同し倉庫を建てゝ入れ置いた、總軍勢到着の上、人數に應じて夫々相渡すべき旨の趣意であつた、其他黃金一萬枚を授け、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河の五國に於て、隨時兵糧を買ひ調へ、小田原近邊の巷口へ差し回

すべき旨を云ひ出した、大藏太夫は秀吉の旨を諒して、十月初旬より國々の大名へ米穀回送の沙汰を出し、路次中狼藉なきやうに奉行を派遣して、宿定め陣配りの規模を定めた、されば秀吉の總軍二十六萬餘と註されたが、軍法正しく、大藏大夫の指圖宜しきを得たので、聊かの口論もなく穩かに進發した、

やがて其の年も暮れて、翌れば天正十八年の春風長閑に吹いて、庭の梅ヶ香薰り深く、初鶯の聲々芽出度聞えたが、諸國の大名中にては、小田原進發の準備に屠蘇の盃も緩々上ぐろ暇なく、陣備の用意に脫なかつた、五畿內、南海、山陰、山陽、北陸並に江州、濃州、伊賀の勢を合せて都合二十二萬餘騎、伊勢尾張二國は北畠信雄の手に一萬五千、甲斐、信濃、駿河、遠江、三河は德川家康の手に二萬五千騎、三月一日に打ち立つて、國々の便利に從ひ、陣を取り軍奉行を定め、順序に由つて勇ましく出陣した、されば先陣は富士の根方由比濱原に充滿て後陣は尾張美濃の間に控へた、都の留守は毛利右馬頭輝元四萬の軍勢にて守護し、洛中洛外の掟、兼て定め置いた條目に從つて沙汰をした、されど惣程の大事に御加勢申し上げでは協ふまじと云ふので、家老吉川藏人に一萬五千の兵を授けて三河岡崎に派し、小早川左衞門尉に二萬の兵と安國寺惠瓊とを附き添はせて小田原表へ隨はせた。

出陣の用意は豫定の通りに成つた、秀吉の云ふ處一として、行はれぬはなかつた。

（二）

斯くて秀吉は三月十五日都を出發する、作髪に鐵漿黒々と染め黄金作の太刀を差し添へ、猩猩緋の鎧、金銀にて須磨の浦を蒔繪した鞍置いてひらりと跨ろ、華やかに若やいだ扮裝、見る人の目を驚かした、されば伽衆、お側衆は云ふに及ばず、近侍扈從の面々も我劣らじと華やかに扮裝つたれば行裝の美々しさ譬ふるに物もなく、洛中洛外の人々は云ふに及ばず、奈良、堺、大津、大阪等より見物に上り、中には棧敷を打つて行列を拜んだ者もあつた、秀吉は快げに大等の市人町人に會釋して悠々と打ち立つた、實に前代未聞の光景と見えた。

日數經つて二十八日伊豆の三島に着陣した、滯陣中の大小名は美しき姿、艷き扈從五六人を召從れ華やかに着飾らせてお出迎ひ申し上げ、無事御着の御祝儀を陳べ立てた、秀吉は愈〻機嫌麗しく、直に大小名を召從れて西の方面に當る高山へ登り、山中の城、韮山の城を眼下に瞰下し、明日より攻撃に掛るべき旨を沙汰して、三枚橋の陣屋へ入つた。

山中の城は北條家西の抑へとして伊豆の國高田郡山中に築いた要害であつた、韮山の城と共に上方口の總轄なれば、此の防禦最も肝要とあつて、倉能登守を加勢として派遣したのは、其の年正月二十日であつた、氏政は三人を呼び出し改めて盃を與へ、左衞門に兼氏の刀、豐前守に國吉の刀、能登守に備前物の脇差を引出とした。

『さて各、數年の武功今更改めて云ふ要も無い、此度豐臣秀吉大軍を引率して當城へ攻め掛るべき旨報知を得た、山中籠城の一擧最も大切、各〻忠勤に由つて、上方勢に一泡吹かせば、御先祖早雲公も草葉の蔭に御喜悦在さう、取分け豐前守は老功、平に賴み入る』と云つた。

豐前守は直ちに應じて、

『お詞までも無く、殿樣御威光を頭に戴き、命に掛けて忠勤を擢づべきの條、御心を安じさせられ』と事も無げに云ひ立てたので、

『天晴器量人、お家の柱石』と滿座どつと感じ入つた。

能登守は無言の儘座を退つたが、廣間に詰めて居た人々に向ひ、

『御當家の運命も早や極つた、山中の城は普請漫墓にて多勢を入るべきやうもない、然も我等三人へ

籠城の儀を仰せ付けられたは、在つて無きが如く思召されての故あらう、まことに命は義に由つて軽しとも云ひ、又事に由つて重し共云ふ、我等左衛門殿と共に潔く討死して、殿様冥土のお先手を勤むるであらう、一同心得候へ』と云ひ含めて立ち去つた。

秀吉の大軍は最初の戦を此の山中の城に仕掛くるのである。

秀吉は陣屋に入ると共に行水清々しく果して、様嫌よくお側衆と雑談、頓て箱根山、韮山、山中の絵圖面を開き、攻め口などを評する程に、夜は更けて本覺寺の鐘の聲嫋々と響き渡る、秀吉は山中攻めの総大将を秀次へ命じ、中村式部少輔木下美作守先陣たるべき旨を命じ、五萬餘騎を授けた、家康は小田原口、信雄並びに細川越中守、蒲生飛騨守、中川藤兵衛、森右近を韮山の抑へとして派遣し、天の明くるを待つて昨日見定め置いた高山の頂へ登り、其處に馬を立てゝ敵城を瞰下しつゝ、

『式部、式部』と呼んだ。

（三）

中村式部少輔心得て御前へ出る。

『此處より出丸までは十丁程もあるべきぞ、今少し陣を寄せて、仕掛け好きやう心掛けよ』と秀吉は云ひ聞けた、式部少輔は畏り、

『御諚の趣き御有理に存じ奉る』旨を答へて其の身の陣へ立ち歸つた。

中村家の大勇渡邊勘兵衛斯くと聞き、

『扨々一大事の御諚在し申した、此處から城までは山峰多く隔つて地の利もまた詳しからず在さう、無碍に御陣を寄せ給ふこと宜しかるまじ、在下眞先に參り見計ひ、左右申し上ぐべき條、夫まで此れに待たせられ』と云つた、式部少輔頷き、

『お身の口上有理と聞いた、早々樣子を見屆け參れ』と云つた。

勘兵衛は鳥毛の大半月の指物を指し、七尺餘りの大黒と云ふ名馬に跨り、一鞭當てゝ驅け出す、其の狀宛ら黒山の搖ぎ出たやうに見えた、山越え峰越え城近く進み寄つて見ると、遠くから見たとは變り思ひの外に普請も粗末であつたが、出丸から張番して居た鐵砲組の者五六十人、勘兵衛一人其の邊を乘り廻つて居るを見るより、一齊に釣瓶打つた、勘兵衛は雨霰と降り注ぐ彈丸の間を驅け回り、煙の隙間から見ると、出丸先の幅は漸う三十間に過ぎぬ、縱し城兵幾萬人にて籠るとも、彼の出丸に出

て働く勢は五六十の外あるまじ、味方の捷利云ふまでも無い、急ぎ大勢を寄せられ然るべしと思ひ注いたので手に持つ采を振り動かし招いた、式部少輔斯くと見て、地煙を立て、七八丁もある處を驀地に駈付けろ、勘兵衞は、

『在下に續け者共』と云ひ様、馬に打ち乘り塀際へ馳せ付けて、堀へざんぶと飛び入つた、後より十人餘りの者引き續いて進み來ろ、勘兵衞は眞先に打ち上り、早や塀を越えて城内へ乗り入つた、式部少輔は、

『彼れ見よ、鳥毛の大半月の勇しい振舞を見よや見よや』と云ひながら大貝を吹き立て、早鐘を撞き鳴らし勵ませる。

勘兵衞後を顧眄ると、成前平左衞門、渡邊新右衞門、赤井久左衞門等續いて居た、出丸の幅は三十間餘り、長さ三丁餘りあつたを、勘兵衞は面も觸らず進み行く、敵も二三度は返し合せて戰つたが、隙間もあらせず追ひ立て追ひ立て三の丸の塀近く追ひ入つた、尤も式部少輔の手の者のみで他家の勢は一人も交へぬ、右の方を見ると大毋衣掛けた武者二騎驅け行く、夫に續いて搦手へ乗り入れ、彼の毋衣武者を打ち取つて、式部少輔の實見に供へた。

勘兵衞は剛勇並びなき軍の上手、手頃の槍を隆々と扱きつゝ、何時も眞先に進んで早三の丸を攻め落し、二の丸近く進み行くと、其の間に大きな壕あつて、春の水滿々と湛ふ、夫に十間餘りの橋が架つて居た、城兵はよく〳〵慌てゝ居たと見えて、其橋を引かずに居たのは勘兵衞武運に協うた處、飛鳥の如く渡り越えて二の丸へ驅け入つた、後には逸夫の面々二十人も續く、城兵は斯くと見て本丸から鐵砲を打ち掛け、矢を射掛くろ、勘兵衞は大杉の下に走り付いて味方の多勢驅け付くるを待ち、短兵急に攻め立てた、城主松田兵衞太夫を初め田宮北條朝倉の三家も叶はじと思つたか、潔く切腹して、山中の城は纔三時が間に落ちた、まことに勘兵衞の手柄であつた、勘兵衞一人の働きに由つて式部少輔の手にさしもの要害を乘取つたは、前の世に聞きも及ばぬと、式部少輔嬉しさの餘り馬標を本丸の櫓に立てた、秀吉は其の體を見て『式部少輔今日の手柄歡び思召す』との使兩度に及んだ。

（四）

小田原の城内では、秀吉大軍を引率して三月當國へ向け發向すべき旨聞えたので、伊豆、相模、武藏、上野、下野、安房、上總、下總の兵四萬餘騎、夫に人足三萬人を籠め置いて、晝夜を分たず城を

普請し、要害を堅固にして楯籠つた、多勢ではあり箱根山と云ふ天然の關所は抱へる、秀吉如何に鬼神にても、容易く攻め入ることなるまい、今にも當城間近く參らば、辛き目見せて、都へ追ひ上せ吳れやうなど、寄ると觸ると廣言を吐き散す間に、上方勢早や駿河邊に充滿て、山中の城瞬く隙に落ちたとのこと が聞えたから、氏政は今更のやうに騷ぎ慌て、役所を定め要害を作り、夫々に忠義の侍を籠らせた、宮城野口は松田尾張守、上田上野介、原式部太夫大將として安房、上總の人數一萬二千、湯本口は千葉新助大將として其の勢八千、竹浦口は北條武藏守、成田下總守、水川山城守大將として都合一萬餘騎で堅めた、宮城野、湯本、竹浦の三箇所は何れも箱根の要害であつた、斯くして此處に役所を構へ、上方勢を防ぎ戰はゞ、翼あるものはいざ知らず、人間の身が通行すること豈夫爲るまじと安堵して居た。

處も三箇所の要害も秀吉を敵としては何の效も無く、上方勢は夫等の人數に目を掛けず、峰より峰を傳ひ、谷より岡へ出て、幾萬の軍勢關の聲を揚げ襲ひ來たので、三箇所の要害に籠つた者等は、一支もせず四月一日小田原の城へ逃げ入つた、氏政を初め總軍勢『此れは此れは』と憫れ果てるのみ、日頃の廣言に似も遣らず、さらばと云ふので總構の人數配りが初めた。

秀吉の先陣は德川家康が承つた、秀次は小田原攻の大將、血氣に任せ進み行かうとすると家康切に

押し止め、

『暮れ掛けて下山に陣は取らぬものと申す、北條氏政、弓矢取つて後れた事のなき大將、如何な手術あらうとも知れぬ、今夜は此れに在しませ』と諫めたので、秀次も止むを得ず其夜は箱根山の中腹に備へを堅め、大篝を焚いて用心嚴しく夜を明し、翌二日四方の攻口を定め、未明から城を引き卷き、晝夜を分たず攻め立てた、されど城內は物の數ともせず盛んに應戰して、坂東武士の骨を見せた、羽柴勢は多勢に任せ晝は弓鐵砲を打ち掛け、關の聲を揚げ、夜に入つては、石火矢を四方より射込み、鐵砲を未申の角より打ち初め、子の方で打ち收めるやうに爲掛けた、城中からも負けず劣らず釣瓶返し釣瓶返しを合せたので、雙方少しの優劣もなく、毎日毎日同じ攻勢、同じ防禦、數十日空しく過ぎて、五月中旬に及んだが、夫でも城は大磐石であつた、流石は代々武功高き北條家の根城だけあると、秀吉も感じ入つた。

五月雨頃の常として日毎に雨そぼ降る、青葉隱れに啼く杜鵑の聲も寂びて、陣中の者皆退屈した、恁ろ折には兎もずるとあらぬ風說湧き出でて人々を驚かすこともあつた、秀吉の大きな手に二十餘萬騎を握つて、陣配り其の他油斷なく爲向けては居るが、夫でも隙間々々に樣々な取沙汰が起つた、石

田治部少輔或日御前に膝行り出で、

『殿下御聞き及びも在らせられござりませう、可怪き風説陣所々々に聞えござります』と蕭條に云つた、秀吉は笑ひながら、

『如何な風説ぢやい、夫聞かう』

三成は秀吉の信用厚い者であつた、これといふ武功は無いが、智慧才覺には誰れ肩を併ぶる者もないのであつた。

（五）

『高く申されぬ、徳川殿北畠殿御同心、城中と御内通あるやうに申し觸らいて、陣々の侍共危惧の念を懐き申す。徳川北畠の兩家殿下大恩を被させ給へば、豈夫左樣の御企であるべくは存ぜれど、付られぬは人心、殊には先年小牧御陣の御遺恨もまだ解け給はぬ、或は風説が眞實を生まぬとも限りませぬ、能く能くお心注けさせられ』と治部少輔は忠義顔に知らせた。

秀吉は只笑ふばかりであつた、治部少輔は焦慮し氣に、

『猥に此の事風説に止まるとも爲さゝせられ、陣々の中に疑惑を挟む者出來しては御威勢の障りとも爲る、殊に當所御着陣以來、山中の城落城、田宮豐前守一味の者切腹あつたばかり、未だ一箇の首級も得させられぬ、從來に例なき儀、此の上幾月日の御陣とも知れませぬ、其の間恁樣の風説湧き起つては、何かに付けて宜しかるまじき儀、只御思案在らせられ』と重れて云つた。

秀吉は頷いたが、

『諸事は捨て置け、人の口に戸は立てられぬ、味方の不和は疑ひより事起る、捨て置け捨て置け』と事も無氣に答へた。

其の翌日の事であつた、秀吉は案内も無く屋從五六人を召し從れたばかりで、家康の陣所を不圖訪れた、前觸もなく火急のことなれば家康を初め家中の面々驚き騒いで出で迎ふるを、

『捨て置かせ捨て置かせ、長々の滞陣、殊に昨日から降り續いた雨、所在なさにお訪れ申した、今日は一日御面倒申す、さしたる軍もなし、三州殿も嘸御氣鬱、小謡ども樂み申さう』とさも打ち解けた狀であつた。

家康は歡び迎へて茶菓を歩待し、晝餐には山海の珍味を用意して香佳い酒を侑めた、本多、酒井、

榊原、大久保等徳川家に聞えた侍共皆伺候して興を扶けた、秀吉は愈〻打ち解け、未の上刻まで遊び暮して、また飄然と其處を辭したが、其の身の陣所には歸らず、そぼ降る雨の間を今度は北畠信雄の陣所へ入つた、思ひ掛けぬことなれば、主從驅け出でて迎へ入れた、秀吉は心の底までも解いて、

『さて〳〵長陣にて退屈に思召さう、我等も此度の軍旅に飽き果て申した、さればとて眼前の敵城を打捨て都へ歸ることも爲るまい、兎角は退屈の無きやう遊び暮す外あるまい、今朝から三州殿御陣へ參つて、手厚い饗應を受け申した、今から酉の下刻までは當家の御雜作に預り申す、家老の面々、御家中の忠臣、何れも一座、連歌ども樂しみ申さう喃』と他事も無く云つた。

信雄は秀吉の機嫌斜ならぬを見て歡び勇み、樣々の饗應、樣々の趣向、夕餐の膳には尾張から到來した干鮎を參らせ、銘酒を煖めて玉の杯を侑めた、秀吉は此處にてもまた半日を面白く送つて、戌の刻其の身の陣所へ歸つた、秀吉の一日の淸遊、何氣なき訪問ではあつたが、此れに深い心を罩めた、斯して德川北畠兩家と他事も無く往來ふ狀を見ば、あらぬ風說に疑念を懷く人々も必ず安堵するであらう、さらば一致して敵に當ることもなると、思ひ注いたのであつたが、其の考へは正しく的中して、其の日を限りに再び忌しい風說を立てる者も無かつた、石田一派の人々が深く心配して居た事も、秀

吉一日の仕方で悉く絶え果てた、心ある者は、

『扨も凡慮に及び難き御才覺、幾萬人の智慧を集めても、殿下一時の御分別には及びも付かぬ儀』と感じ入つた。

（六）

されど五月雨は日を重れても降り止まなかつた、來る日も雨、來る日も雨、夫に捗々しい戰鬪は無くて、墅の如き小競合、只晝夜を通じて弓鐵砲を打ち掛くるのみであるから、總軍何時とはなしに草臥れ果てゝ、朝から欠伸の聲が聞えた、秀吉は其の事を洩れ聞き、

『斯くては爲らじ、德川北畠兩家と不和あるやうに取り沙汰したとは代つて、疲勞の氣全軍に充ち渡らば眞逆の時に正氣ある戰は爲るまじ、諸し諸し人氣を引き立て遣ろ』と陣中に歌舞伎を催し、唱歌を謳ひ、踊をかけ、日となく夜となく歌ひ囃させたので、上下の氣自ら新しく爲つて、此處にも彼處にも笑ひ聲絶え間なく、退屈處か、斯てあらば幾年を陣中に送ろとも、絶えて苦勞はすまじと云ふに至つた、秀吉は更に諸大名の心を浮き立たすべく、或る時は數寄屋を圍つて橋立の茶壺、玉堂の茶人

等を飾り、家康・信雄、氏郷等諸大名を請待して、細川幽齋子の利久、前波半入等に相手させ、手練ら棊を立て振舞ふこともあつた。また或時は十六七歳から二十位までの青女房に給仕させて、様々の鉾酒を饗應し、興を盡すこともあつた。

『半入小唄をせ』と所望あると、半入齋は立ち出でて聲麗しく舞ふ、滿座夫に興じて長陣の疲れを一時に忘れたやうに爲ろを待ち、

『皆が踊れ皆が踊れ』と指圖する、夫に從れて花の如き若衆四五人も立ち連れ、拍子面白く舞ひ躍る金の扇の香ひ最と麗しきを十本程取り出して投げ遣ると、若衆は取り上げ颯と開いて、

『とんどろ〳〵とどろ鳴る釜も〳〵湯が沸騰るし〳〵、や、沸騰ろ……』

と唄ひ舞ふ、まことに數寄屋の釜の蓋も松風の音に沸き返つて、拍子を合せるやうに聞えた、釜の蓋が拍子を合せるばかりでなく、此の一座の催しには、二十六萬餘騎の軍勢が、一時に拍子を合せて、殿下の萬歳を壽き祝つて、勇氣前に百倍して來た、其處へ前田利家父子が五萬餘騎を引率して到着した。

然も小田原の城は巍然として立つて居た、附屬の城々は殘りなく秀吉の手に屬いたが、總大將氏直

の籠る小田原の本城のみは、三十餘萬の大軍に圍まれながら鐵石の如く構へて居た、秀吉も手の着けやうなく、徒らに長陣を張るばかりであつた。

處が北條家の重臣に心變りの者が生きた、さしも金鐵の基礎を食ふ恐ろしい蟲が生た、松田尾張守憲秀は夫である。

憲秀は北條家譜代の家來であつた、知行一萬餘石、人數五千餘騎の長として威を關東に振つて居た、聞えた子福者で、それが皆地位を得た、長男笠原新六郎は國器の才があり、二男松田左馬助は忠義の志厚く、三男彈三郎は學問に譽れがある、中にも二男左馬助は、性來美はしく氣質も尚素直であるので、氏直の側近くに召し使はれ、他に優れた寵愛も得て居た。

斯く一門緣類悉く主恩の深きに浴しながら、憲秀密に主の運命の果敢なきを思ひ、子孫百年の計を立つるは、秀吉の手に屬いて、忠勤を勵む外あるべからずと思ひ付くに至つたに付、秀吉苦肉の謀計があつた。

秀吉は小田原の城、容易く落つべきさまも無し、此の上は異つた手術を用ふるが肝要とあつて、六月の初め、土方から到着した酒機に、堀久太郎の狀を添へ『陣中の徒然を慰め申す』旨を書き記し、

憲秀の陣へ送つた、憲秀の陣は久太郎の陣と相對して居た。

憲秀は敵將の心やさしき仕方を歡んで、此方からも物を贈つた、それについて文通が屢々ある、久太郎は機を見て、降參をすゝめて遣つた。

憲秀も初めは耳を傾けなかつたが、秀吉の威勢を思ひ、北條家の末路を悲む心から、遂に降參と決心して、その旨を久太郎の許へ云ひ遣つた、秀吉の計畫は正しく中つた、これ天の與ふる處、然る上は伊豆相模二箇國を永代宛行ふべき旨、久太郎から返事をした。

（七）

憲秀はこの返書を見て、當家子孫繁昌の基、こゝに開けたと歡んで、早速左馬助を招き、さて云ふやう『今日態々其の方を呼び寄せたは餘の儀でない、近年氏政氏直兩公、在下に對し、さほどにては あるまじき事を、さん〴〵に惡口あらせられる、之は其の方も承知であらう、されど時を得ざるに由つて、憤りを押籠め、無念を堪へて、今日までは過ぎて來たが、今は進退罷りならぬ、此度深く思ひ立つことあつて、關白殿下へお味方する、其の方も同心、我等鬱憤を散じくれよ』と口説いた。

左馬助は忠義厚き者、殊に氏直の寵愛を被つて居る、父が思ひ掛けぬ逆意を聞いてはら〳〵と涙を流し、忌しき御詞を承り奉る、當家は北條家代々の家老にして、莫大の地を領し、政道をも取り行ひあらせられ、一門一族誰とて恩澤を蒙らぬは無い、假令如何樣の御恨みあらせられても、今さら相恩の主君に弓を引き給ふは義に外れる、强て思ひ止まらせ給ふやうと、舌の爛れるまで諫言したが、憲秀は聞き入れる樣もなかつた、左馬助は忠孝兩道の間に挾つて、二日二夜は食事もせず、一間に籠つて思案に暮れた。

すると憲秀はその月十四日の夜、長男笠原新六郎、三男彈三郎、それに左馬助を加へ、重家老二人を招いて數寄屋へ呼び入れ、自分手前にて茶を出し振舞ひて後、

『一座の者、何れも遁れぬ中と見ゆれば、一入賴母しく存じ入る、兎角を語るまでもない、當籠城も三日の間は出でまじく見た、それを何故と云へ、氏直公第一に賴み思召す成田下總守を初め、家中の面々悉く疑懼の念を抱き、皆己が身上のみを事らにするが故、上下の間に隔が生きて、何れも安き心がない、殊に搦手の大將羽柴利家、所々の枝城を攻め落したれば、當城涸魚の體となる、我等一人忠義を守つて、一門一族妻子眷族を一時に亡ぼさんことも口惜し、所詮殿下にお味方して、彼等の命

を救はうと思ひ立つた、就ては明夜細川越中守、池田三左衛門、堀久太郎の人數を、我等持口の丸へ引き入れ、當城を一擧に亡す旨約束した、皆が左樣に心得』と云つた。

兄弟も家老も、さして異議ある樣は無かつたが、左馬助は息も詰まるほとに驚いて『今は諫言を參らすとも御聞き入れあるまじ、切ては明日の日を延して、兎も角も思案せう』と思ひ付いたから、打案じた如く膝を前め、

『只々仰せに從ひ奉る、なれど此事初めて御談合あらせられたは入日、明日も又不成就日にて在します、願はくは二三日を御延引あらせられ』と勸めた。

憲秀は頷き、不成就日は面白からぬ、さらば十七日の夜と定め、この事殿下御陣へ御披露申し上げう』と云つた、

左馬助は云ひ甲斐あるを喜んで、一たん居間へ退つたが、いかにしても父の不道を視るに忍びぬ、又大恩ある主を見殺しにするには忍びぬ、夜も深け、人も靜つて後、物の具に身を堅めて、密に氏直の寢所へ忍び入つた、氏直は驚きながら、

『左馬助か、何として來つる』と云つた。

『御願ひ在します、恐れながら父憲秀の一命を左馬助に遣はされ、すれば一大事を申し上げ奉る』と思ひ込んで云つた。

『他ならぬ汝の願ひ、確に聞き置く、一大事といふを申せ』

氏直の斯く云ひて、不審の眼を輝すを沈つと見入りて、

『確とござりまするな』と念を押した。

『勿論の儀、憲秀は當城の柱石ぢや』

（八）

左馬助は幾度も幾度も念を押して後、熱湯の如く迸る涙の間から、父憲秀逆意の旨を打ち明け、

『恐れながら事體急と見えござります、明朝これへ召寄せられ、御糺明然るべく存じ申す、子として親の大罪を訴人する心の中、唯御推量あらせられ』と云つた。

氏直は此の城朽ちるとも、家老共の心は變ることあるまいと賴んで居た望みも絶えて、人心淺ましく、世の中恨めしく、暫くは調なかつたが、やがて左馬助を慰め勞はりて歸し遣り、十五日の朝、憲

秀へ登城致すべき旨を申し送つた。

憲秀は一大事の祕密早くも露顯したとは思ひがけぬ、召に應じて登城すると、氏直の一族北條陸奥守、廊下に待ち受け『御諚に由つて糺問致す仔細あり』と云ひ渡し、一間へ伴つて詮議した、憲秀も最初の間はさま〴〵に申し陳じたが、左馬助白狀の事を聞くに及んで、今は包み祕すことも爲らず『全く心得違ひ、只左馬助は忠義厚き者、彼の一命のみを助けさせられ』と白狀した。

由て陸奥守から、その事を氏直へ報告する、氏直は篤と聞き終り、

『末代堅固であるべく頼みあつた城々は、利家の爲に攻め落され、腹心の家老重役は、利慾に惑ひて敵方に内通する、城を枕に花々しく討死、先祖の名を穢すまじと思ひあつたが、此の上は是ぶに及ばぬ、愁に見込なき戰爭して、罪もなき雜人婦女を殺すより、憲秀の首級を切つて殿下軍門に降服し、籠城の者共を救ひ助くるが優であらう』と思ひ極め、一族一門の人々を招き寄せて、死後の始末、籠城の人數の處置、その他の事共殘る方なく命じ置き、七月六日の朝、憲秀に詰腹を切らせ、その首級を提げて、馬上ゆたかに打ち跨り、老黨山上郷右衛門一人を伴れて、家康の本陣へ驅け込んだ。

家康は隣國の間、二十年來親しく交りを結んで居る、氏直の覺悟の潔きを聞いて、

『有理の存分と聞き申す、なれど我等とは緣類の間、殿下御前へお執次ぎも致し難い、羽柴下總守へ申させられ、下總守は情ある武士でござる』と云つた。

氏直は家康に別れを告げて、下總守の陣所へ出向いた。

『北條氏直、殿下へ降參仕る、然る上は父氏政以下の命を續がせ給へ、卽日城を渡し申すでござらう』と云ひ込んだ。

下總守は男らしき氏直の仕方に感じ、直ちに秀吉の前へ執次いだ、秀吉はつく〴〵聞き、

『近頃奇特の存分、如何やうにも望みを遂げさせ遣はせ』との御諚であつた。

下總守は右の趣きを氏直へ申し通じた、氏直は悅び歸つて、翌日より九日までの間に準備を調へ、小田原七口の木戸を開いて、城中の武士を送り出した、落人となると、百姓浪人取りまきて、狼藉を盡す習ひであるから、よく保護を與へよとの沙汰に由つて、脇坂淡路守、片桐市正嚴重に内外を取り鎭めたので、數萬の軍兵、老人子供婦女に至るまでおのがさま〴〵落ち延びた、時しも初秋の風相模灘の上より吹いて、薄尾花咲き亂るゝ間を具足櫃荷はせ、妻子眷族を引きつれ、槍を伏せ頭を垂れて、落ち行くさまの憐れさ、見る者涙を流さぬは無かつた。

氏直父子、昨日までは八箇國の主として、威を關東に振つた身が、今日は城地を人手に渡して、醫師安清軒の屋敷へ引き取つた、秀吉はそれ等の模樣を注進に由つて、悉く聞き、やがて德川家康を呼びに遣つた。

（九）

家康はすぐ參上する、秀吉見て、

『只今呼び寄せたは別儀でない、此の度三十萬騎の軍勢を率ゐて、此まで出陣したは、唯北條家を打果す爲ばかりであつた、然も氏政以下悉くを助命せんこと、最初の覺悟を忘るゝに似て快からぬ、所詮は左京大夫氏政、陸奥守氏照（氏政の弟）に腹切らせ、氏直兄弟を助けやうと存ずる如何あらう』と相談した。

家康は『御諚御有理』と同心した、氏直とは年來姻戚の關係もあるので、可否を云ひ難ぬる場合もあつたであらうが、目下の地位としては、秀吉の命維從ふ外ないのであつた。

由つて秀吉は十日の朝、石川備前守、蒔田權佐、中江式部大輔、佐々淡路守、堀田若狹守、それに

家康から榊原式部大輔を添へ、檢視として安清軒の屋敷へ遣つた、氏政も氏照も覺て斯くあらうと覺悟して居たので、行水の間の猶豫を乞ひ、心靜かに覺悟して、氏政は、

雨雲の掩へる月も胸の霧も
拂ひにけりな秋の夕風

我身いま消ゆとや如何に思ふべき
空より來りくうに歸れば

と二首の辭世を讀み、氏照も又、

天地の淸き中より生れ來て
元のすみかに還るべらなり

と詠んで諸共に腹掻き切つた、秀吉やがて首實檢を終つて、都戻り橋に梟くべきよしを沙汰せられた、此の奉行を承つたは石田治部少輔であつた。

やがて小田原の城は、家康の手へ收められる、氏直は秀吉の命として、同じき二十日紀州高野山へ移された、供を許されたは、一族北條美濃守、同左衞門佐、家老松田左馬助、大道寺孫九郎、內藤左

近太夫その他近侍の者三十人、下々の者三百人、道中の賄ひ警固の人數まことに殘る方もない待遇であつた。

秀吉は關東八州の仕置を十分にし、北條家の舊領地を悉く家康に與へた、伊達政宗が初めて秀吉に謁したも此の時である。

斯くして北條家は滅亡したが、關東には尚歸服せぬ輩がある、秀吉は天下一統の實を擧げて後、大明朝鮮を蹂躙すべき希望であつたから、少しでも己れの權威を傷くる者は、誰彼の嫌ひなく斧鉞を加へた、北畠信雄が兎もすると、織田家の血族たる風を見せて、秀吉を輕視する傾きあるを慍り、伊勢、尾張の國郡を沒收して、伊豆國那賀鄉に遷したのは其一例である、家康は北條家の舊領を支配することになつたので、三河、遠江、駿河、甲斐、信濃、それに伊勢、尾張を加へ、秀次及び中村一氏、池田輝政以下の諸將に分ち與へ、引きつゞき大兵を率ゐて、奥羽諸國を征伐し、會津仙臺十一郡を蒲生氏鄉に與へ、淺野長政に命じて陸奥出羽の檢地を行はせ、十二月芽出度く京都へ凱旋した。

秀吉第一の志望であつた天下一統の大業はこれで終つた、天正十八年秀吉五十五歳であつた。

十九年にはいよ〳〵朝鮮征伐に手を着けた、同時に關白職を秀次に讓つて、自ら太閤と稱した。

次には朝鮮征伐、伏見城の增築、秀次の滅亡、大明との交涉、再度の朝鮮役、慶長三年の薨去に至るまで、まだ記述すべき事はいくらもある、材料も山の如く積まれてあるが、それは他日稿を改めて記すことにし、此の編は豐公の天下統一全く成りしを以て終局とする、讀者諒とせよ。

豐臣秀吉 太閤の卷（後篇終）

大正六年二月十日印刷
大正六年二月十五日發行

不許複製

著作者　碧瑠璃園
發行者　伊東芳次郎　東京市牛込區神樂町一丁目一番地
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地

發行所　東京市牛込區神樂町一ノ一
電話番町五三七・六一七一
振替東京一七一
東亞堂書房

臨刷豊臣秀吉後編
正價金壹圓五十錢

20
119
1.49
150
200
200
250
250
10.50

□東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田區上田屋書店　東京牛込區文明堂　同神田區芝文堂　同神田區岸田書店　同神田區勉強堂　同神田區二松堂　同神田區藤田書店　同神田區有隣堂　同神田區中西書店　同神田區至誠堂　同日本橋區林平書店　同日本橋區文林堂　同日本橋區丸善株式會社　同京橋區日吉書店　同京橋區北陸館　同京橋區前川書店　同日本橋區黒木書店　同日本橋區神林文昌堂　同日本橋區原書店　同京橋區新江商會　同京橋區森本書店　同小石川區日本堂

東京牛込區文明堂　同芝區岸田書店　同神田區勉強堂　同神田區第一有隣堂　同神田區第四有隣堂　同神田區弘文館　同神田區金三堂　同神田區盛文館　同神田區第一有隣堂　同神田區小川書店　同神田區實文館　同神田區松本書店　同京都市京都堂書店　同大阪市大阪堂書店　同神奈川町名古屋市神戸市京都市大阪市神奈川町

熊本市長崎書店　福岡市博文館支店　佐賀市大坪書店　長野市西澤書店　長崎市今村木泉堂書店　宇都宮市石川書店　前橋市左文字書店　秋田市小椿堂書店　弘前市青森市仙臺市富岡町南城書店　札幌區小樽區富山市金澤市新潟市長岡市高崎市目黒書店　金澤市中田書店　富山市宇都宮書店　新潟市松本書店　長岡市張屋書店　高崎市目黒書店　宇都宮市前橋市長野市佐賀市福岡市熊本市

□東亞堂發賣圖書目錄郵券貳錢御送附あれば即時贈呈す

碧瑠璃園先生著

縮刷

豐臣秀吉

全三冊袖珍美本
前篇一圓八十錢
中後一圓五十錢
送費各八錢

草莽より起りて、一躍戰國割據の群雄を慴伏せしめ、更に鵬翼を亞細亞大陸に張らむとせし、世界的大英雄豐太閤が波瀾萬丈の活生涯は、豈刻下日本國民の必讀すべき一大立志小說にあらずや。本書は碧瑠璃園先生が興味溢るゝ計りの史筆を揮つて、此天眞爛漫の大英雄が、龍驤り、虎嘯く、善鬪力行の大偉迹を精敘し、息氣をもつけぬ面白さの間に、吾人が立身の秘機を暗示せる古今無類の『新太閤記』にして、誰れが讀みてもよく分り、讀む度毎に味ひを增す、新春無二の好讀物也。